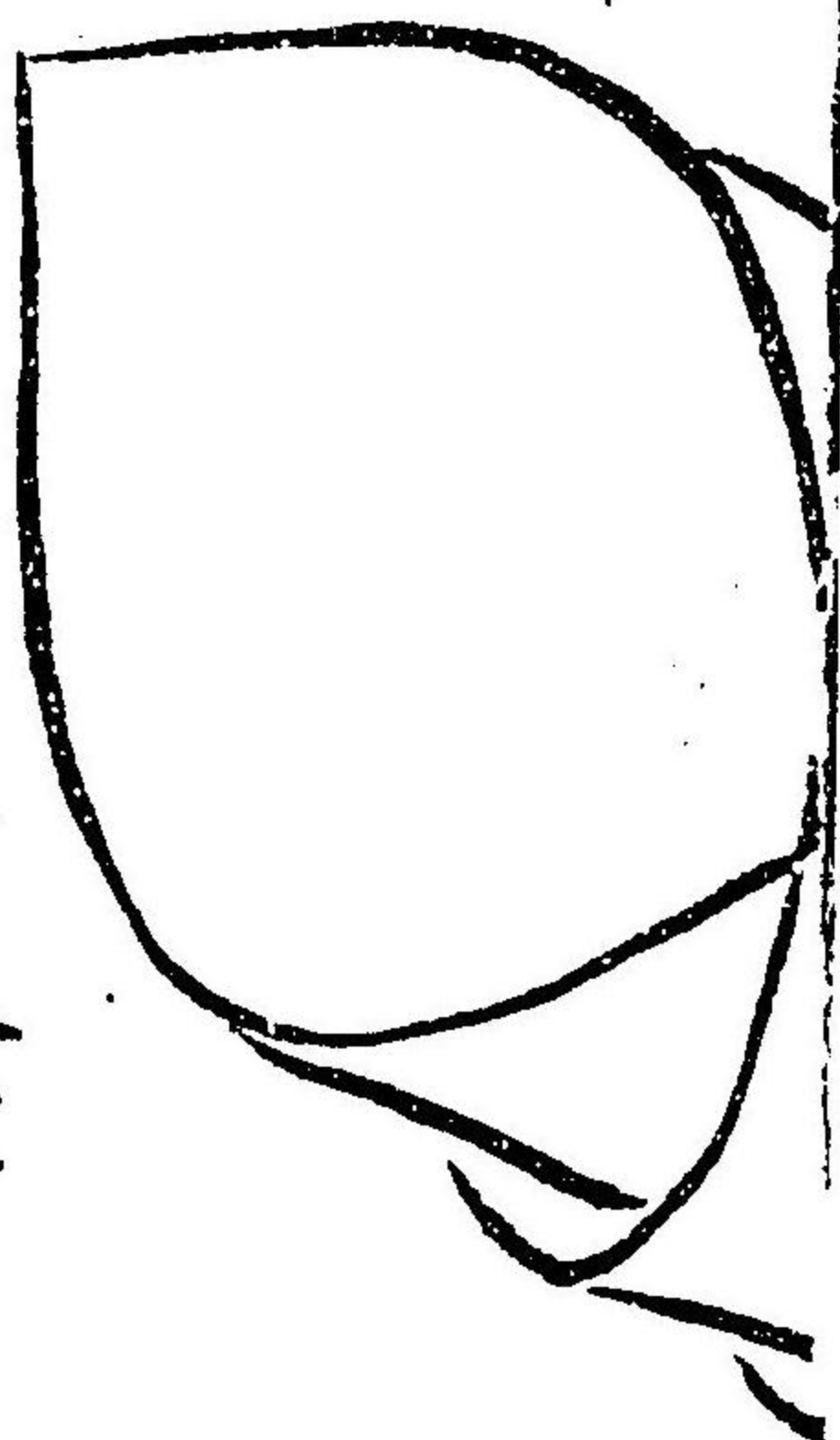
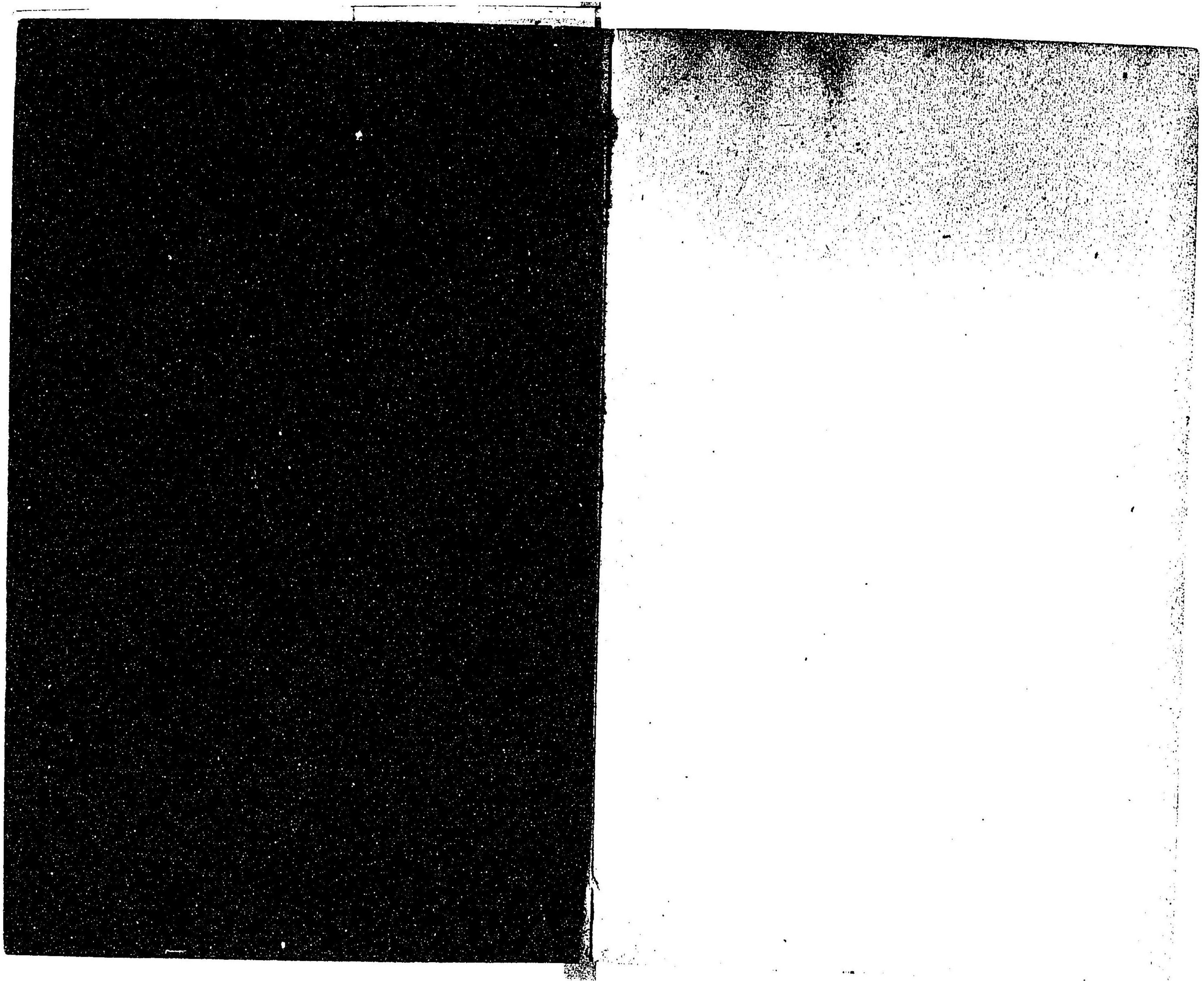


大和後武吉の古名所
 荒木又右衛門



浪花子
 木村市



特 63
387

鎮 重 の 界 浪 東 關

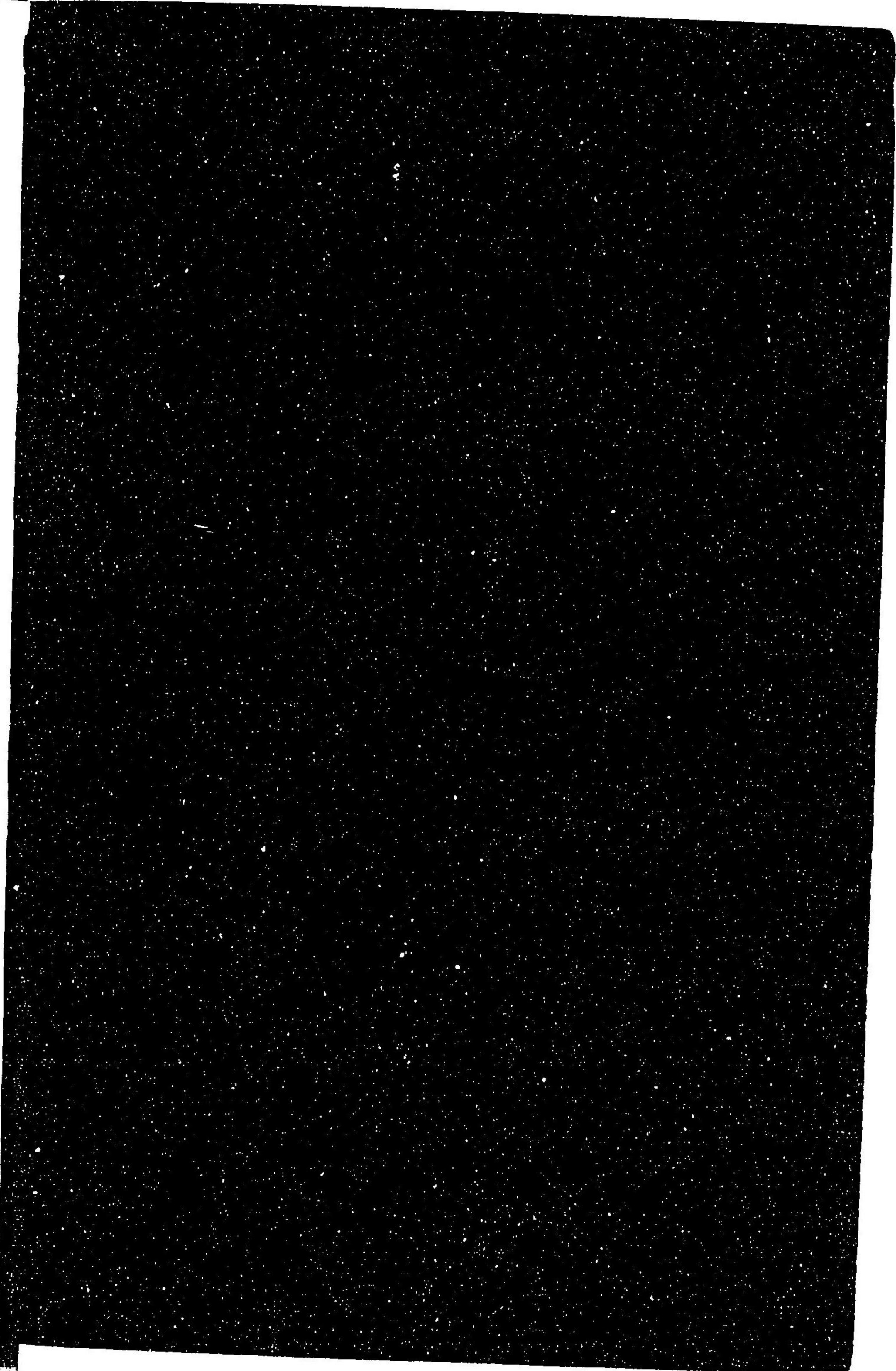


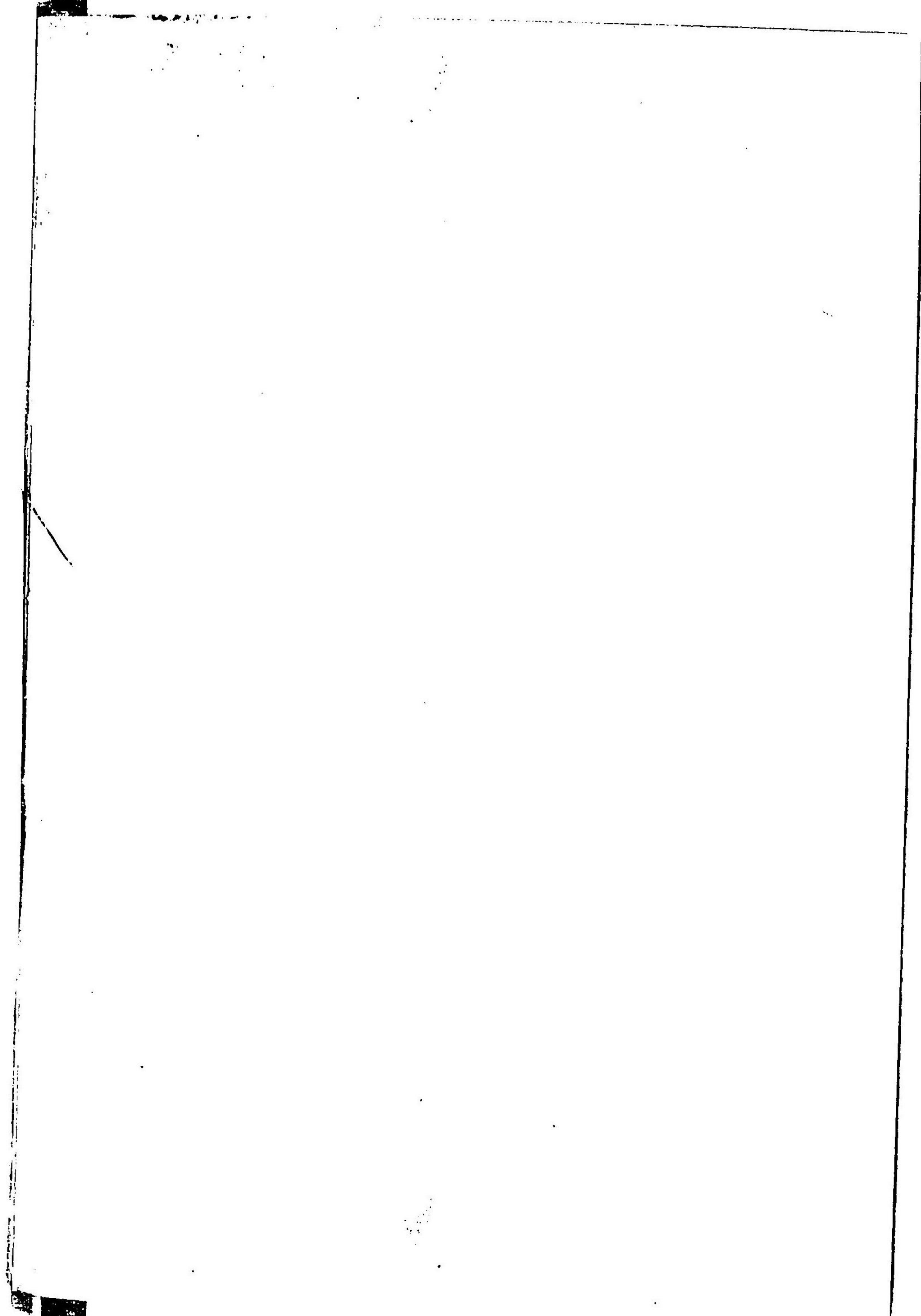
友 重 村 木

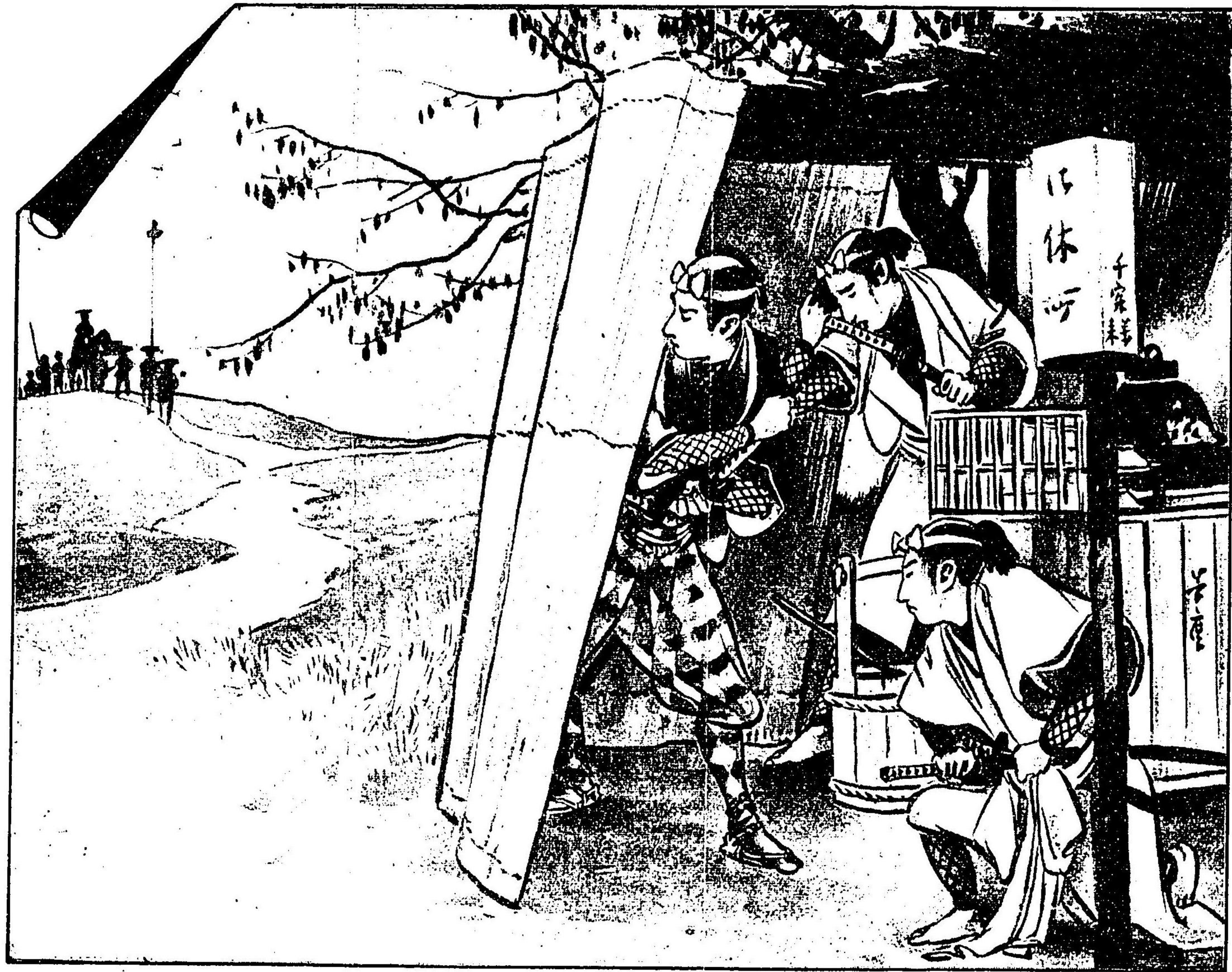
影 面 の 士 武 櫻 和 大

門 衛 右 又 木 荒

45. 3. 12
内 夾







伊賀の上野(鍵屋が辻)



荒木又右衛門

木村重友 講演

【第一席】

フシ(花は櫻木人は武士、武士の中なる眞の武士)
 古今無双の名劍士、義を泰山より重んじ、
 を鴻毛より輕んじ、義弟の爲に力を添へ、父
 の敵を討たしめて、伊賀の上野の名と共に、
 譽れを永く後世に、残したる荒木又右衛門義



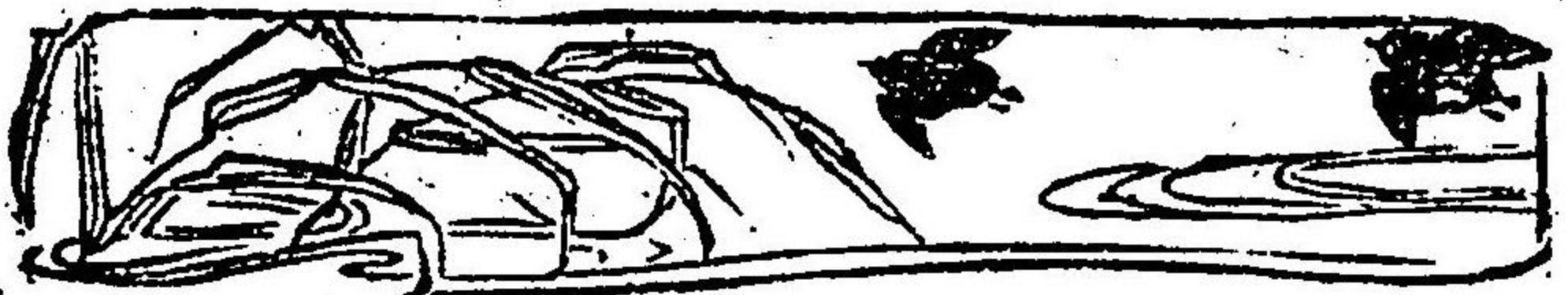


二
 村の、武士道美談の大略を、三筋の糸の調子にて、辯ずる聲もはり扇、暫時の間御清聴相願ふ。

エー柳生の家は大和國添上郡が累代の領地で御座升、然るに柳生大膳永家の代に故あつて其の領地を奪はれ、其子又左衛門次男權六等浪々の身の上と成て、次男權六が笠置寺の衆徒となつて、中の坊と號し、佛法歸依者と相成り然る處人皇九十六代後醍醐天皇逆賊足利尊氏の爲に笠置山へ落延玉ふた時、中の坊が奏聞に及んだのは、河内國金剛山の麓に楠正成と云ふ文武兩道の士が御座升、之を召されて朝敵追討の御繪旨然るべし、と

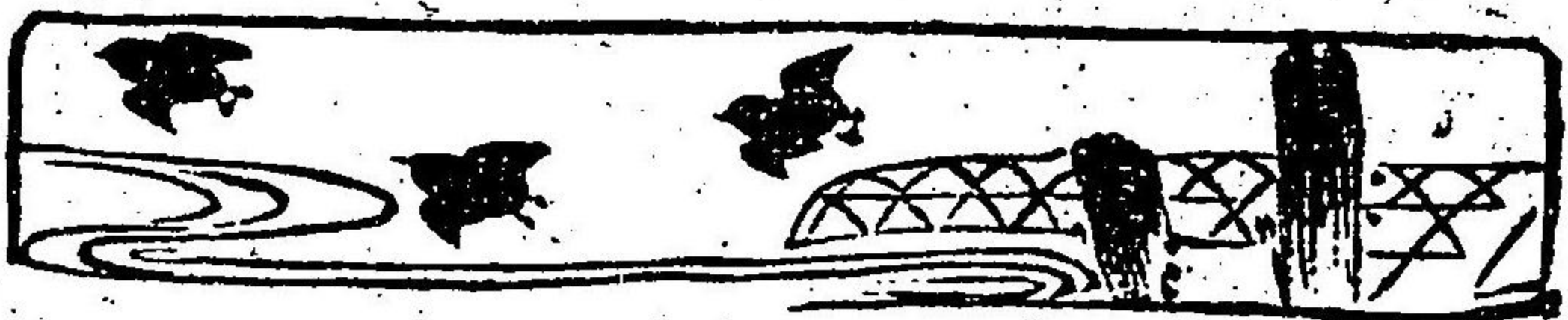


奏聞に及びしに天皇御聞取に相成り、直様楠を御召に相成り其功に依り舊領地を御遣しに成りました、中の坊播磨守と任官致しました、柳生の家は一と度中の坊と成たのは斯様な譯で御座升、忤が備前守、此の備前守家茂の代に再び柳生と改め、其八代目が柳生但馬守宗則で御座升、未だ但馬守が又左衛門と申した時に、其頃上州輪箕に下泉伊勢守藤原の秀綱と云ふ眞影流劍法の名人があり、秀綱は常陸國鹿島の住人天神正傳流祖人飯篠山城守に學び、天神正傳流より眞影流と云ふ一流を編み出した、此の伊勢守秀綱の四天王が柳生又左衛門、丸目藏人、神宮寺伊豆、疋田文吾郎で御座升、又左衛門は眞影流より柳生流と



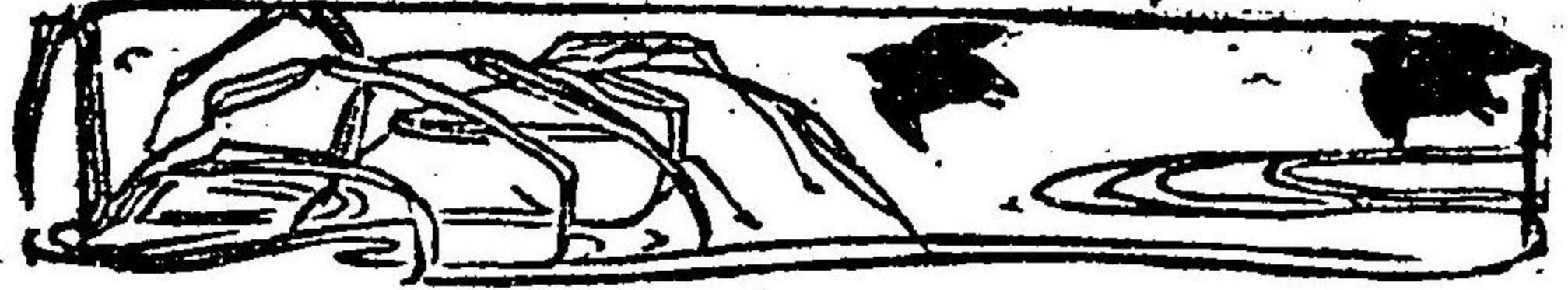
云ふ流義を發明致されました、然るに柳生又左衛門は、徳川三河守家康に従ひ、數度の戰場に出て功を立て、三千石を賜はり寛永二年大監察役を勤め、之大目付の元祖で御座升、夫より大和國添上郡正木坂で、舊領地合して一萬石、陣屋持で御座升、惣領が十兵衛、次男が刑部、三男が又十郎、四番目が婦女でお梅と申し、松平左近將監様へ嫁付、然るに十兵衛光義は武藝に慢じ、遂に發狂致しました、次男刑部は性來多病で在つたのが是も病死致され、三男又十郎は父但馬守の愛妾お玉と情を通じ何れかへ姿を隠しました。

フシ(江戸表は、木挽町五丁目の屋敷に居りました



父の但馬守宗矩公は、本年積つて五十六才に成りますが、惣領の十兵衛光義は氣が狂ふ、次男刑部は早世で、三男又十郎は行衛不明、只夫れのみが氣に掛かり、明け暮れ自己の身の上を、案じ暮らして居りますと、今日も今日とて、役目を缺しては相濟じと、登城いたされ、將軍の御機嫌を伺ひ、下つて來る。

向ふの方より威儀を拂つて御登城になるのは、是れぞ名代の品川は東海寺の澤庵尙和なり。但馬守殿は會釋を致されました。



和尚は柳生殿の顔を見ると血色が悪くから、

澤『柳生殿、何か御心痛の様に御見受け申すが、如何なされしか。』

柳『エー誠に心痛の事が御座います。』

澤『如何なる事で御座るかな。』

柳『惣領が久しく發狂致し、國元へ養生の爲に差遣はし、次男刑部は死去仕り、三男又十郎は家出を致し、世間には子供の無いのを歎いて居り升が、私のは子供があり乍ら、未だ世繼が御座いませぬ。』

澤『十兵衛殿は何才であるか。』



柳『二十二才で御座升。』

澤庵は暫く兩眼を閉ぢ、珠數をつまぐり考へ居られましたか、やがて柳生殿に向ひ、

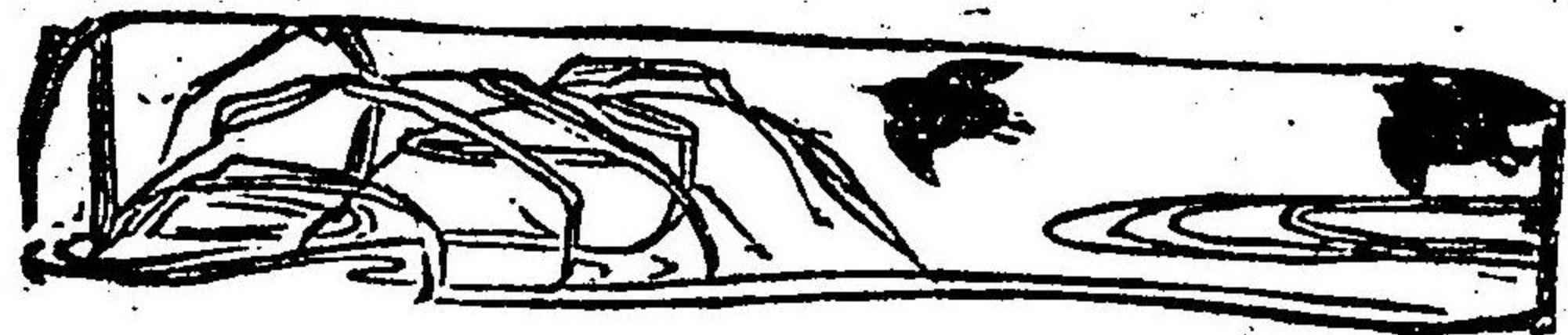
澤『御惣領は武藝で慢心致したのじやらうな。』

柳『左様で御座升。』

澤『近々必ず全快致す、安心致すが宜い。』

柳『悴が全快致しますか、ア、難有し、何分宜敷御願申上。』
と別れを告げる。

フシ『東海寺の名僧、澤庵禪師は品川へこ、お戻りにご相成ると、直様旅の仕度を致されて、品



川宿を跡にとなしまして、東海道を日に歩み
 夜に泊り、泊りを重ねて乗込來るのが、三州
 名代の岡崎の宿へ参られました。』
 時しも二月の中旬の事で、町の左りを見ると、一軒の掛茶屋が
 御座升。

澤『御免よ。』

婆『ハイお掛けなさい。』

澤『茶を一杯呉れ。』

婆『ハイ〜只今差上升。』

澤『餅を一ツ呉れ。』

禪師は餅を一ト盆お喰りになり、

澤『幾價だ。』

婆『十二文頂きます。』

禪師は首に掛けたる袋の中へ手を入れ見ると、持合せがない、

澤『老婆や、鳥目がある心得で食したが、一文も無い、誠に濟

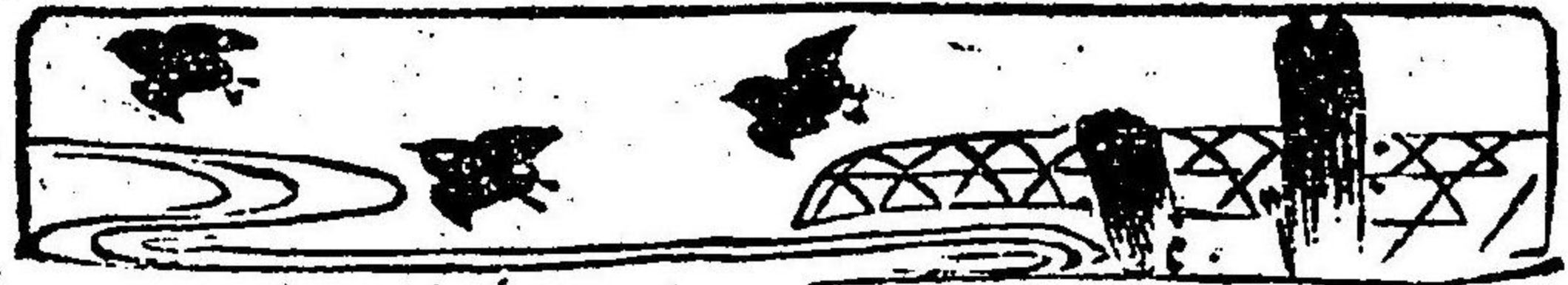
まないが、何うか此の珠數を鳥目の代りに取て置てくれ。』

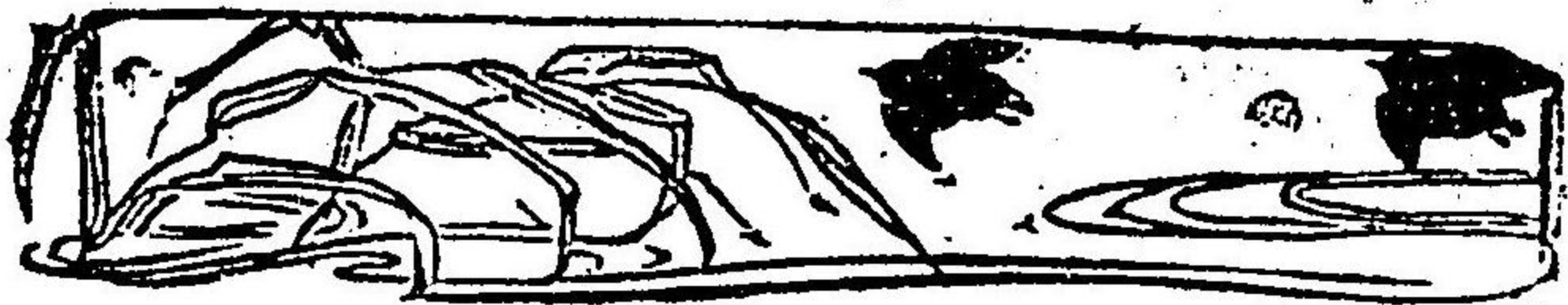
婆『イエお持合せがなければ宜しう御座升、其の代りに亡夫の

命日が今日で御座升から、何うか御經を上げて下さい。』

澤『夫れは奇特の事である。』

と禪師は暫く經文を唱へ終りて、腰の矢立の筆を取出し、短冊





にスラ／＼と御認になり、

澤「老婆、之れを遣すぞ。」

婆「坊様、之は何んと書いて御座升。」

頭陀袋手を差し入れて尋れど

何岡崎の茶の錢もなし

下に澤庵としてある。老婆は喜び家の寶と相成りました。是は後に知れたので御座升。禪師は道を急いで、大和國添上郡正木坂へとお着に成りました。柳生家の陣屋へとかゝり、御通用門から這入らうと致すと、門番が、

門「此處は陣屋で御座る、コレ／＼何所へ通る。」

澤「柳生但馬守方迄通る、但馬の忰十兵衛は未だ病氣全快は致

さぬか。」

門番は大層な事を云ふ坊主だなど思つて見ると、姿がひどいので不審な顔をして居るから、澤庵禪師は、

澤「江戸表但馬から頼まれて参つた。宜しく十兵衛に告げる。」

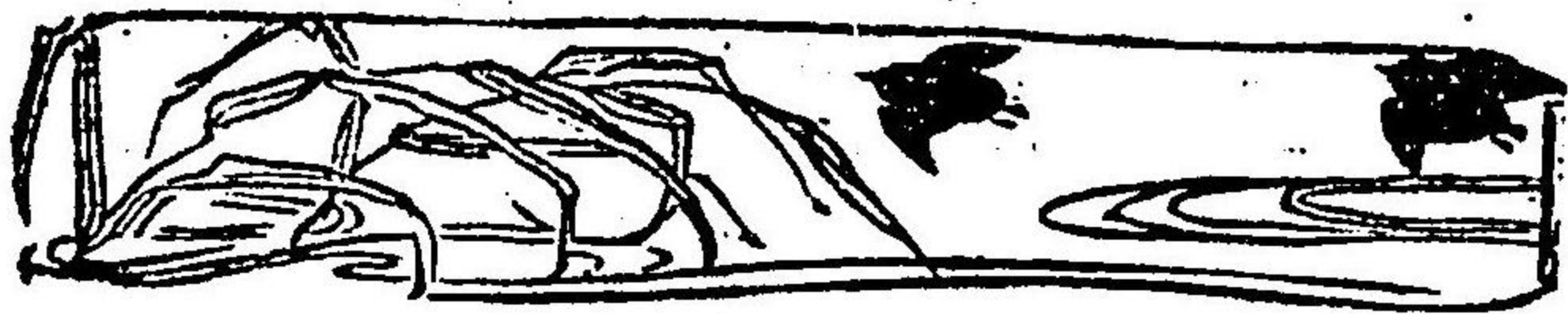
門番は驚いて早速此の事を上役へ話し、最も門番の下役はない暫く在つて一人の若侍出で來り、

侍「何ぞ此方へ廻りなさい。」

と案内に連れられて切戸を開き、庭へ通りました。

侍「暫く御待ちなさい。」





と奥へ這入り、暫くすると正面の襖が左右に開くと、

フシ現れ出たのは、是ぞ武藝に掛ては其頃ほひ、
天下の名人と云はれたる、柳生十兵衛光義公
黒羽二重に、向ひ雀の定紋付たるお羽織に、
仙臺平の袴にて、左の腰にと帶したるは、三
池の住人、傳多光世の銘刀を帶されて、右手
の方には、京の義則の鍛へたる、一尺三寸南
蠻鐵の扇を携へまして、御椽側迄御進みに相
成りまする。



光義公は禪師を見られ、

十「其方は何者だ。」

澤「如何に十兵衛、名前を聞くに及ばん。」

十「然れば如何なる用で参つた。」

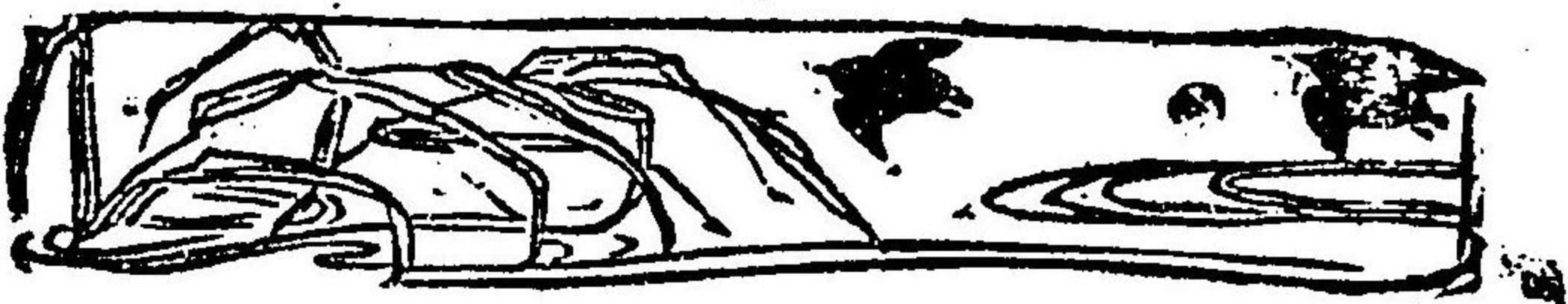
澤「十兵衛其方と、武術の試合に参つた。」

十「武術の試合とは、氣狂坊主め。」

柳生の家來一同は驚いて居る、十兵衛殿を呼捨にして居る、是
は氣狂の鉢合せだ、

甲「何方が勝つたらう。」

乙「熱度の強いのが勝つたらう。」



『是りやア尤もだ。』
と種々話をして居る。光義殿は、

『坊主仕度に及べ。』

『仕度に及ばん、試合の前に其方に尋ねる事あり。汝の劍は君子の劍か、小人の劍か、活人劍か、殺人劍か、答へ如何に。』
『活殺自在なり。』

『成程、流石は天下に聞ゆる名人なり、然れば今一ツ尋ねることあり、其方は只今の一言にて、名人と云ふ事は分つたり就ては武道の奥儀たる、歌をわきまへなば聞きたい。』
『それしきの事を存せざらんや。』



『なんと云ふ歌じや。』

『コレ坊主よく聞け。』

鳴瀧の夜の嵐に碎かれて

散る玉毎に月ぞ宿れる

『イヤ、夫しきの歌では天下の名人とは云ひ難い。』

『さらば。』

敵を只だ討たんと斗り思ふなよ

おのづからもるあばらやの月

『まだ、夫んなことは小兒でも知つて居る事じや。』

心ごは如何なる者を云ひつらん



墨繪にかけず松風の音

澤「十兵衛、汝此の歌の意味が解るや如何に。」

と澤庵禪師は懷中より一枚の短冊を十兵衛の前へ差出した、此時十兵衛光義公は手に取り上げて見ると、

たゝずむな往な戻るなるすわるな

勝な負るな知るも知らずも

何遍讀んでも解らない。

十「コレ者共、坊主を逃さぬ様に致せ。」

と其儘御奥へ御這入りになり、二日間は食事も致さず、三日目に至りて光義公は、



十「誰れか参れ。」

次間に控へて居た者が夫へ参り、

臣「御目覺で御座い升か。」

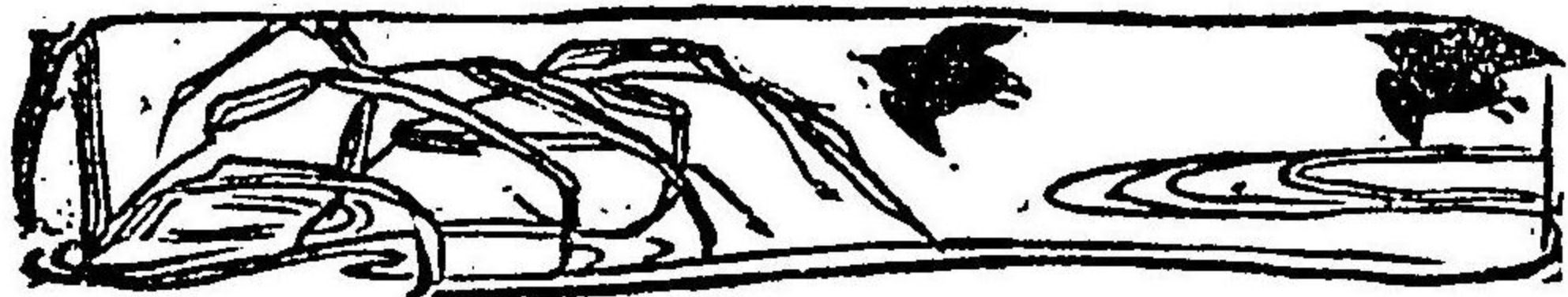
十「コレ當所は何地だ、予は如何致したのじや。」

臣「恐乍申上升、殿は御病氣の爲め、當正木坂へ御養生に御出なされたので御座い升。」

十「ア左様か、兩三日前一人の僧侶が、予の處へ尋ね参りはせぬか。」

臣「御出になりました。」

十「其僧侶は如何致した。」



臣「逃がさぬ様にと上の御言葉故、留置きまして御座います。」

十「速に是へ案内致せ。」

澤「畏りました。」

と直に澤庵禪師に此の由を告げる。」

フシ「案内者にご連れられて、十兵衛殿の御部屋へと

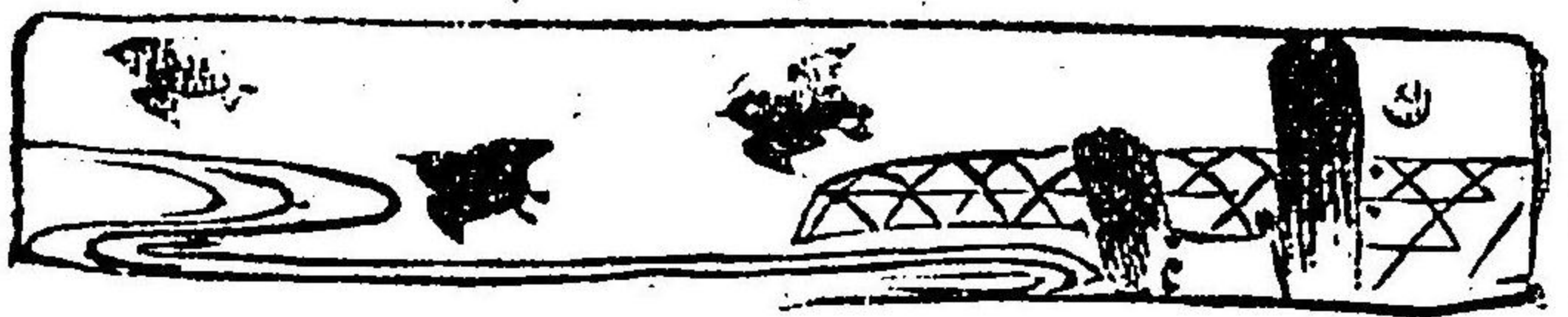
参られましたのは、是ぞ其頃三代の將軍家光

公ですら、常に師の坊と尊敬致される、品川

名代の東海寺の、澤庵禪師で御座升。」

一ト目見るより光義公は、御疊遙に三疊斗り下手の方へと飛下

り、兩手を付て頭を下げられました。



十「是は〜東海寺様で御座升か。」

澤「十兵衛、其方病氣全快致したか、其方病氣の爲め、父但馬

は終日心痛致し居ぞ、全快致したのは喜ばしき次第である。」

是より澤庵禪師を町重に響應し、禪師は江戸表へ御歸りに相成

りました、十兵衛殿病氣全快の趣き、江戸表木挽町柳生家の屋

敷へお知らせに相成りました、但馬守宗則殿は、一と方ならぬお

喜びで御座升。

フシ「御話變つて、柳生十兵衛光義殿は、病氣全快

致されまして、時しも寛永二年三月の中旬の

事で、大和で名代の吉野山へこ、櫻見物に参



二十
 られまする、御供の方には大布淺右衛門、森島半平、廣瀬郷太夫を始ごし、八人を引連れて、吉野の山へこ、お出掛に相成りました。今しも櫻は盛りで御座升、十兵衛殿は四方の景色を眺むれば、實に白雲が下りて居るかと思はれて、

吉野山霞の奥は知らねごも

見ゆる限りは櫻なりけり

光義殿はフト南方の小町櫻を見ると、紅白の幕張廻し、鎌十文字槍が立てある、幕張りの中には坊主頭が十二三も見へるから
 十「コレよ見受る處出家と相見える、薙刀は出家の表道具であ



る、槍は如何なる譯である、

馬恐れ乍ら、南都寶藏院覺善と承知致します。』

十「何、覺善坊であるか、然らば覺善に面會致すであらう。』
 とツカ／＼と御進みに相成り、

十「コレ覺善々々。』

とお呼びに成ると、覺善坊始め一同が驚いた、世の中に馬鹿な奴が在るものぞ、餘りといへば禮義を知らざる奴と、フト見ると黒二羽重向ひ雀の定紋附たるお羽織、金銀散りばめたる大小右手には京の吉則の鍛へたる鐵扇を持ち、脊の高さ五尺斗り、十兵衛殿は武藝小傳にも出て居り升が、至つて小兵の方で御座

升。

覺「寶藏院覺善は手前で御座る、貴殿は如何なる方で。」

十「予は十兵衛である。」

覺善驚き、扱ては正木坂の大先生と、覺善兩手を付き、

覺「是は正木坂の先生で御座升か、何つも御變りも無く恐悦に存じます、願くば手前道場へ御越しを願います。」

十「オ、左様か、然らば參るであらう。」

フシ「其頃ほひ槍術に掛ては、日本隨一と噂を取つ

た、南都寶藏院覺善坊と、柳生十兵衛先生は吉野山を御下りに成りまして、南都の町へこ



參られまする。」

來て見ると流石は覺善の道場、八間に十二間の立派な道場で御座升、早速十兵衛殿を案内致し、

覺「先生一ト手御教導下されば、覺善身に取り喜ばしく存じ

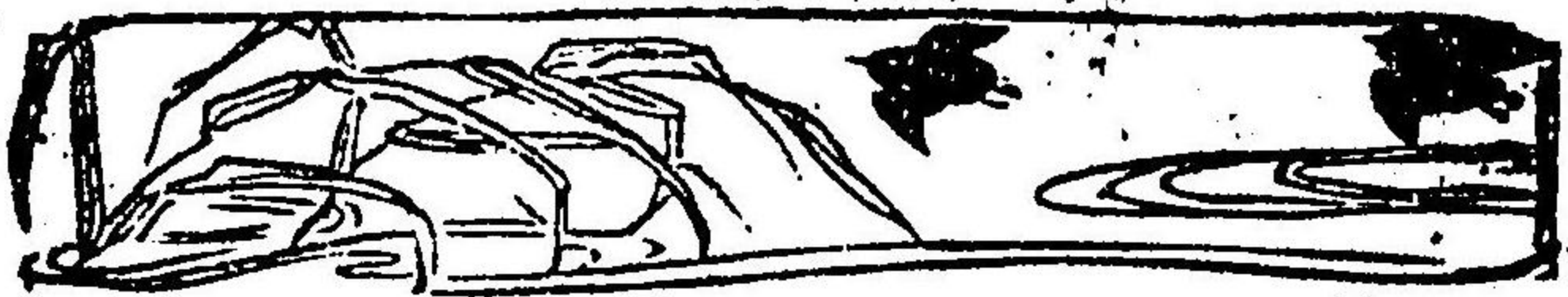
升。」

十「左様か、然らば教へ遣す。」

と道場へ通る、覺善は九尺柄鎌十文字の槍、十兵衛先生は鐵扇で向ふ、暫く睨み合つて居りましたが、覺善の及ぶ處では御座ません、直ちに槍を打落される、

覺「參りました。」





と直に奥の一間へ案内され、酒肴を出し馳走に及ぶ、覺善と十兵衛先生は、互ひに盃の遣り取り致し居る、酒宴中頃に至り年頃十六七の美少年、十兵衛先生の傍らに兩手を附き、挨拶をする、覺善は十兵衛先生に向ひ、

『恐乍、此者は伊賀國安部郡荒木田村、郷士荒木平左衛門が一子丑之助と申者、十三才の時に手前の門人に致し、當年十六才で御座升、最早槍術は免許皆傳で、教へる道が御座いません、願くば先生の門下の列に御加へ下されば、是に越したる望みは之れなく、如何で御座ります。』

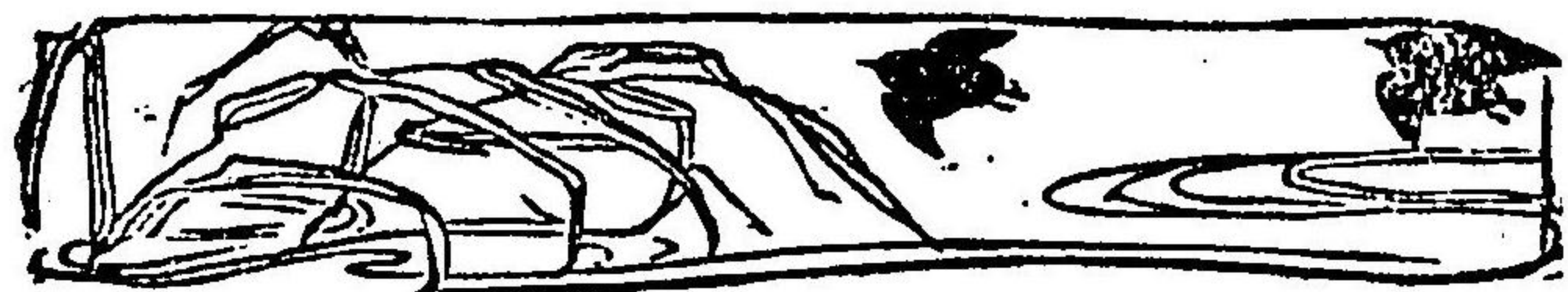
十兵衛先生之を聞いて感心致され、僅の裡に槍術免許とは、大

層な者と思召し、

『予は最う弟子は取らぬ心意で有るが、此者丈は門下の裡に加へ遣す。』

覺善は萬事を頼み、十兵衛先生は丑之助を連れて、正木坂へと歸られける。是より丑之助に手を持って教へる、丑之助は一心不亂に修業を致す。十兵衛殿の父但馬守は、二十才の若盛りの時又左衛門と云ひしに依り、父の右に廻る者は丑之助であると思召して、又右衛門義村と名前を改め、始めて柳生眞影流免許皆傳に相成りました、十兵衛光義公は又右衛門を御招きに相成り『如何に又右衛門、予は其方に頼み度き儀あり。』





又「コハ改めての師の御言葉、如何なる譯か存じませぬが、拙者身に出來まする事なら、何事なりとも御遠慮なく仰せ付下され度し。」

「餘の儀ではない、汝是より江戸表へ参り、舍弟宗冬父上の跡を襲ひて、將軍家御指南番と相成つたれど、未だ柳生眞影の極意を知らず、と申しても定府の宗冬を呼寄せせる事も出來ず、其方罷り越し、飛彈守に面會し、極意を彼れに傳へ呉れよ。」

「是を聞いた又右衛門義村は、恐れ入つて、又數ある御門弟の中より、私風情をお撰みに相成り、斯る大



役を仰付けられましたる段、心根に銘じ有難く存じます、上命の如く御舍弟様に御面會の上、必ず柳生流極意相傳へまするで御座ります。」

又右衛門がお請を致したので、十兵衛先生も大きに御喜びなされ、筑前三池の傳太光世作の銘刀一口、將軍台徳院殿より拜領の、五郎正宗十哲の一人左門三郎左文字銘作の脇差に、京の義矩の鍛へた鐵扇を添へ、路用をば充分に與へられまして、

「此の鐵扇の象眼を見よ。」

降るご見ば積らぬ先に拂へかし

柳の枝に雪折ぞなき

とある、是れは我が流儀の奥儀じや。

又『ハ、ッ。』

と云つて、又右衛門義村は、餘りの有難さに頭を疊に摺附け、少時涙に咽びました。

フシ(天の命數茲に盡き、柳生十兵衛光義殿、四十
二歳を一期として、永き眠りに就かれけり。)
後の佛事もいと懇ろに營みて、やがて又右衛門義村は、大和
國正木坂を立致し、事情あつて、一旦大阪へ参つて道場を開
き、剣道の指南を致しましたが、三年の後、道場を疊み、愈々
大阪を發足致し、段々と下向致し、勢州桑名より船に乗つて、



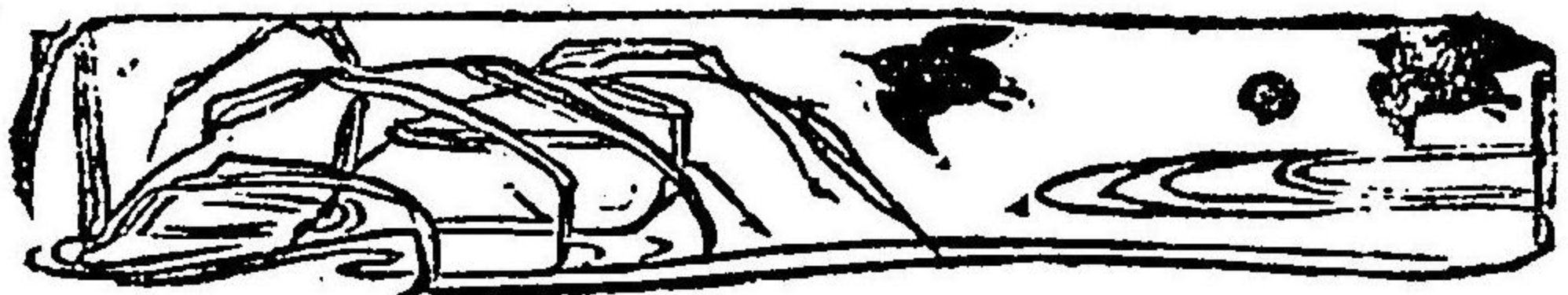
尾州熱田の港に着き、船を上りますと、旅館の出迎人や、船か
ら上つた旅客などで、濱邊が混雑致して居る中に『喧嘩だく』
と人々の騒ぐ聲が致しますので、又右衛門が四邊を見ますると
熱田神宮の鳥居際に、數名の船頭共が、二十歳前後の見すばら
しい服装をした一人の侍を取圍んで、

○『ソレ打殺せ。』

△『ふん縛つて海へ投げ込め。』

の罵りさわぐ様子に、
フシ(義心に富んだ又右衛門義村殿は、見るに見兼ねて仲へ這入り。)





又「アーエ、何を致すのじや、兩刀帯びた侍に對して無禮を致すな。」

○「イエ御武家さん、構ひなさるな、侍だつて何だつて、偽りを云つて船に乗つて、錢が無い奴は容赦はならねエから、思ふ存分にしてやるのだ。」

又「マア、待て、此のお侍に、錢が無いので船賃が拂へんといふのか、然らば、其の賃錢を拂へば仔細はないのか。」

△「然様ともく。」

○「船賃さへ呉れば仔細はないのよ。」

ワイ、云ふから、そこで又右衛門は、紙入の中から一分銀一

筒取出して、年長の船頭に渡し、

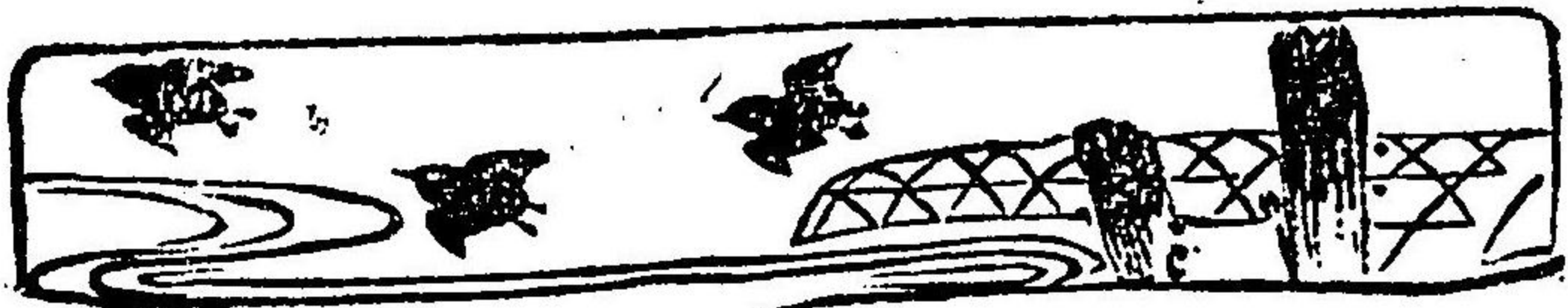
又「サア、これで船賃を取つて、殘餘は其方共の酒代にいたせ。」

云はれて、船頭共は大きに喜びて、又右衛門に禮を述べて船へ戻ります。彼の若侍は、大地へ兩手を突き、

侍「何れの御方かは存じませぬが、斯る難儀をお救ひ下し置かれまして、有難き仕合に存じまする。」

又「イヤナニ、武士は相身互ひと申せば、其お禮には及び申さぬ、何に致せ、此所は濱邊、先づ此方へ。」

と、若侍を彼方の茶屋へ誘入つて、奥へ通り、酒肴を取寄せ





又「サア一ツ召上れ、ナニ御酒は行かん、夫では飯を。」
 と、飯を誂へて、若侍に喰べさせ、自分は酒を飲みながら、
 色々物語りを致すと、此の若侍は、名を山住伊兵衛と申して
 フシ（以前は紀州和歌山の藩士なるが、故あつて主
 家を浪人致し、寄邊なぎさの捨小舟、何所を
 あてご便る人もなき儘に。）

纒の知邊を使つて、伊勢の長島へ参つたけれ共、生憎其の人に
 も會ふ事が出来ず、せん方なく、三州西尾まで赴かんと心得て
 桑名まで参りましたが、路用も盡き果て、船賃さへも拂へぬ仕
 儀、新太郎船といふのは、武士でさへあれば、無料で乗せると



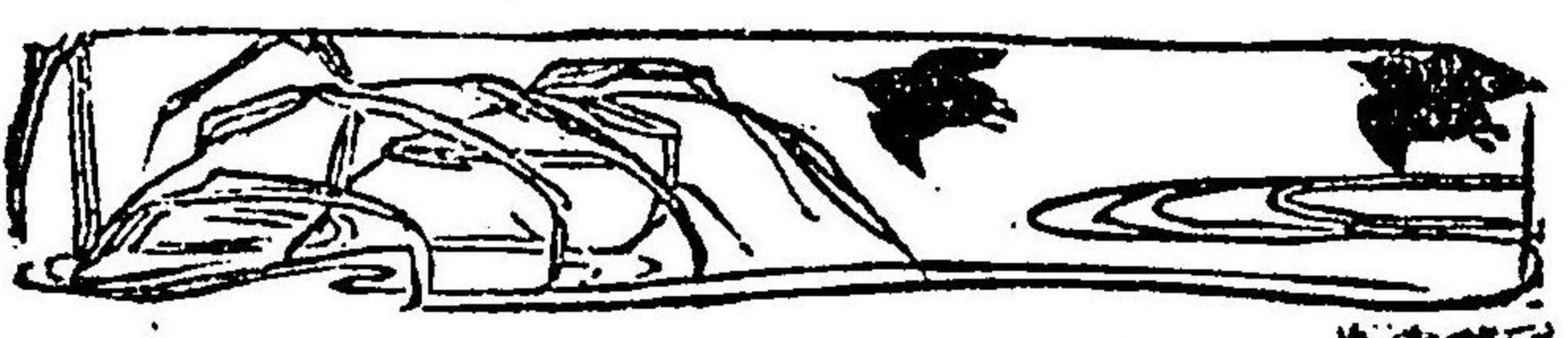
の事に、眞實と思つて、乗り込み、遂に先刻のやうな次第に及
 びし事情と、聞いた又右衛門は、太く惘然に思ひまして、
 又「拙者は所用あつて、江戸表へ下る者じやが、貴殿も同道致
 されぬか。」
 伊「有難くは存じますれど、路用が……………」
 又「イヤナニ夫は御心配に及ばぬ事、兎も角も、今晚は當地に
 一泊致さうから、悠々致されよ。」
 伊兵衛をなぐさめ、又右衛門は大酒家で御座ますから、僅少の
 間に二升程の酒を飲んで、勘定を済まして此店を出ようと致し
 ますると、仲間風の男が、

男』モシ旦那様、私めは先刻から、此所にお待ち申して居りました。

又右衛門、不審に思つて、

又『拙者に何か用事でもあるのか。』

と、尋ねますると、彼の男は、私主人は、因州鳥取池田宮内少輔の家臣で、江戸留守居役渡邊鞆負と申して、先刻、鳥居際の茶店の二階で、又右衛門が若侍の難儀を救つた舉動を見て感服致し、何卒御目に掛りたいから、自分の宿へ案内致せと申付けられて、御迎へに参つたとのことで御座いまするから、又右衛門も、江戸留守役とあれば、江戸表の様子を聞に便りもよか



らうと存じて、

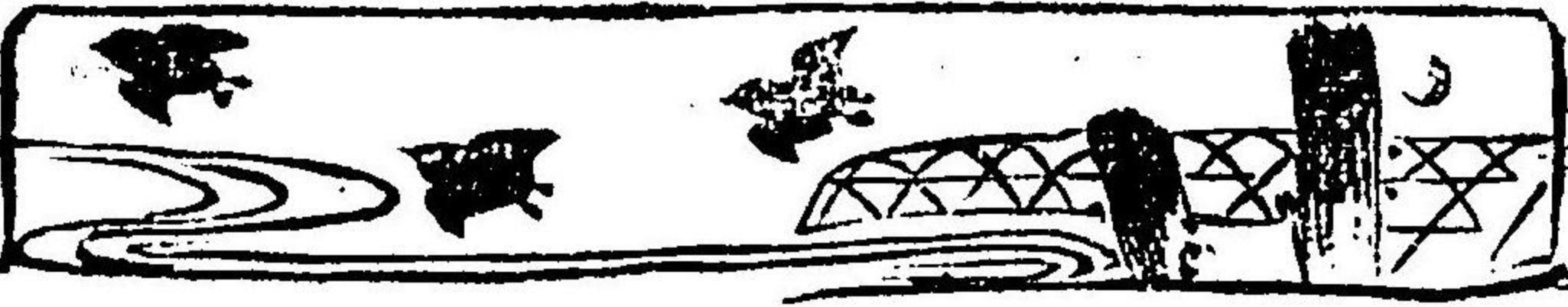
又『然らば早速参らうが、此なる御人も同道致して苦しいか。』

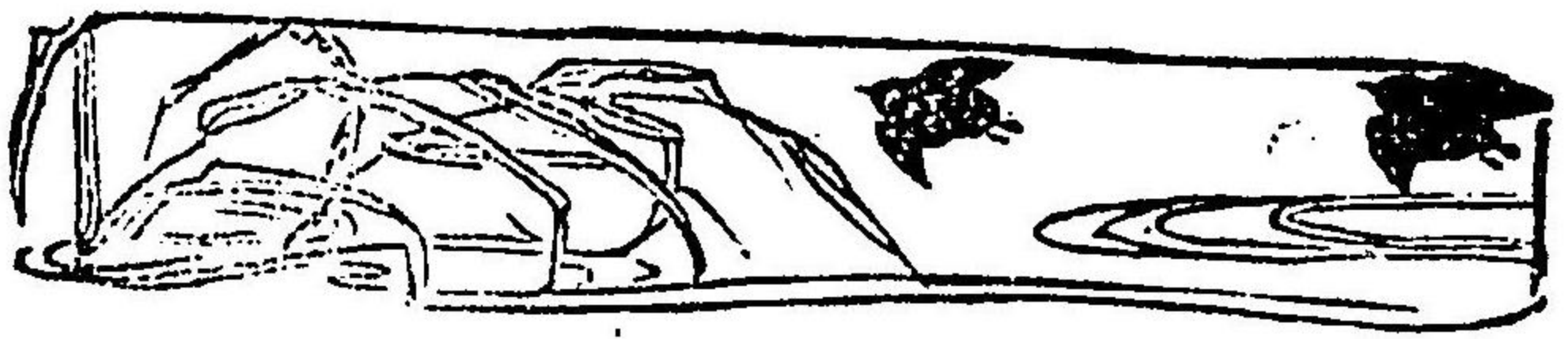
仲『それは、主人も御同道申せとのことで御座ります。』

仲間の案内で、又右衛門は伊兵衛を伴れて、渡邊の宿所なる熱田の宿、傳馬町の脇本陣へ参りますると、鞆負は玄關まで出迎へまして、

『是れは、供の者を以て御迎へ申して甚だ失禮仕つた所幸に御承引あつて、早速の御越し、有難う存じます。』

フシ(サア此方へ二人を伴れて、奥の座敷へ案内





致し、主客の席も定まりて。

『自分は因州鳥取池田忠雄の家臣渡邊鞆負と申す者で御座るが、貴殿の御舉動に感服致し、懐しく存じてお招き申した次第、苦しからずば、貴名を承りたう御座る。』

又『アイヤ拙者は柳生眞影流の武藝者、荒木又右衛門義村と申する者、又此なる御人は和歌山の浪人山住伊兵衛と云はる、方で御座る、何卒御昵懇に願ひたう御座る。』

と、これより酒肴も出て、色々談話を致した後、

『扱荒木先生、自分も江戸表へ下向致せば、御同道なされては如何で御座る。』

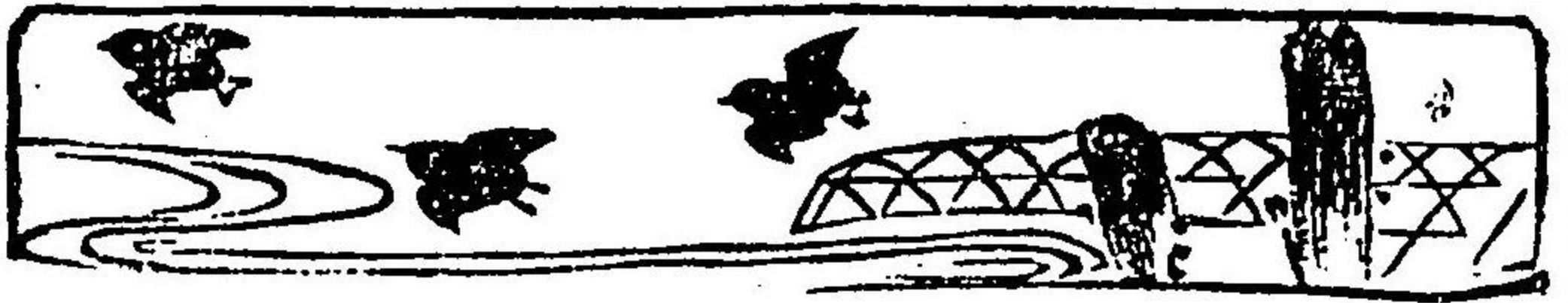
又『それは忝けない、なれど、居候附で御座るが宜しう御座るかな。』

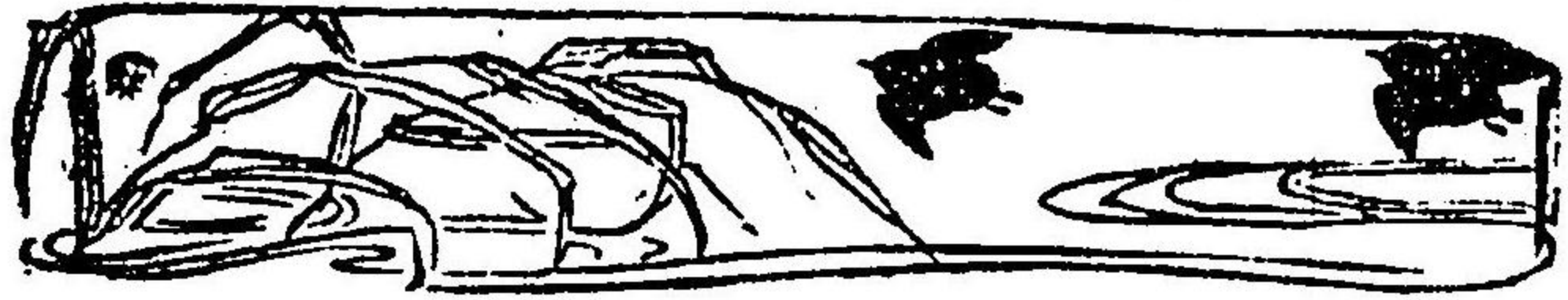
『それは勿論承知で御座る。』

そこで鞆負は、若黨の石堂武助に命付けて、最寄の古着屋を招ぎ、山住の旅装束を買ひ整へて、

フシ(其の夜も明けて翌朝、熱田の宿を立出で、追々下る東海道、箱根八里も打越えて。)

槍持市助一人、藤澤宿の脇本陣の様子を見るに、一足先へ参りまして、名代の南郷の松原へさしかゝりますると、其頃諸所の道場を荒し廻つた、鹿島眞刀流の棒使ひ鷺津七兵衛時定といふ



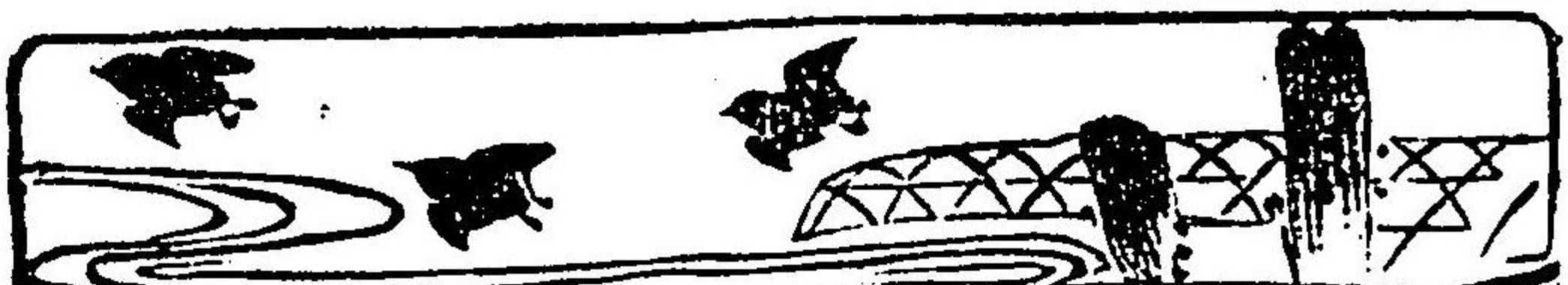


者が、白の手甲脚袴の行者姿で、合財袋を枕にして、大きな疝氣の陰囊に下の帯を膨らまして、トある松の根方に眠つて居つた。然様な者とは知らぬ市助は、これは珍らしき大きな陰囊だ自分の物でも定めて重からう、フツクリ膨れた工合は堅さうだなと思つて、槍の石突で、チヨツト觸る心組が、槍の重みでズンと行つた。

『驚痛いッ。』

と刎起きた鷺津は、市助を見て大きに腹を立て、市助が詫入るのを聴き容れず、槍を取上げて、

『其方のやうな下郎は對手にならん、早く主人を呼んで来い』



そこへ來かゝつた若黨武助、此の様子を見て詫びたけれ共、中々以て承知しない、所へ鞆負は乗物で、荒木、山住を先立て、参りましたゆゑ、武助は周章しく荒木に近寄つて、事の次第を話しました、

『(荒爾笑つて又右衛門義村殿は。)』

鞆負を彼方の茶店に休息させて、自身は鷺津の傍へ寄り、市助のために謝罪をしましたが、鷺津は容易に聴き入れません。加之、荒木に向つて悪口雑言致しましたから、又右衛門殿は、

又『貴様も鹿島真刀流の棒使ひ鷺津七兵衛と名乗る者が、男子の急所を突かれるのを知らずに居たとは未熟な次第ではない』



か。云はれて鷺津は嚇と立腹致し、

『己れ、聞棄て難き其の悪口、喧嘩仕掛は望む所、其方と勝負の上槍を渡さう、サア来い来れ。』

と、槍は彼方の松の枝に立掛け置き、四尺八寸赤檜の棒を取つて打掛つた。

フシ(心得たりと荒木義村先生、一尺二寸の鐵扇にて、打込む棒をあしらひつゝ、一上一下と戦ふ中。)

靱負は駕籠を進めて間近く参り、駕籠を出て見物して居る。武

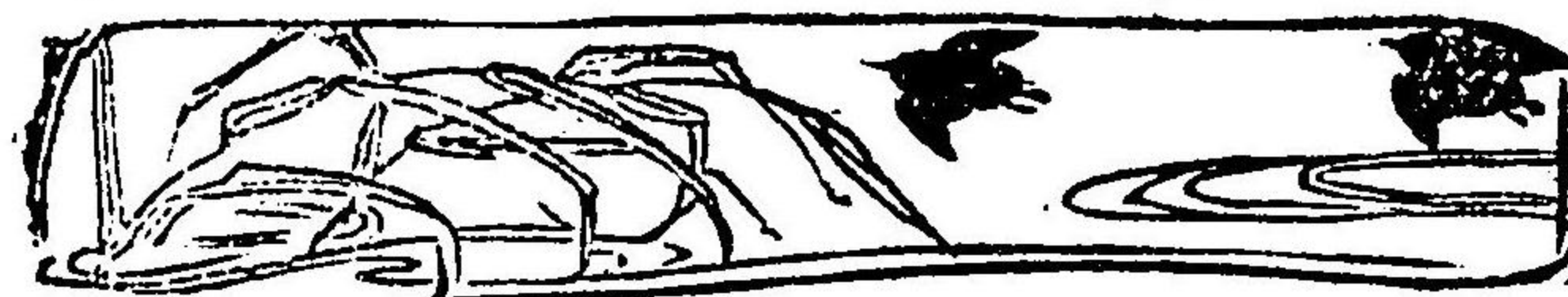


助、伊兵衛の兩人も、荒木危き時は飛込まうと、互に目配せ致して居る。兎角して居る内に、鷺津は大分疲れて来た様子で、棒の手も亂れてハヤ受太刀と相成つたが、又右衛門に於ては、少しも疲れた様子もなく、鋭く打込みますれば、鷺津も今はこれまでと、滅多打に打込む棒を打落しました。

フシ(残念無念と鷺津が飛附くを、荒木先生ヒラリと身を交し、左の脚でハタと蹴る。)

鷺津は大きな陰囊を蹴られて、ウーンと仰向に倒れて悶絶致せば、又右衛門呵々と笑つて、

『又何人か来て陰囊を突けば起上るであらう、サア参らう。』



と云へば、始終を見て居りました渡邊鞆負は熟々感心を致して
荒木先生に向つて、

『先生、此の儘打棄て置いては……』

又『イヤナニ是は眞の悶絶では御座らぬ、呼起すのも却つて殺
生、此儘に致し置くのが武士の情、サア參らう。』

とそれから其所を立て、其夜は藤澤の宿に泊り、翌々日は一
同江戸の屋敷へ到着致しました。鞆負に於ては、荒木の人物普
通ならぬを見抜き、或日人を避けて、心底を尋ねますると、荒
木も鞆負の人物を見込みまして、實は斯々斯様の次第で、江戸
表に於て道場を開き、機會を待つて、柳生飛彈守に對面致し、



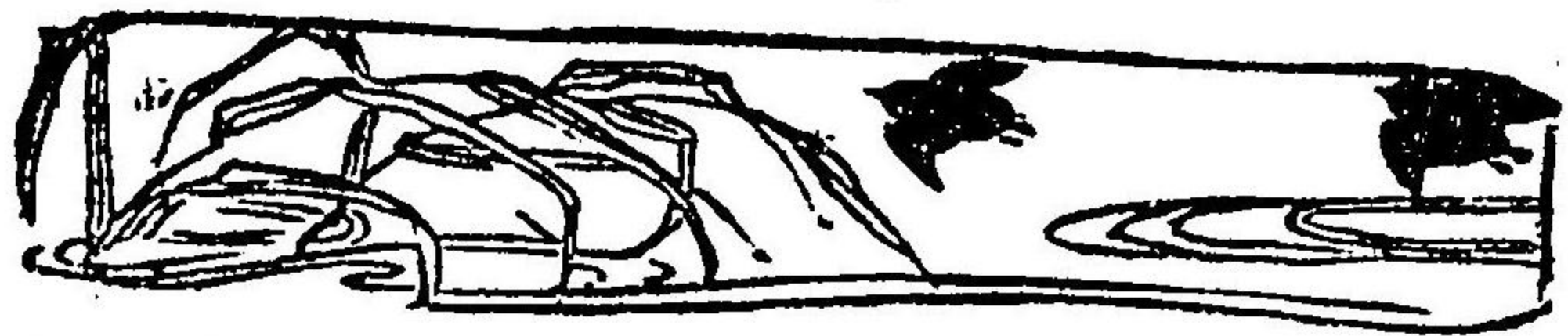
柳生眞影流の極意を傳へんとの旨を明しましたので、鞆負も今
更感服致しまして、其所此所と場所を選みますると、好都合、
麴町七丁目に好き地所があつたので、それを借受け、早速普請
を致し道場を開いて、

○ 柳生眞影流劍道指南荒木又右衛門 源 義村

といふ大きな標札を掲げました。

フシ(山住伊兵衛は内門人、日毎に通ふは池田の家
臣、其頃は武藝盛大の寛永年間にて。)

木挽町柳生家へ出入致す諸大名並びに旗本の外には習ふ事の出



來ぬ流儀で御座いますれば、荒木の道場は、日毎に門人も殖えて参りました。

此事何時しか飛彈守殿の御耳へ入りましたので、そは棄置き難き事と、老職大道寺平馬を呼寄せられました。

飛「其方大儀乍ら、麴町の荒木某といふ浪人に、訊ぬる仔細あれば、早速當屋敷へ参れと呼寄せよ。」

平「畏まりました。」

と、平馬は早速書面を認めまして、其の趣を荒木に通知致しますと。

フシ「此方の荒木又右衛門、待に待つて居りしは是

此事よ、愈々飛彈守殿に、對面致す時節は來りよ、心の中に喜んで。」

其翌朝早く起きまして、浴湯月代をなし、禮服を着用致して、恩師光義殿より拜領した兩刀を帶し、鐵扇を携へて、麴町の宅を立出で、

フシ「木挽町は柳生家の通用門へと差掛り。」

門番に來意を告げると、一名の番侍は、案内をして、内立關次の間へ控へさせる。暫時過つて、稍廣い一間へ通されると、茲へ大道寺平馬が這入つて参りまして、

平「是れは、其許が荒木又右衛門と申されるか。」



又「御意に御座ります、お召しに依つて參上致しました荒木又右衛門義村に御座ります。」

平「夫は御苦勞、自分は當家老職大道寺平馬である。」

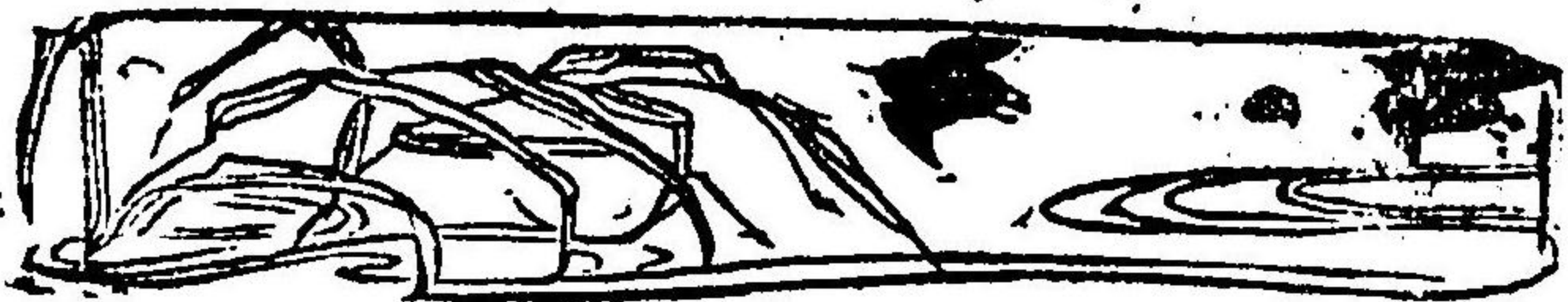
又「是はく御重役様で在せられまするか、シテお召しに相成りました御用の趣は。」

平「然れば、其許道場の標札を尋ねたい。」

又「エー柳生眞影流に御座ります。」

それより大道寺は、標札に就て仔細を尋ねますれど、又右衛門はなかく實を申しません。

フシ「此時大道寺平馬は、威丈高に相成り。」



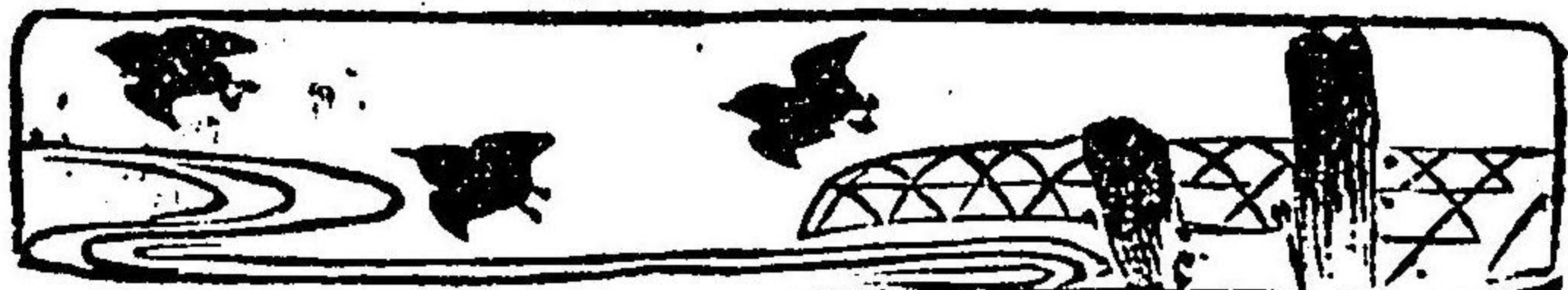
平「苟くも柳生飛彈守は諸侯なるぞ、陪臣乍ら某主人の代理として取調ぶるに、實を申さるとは何事なるぞ。」

又右衛門は些少も騒がず、自若として、

又「恐れ乍ら、此の儀は、飛彈守様御目通り仰付けられませぬ内は申上げる事は相成りませぬ、今日のお召しを幸ひ參上致せし又右衛門、謹んで言上致したう存じますれば、何卒御目通りの儀偏に願ひ上げ奉ります。」

フシ「如何やら様子がありさうな、荒木の言葉に大道寺は、然らば荒木を控へさせ。」

飛彈守殿へ此旨申上げます、宗冬殿は、荒木の人体など訊ね



られました。

飛「兎も角も、目通り申付けい、予が面前に於て、無禮の語氣ある節は手討に致す。」

との仰せに、平馬は又衛右門の傍へ参り、

平「御目通りお許しに相成る、サア此力へ。」

と案内致して次の間へ通りますと、待構へた二人の侍、又右衛門の兩刀鐵扇を取上げ、身軀を調め、廊下傳ひに奥まつた一間へ通し、背後の襖を閉切る合圖に、前の襖が開いて正面に坐せられたるは、御當主飛彈守宗冬殿、御年頃は三十二三、頭髮は引詰銀杏卷元結、二蓋笠の御定紋黒のお召物に黒の御羽織、何



となく威風凛とした御相貌は、流石は天下の御指南番の傍には若侍四人に御刀番一人、大道寺平馬は少し下つて、飛彈守殿に對ひ、

平「恐れ乍ら、只今又右衛門召伴れまして御座ります。」

又右衛門は横疊三疊隔て、着坐致し、頭を下げて居りますと、

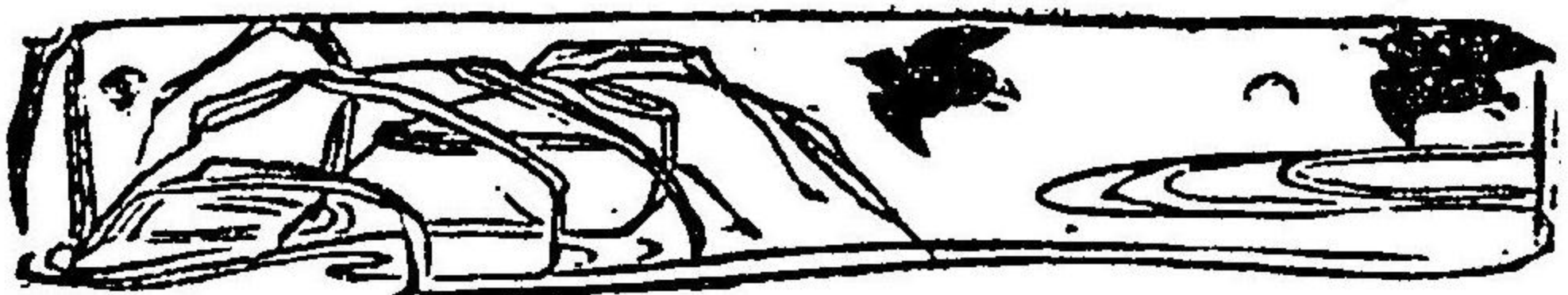
飛「麴町七丁目劍道指南荒木又右衛門と申するは其方か、予は飛彈じや、面を上げい。」

又「ハ、ツ。」

又右衛門は徐かに面を上げますと、

飛「其方儀、御廓内に於て、柳生眞影流の標札を掲げ、劍道指



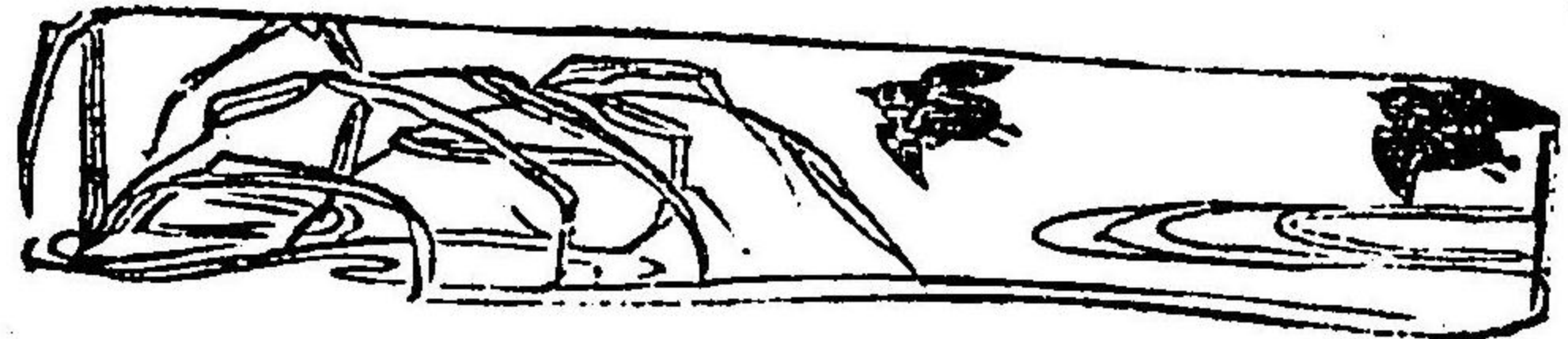


南致す由に付、先刻之なる大道寺平馬を以て、訊問致させたれども、其方余が面前ならでは申さぬ趣により、目通り申付ける、柳生眞影流は何人に就て學びしか、有躰に申立てい。』と、飛彈守は烈しい語氣で御尋に相成る、又右衛門は、又『恐れ乍ら、他聞を憚る儀に御座りますれば、何卒お人拂ひ仰せ付けられたく。』

と申上る、そこで、飛彈守殿は一同を次の間へ下げられますと、又右衛門は、熟々飛彈守殿の御顔を眺めまして、フシ(似たりや似たり花菖蒲、菖蒲に擬ふ杜若、御兄弟は云ひ乍ら、四十二歳の大厄に、黄泉

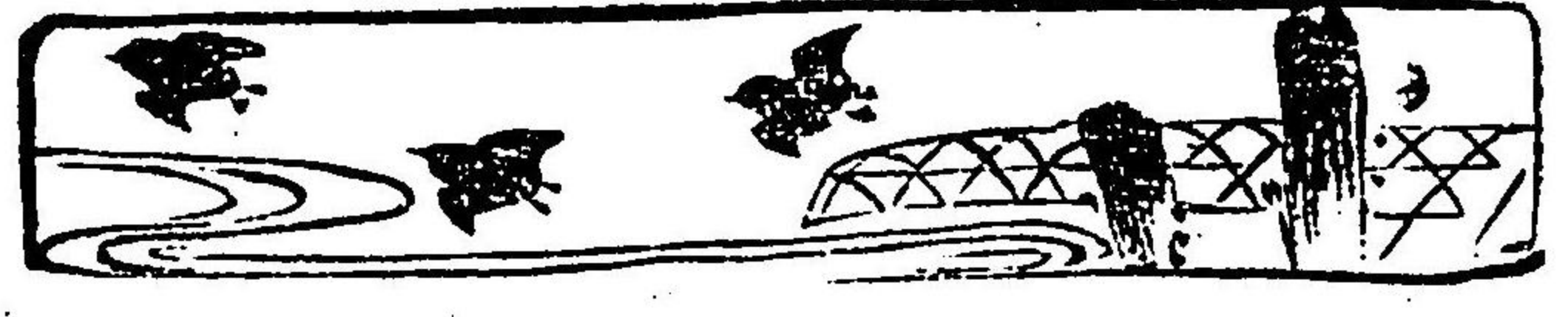


の旅に出でられた、恩師光義先生に、御顔が宛然生寫し、再び恩師の温顔を、拜する心地で又右衛門、涙ハラ／＼打滾し。』
 又『恐れ乍ら、御前、御懐しう存じまする。』
 飛彈守は、可怪事をいふ奴だと不審に思召されて、飛『黙れ、初めて會つた其方に、懐しいとは何事じや、無禮であるぞ。』
 又『仰せの通り、御前の尊顔を拜し奉るは、今日初めて、御座りますれど、御兄上様に其儘の御顔貌、光義公の事を思出しまして、無禮の儀を申し上げ奉りまして御座ります。』



飛「ナニ、光義とは。」

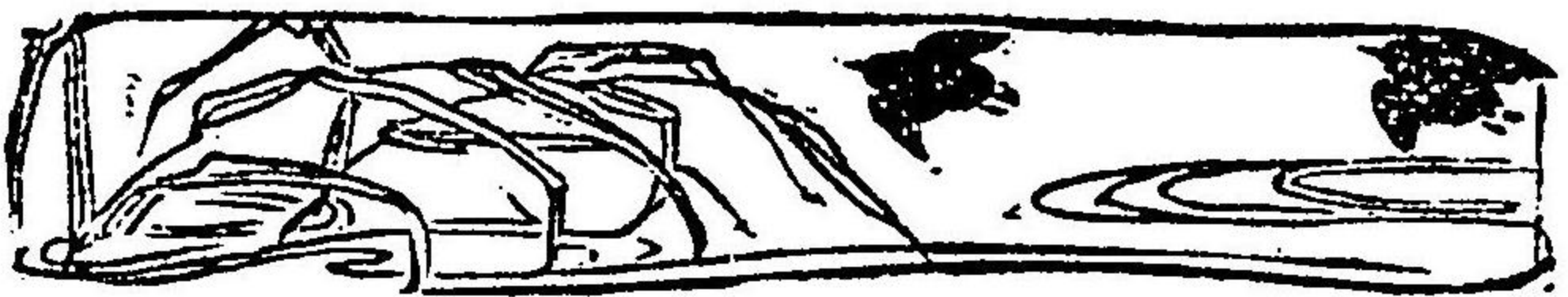
又「御意に御座ります、他聞を憚る仔細はこれに御座ります。』
と、又右衛門、懷中より取出した一通の書面恭しく差出しま
すを、飛彈守不審乍、御開封、一通りお目を通される、又右衛
門は恐れ入つて頭を下げて居ると、飛彈守は矢聲も掛けず振打
に、又右衛門の眞額へ切付ける。
フシ「サツと閃く稻妻に、アハヤ又右衛門は眞二つ
されど名人荒木は、ヒラリと躰を右に避け、
空を流せし白刃をば、左手にシカと取つて押
へ。」



又「御前、當流第一の極意白刃取りは是れに御座ります、御會
得遊ばしたるか。」

飛「ウム、相解つた。」

と、それより又右衛門は、疊隠れ、柴隠れ、鏝隠れ、鐵扇伏せ
等、七箇條の極意を残らず宗冬殿へ御傳授致しました。飛彈守
殿も悉くお喜びに相成り、又右衛門を道場へ召伴れて、折柄稔
古に参り居られた諸大名旗本衆に紹介せ、やがて、大廣間に於
て、御一同御酒宴が始りました。
先には、手討になるであらうと、嘲り笑つた方々も、御師匠か
ら、又右衛門が當流の名人である事を仰せられて、俄に尊敬致



され、お盃を下さるやら、遊びに参れと仰有るやらで、又右衛門
門面目を施して立歸りましたが、最早此の上は、劍道指南の必
要も御座ませんから、早速道場を終み、因州侯御邸内渡邊鞆負
の方へ引移りました。

「扱も諸侯の方々は、何卒致して荒木をば、召
抱へんと思召し、手を替へ品を替へて。」

使者を麴町へ遣しましたけれ共、最早又右衛門の道場がなくな
つて、行方も相分りませんので、何れも、飛彈守殿に其旨を御
依頼に相成りました。二三日経つて、又右衛門が、御機嫌伺ひ
に、飛彈守殿の御屋敷へ参りますと、宗冬殿から、此の話しを

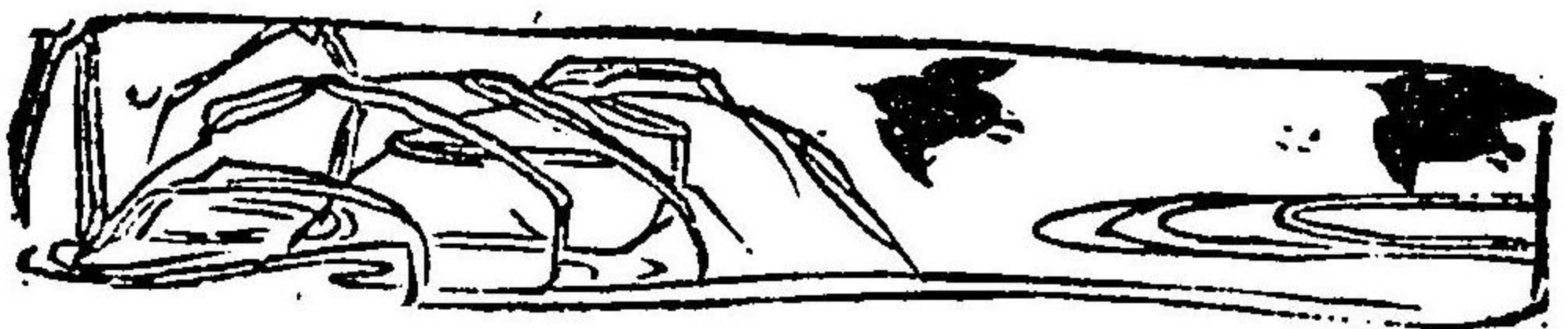


致されましたので、又右衛門は、

又「光義先生の御遺訓で御座ります故、五百石ならば、御奉
公申上げまする。」

そこで、宗冬殿から、望みの諸侯へ此の趣を傳へられますと、
播州姫路の城主本多大内記政勝殿が、五百石宜しいといふので
早速お召抱への事と相成り、日を選んで、山住伊兵衛を伴れて
丸の内本多侯のお屋敷へ住込み、番頭格で、御指南番仰せ付け
られました。

「茲に鞆負の娘のお民、早や年頃と相成りて、
花の顔容雪の肌、諸藝の道も暗からず、また



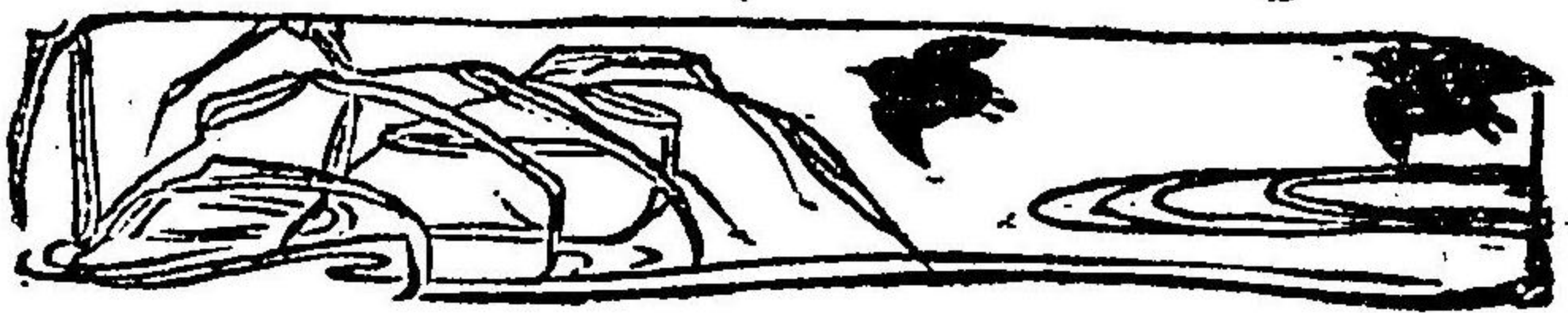
定まつた縁もなき、折柄なれば靱負夫婦。
荒木の人物を見込み、御家老池田將監殿を媒妁に頼み、又右衛門へ縁付ける事に相成り、

「黄道吉日を選び、結婚の式を挙げ鴛鴦の契りも睦じく、結ぶ夢さへ濃やかに、翌年主君の御城下、播州姫路へ引移り、不足なき日を送りしが、寸善尺魔の世の習ひ、渡邊靱負は圖らずも、同じ池田の家臣なる、河合又五郎に殺されて、子息數馬が亡父の仇討、繋る縁の

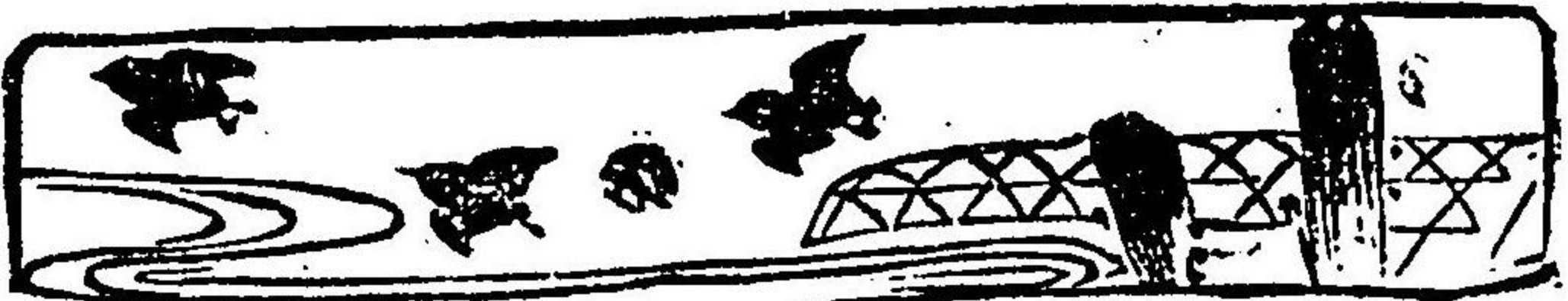


姉智なれば、助太刀せんご又右衛門、本多の殿に御暇を願ひ、遂にやア伊賀の上野にて、義弟に本懐遂げさせる、美談の次第は追々ご席を更め回をかへ、辯じ上げます。」

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※



フシ(生者必滅會者定離、浮世の常とは云ひ乍ら、
 無道の刃に命を落す、人の身の上ぞ傷ましや)
 渡邊鞆負と同じ池田侯の藩中に、河合伴右衛門と云ふ者があつて、其の父は家康公四天王本多忠勝部下の勇士で、數度の戦ひに功績がありましたので、それを鼻に掛けて、我儘勝手の舉動多く、同藩士と争論を致して、人を害めたりして、本多家を逐電しましたが、渡邊鞆負これを氣の毒に思ひ、主君に推舉致したので、更めて、二百石でお召抱へになり、鞆負の周旋で、家



中の桐山主水の娘つねと申すを妻と致し、男子を擧げて、又五郎と名付け寵愛して養育致して居りました。されば、伴右衛門も追々年老るに従つて、心も改まり、苟且にも以前のやうな疎暴な事は致さず、年少の鞆負を兄と立て、子息又五郎には伯父と云はせて居りました。又五郎は成長するに従つて伶俐になり容貌も美しく、學問の道をもよく學び、武藝は、大島流の槍術に八重垣流の劍術、家中の若侍の中では屈指の使ひ手と相成りました。其の内に、伴右衛門、ふと風の心地で打臥したが、次第に重くなり、愈々危篤となつた時、丁度見舞ひに參りました鞆負を枕頭へ招きまして、自分の死んだ後は、子息又五郎の身



六十一
 の監督を吳々も頼み、又五郎にも靱負を父とも思つて、萬事差
 圖に従ふやう云聽かせ、又、枕邊に在つた、父祖傳來の一刀を
 靱負の前に差置き、

『就ては、此の一刀は父より傳はりし正宗で御座るが、少祿
 不肖の某が帶用したればこそ、之まで度々の間違ひ、只今貴
 殿にお譲り申すにより、何卒御受納下されたし。』

『其のお志は有難けれど、御父上より傳はつた其名刀、某
 が申受ける法は御座らぬ故、其儀は御断り申す。』

『其お言葉は尤ながら、愚息又五郎、未だ若年の事、又平素
 は神妙なれど、彼には酒癖が御座るにより、此一刀を譲つて

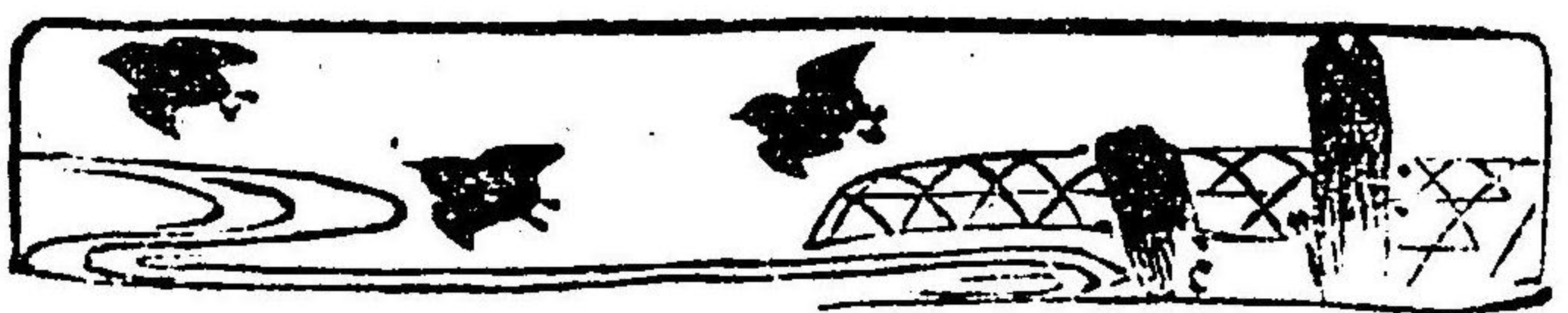
は又間違ひも起さうも知れぬ故、何卒貴殿に於て、お預り下
 さらば、死後の安堵で御座る。』

『鳥の將に死なんとする時其の聲哀し、人の將
 に死なんとする時其の言善し。』

されば靱負も、伴右衛門の言葉を容れて、

『然らば、又五郎殿充分御成長の上、相當の妻を迎へ、身分
 の定まるまでお預り申すことに致さう。』

と、きいて伴右衛門は安心致し、間もなく呼吸を引取りました
 靱負は萬端の世話を致して、葬式も済まし、後の營みも懇ろに
 致し、やがて、百ヶ日も相濟みましたから、主君へ願つて、又





五郎に家督相續を仰付けられた。が、又五郎、父の遺言はあり乍らも、頭の抑へ手がなくなつたので、ソロ／＼本性を現はし、酒を飲んで了見を狂はすといふ有様、此頃江戸市中の湯屋には、客の衣類を預る湯女といふ者があつて、好みに應じて、茶菓酒肴をも進めた。又五郎も此の湯女に引掛り、引張つては遊び歩く間に、小使にも困つて、其頃流行致した賭け弓の矢場へ這入り込み勝負を争ふやうになつた。

フシ（若年なれど又五郎、弓も上手で折々は、思はぬ利益も得てければ。）

それのみに心を入れるので、家中の評判も悪くなり、役の無い



のを幸に、大崎の下屋敷へ遣られた。又五郎、却つて氣樂で好い位に心得て、矢場へ行つて利けては、湯女に費つて居りました。

フシ（好い事ばかりはないもので。）

其の内に一つ調子が狂つて、失敗が續き、場所にも多くの借財が出来た。

フシ（如何せう斯様せうと思案の末、ふと思ひ付いたは彼の正宗、まだ渡邊に預けてない、然様じやく／＼と又五郎。）

早速正宗の銘刀を質入致して、百兩の金子を調達へ、借財を返



しなど致して一時は免れましたが、

フシ「一つ免れて又一つ、若しや鞆負から預りの、催促あらば何とせうと、獨心を痛めしが。」

茲に同じ賭弓の遊び仲間、神田丸信兼といふ偽刀を製作する事の上、上手な鍛冶が御座いましたので、此の男に正宗の偽刀を鍛つやうに頼みました所、神田丸早速承諾は致したが、何しろ、實物を一見しなければ出来ぬとの事で、又五郎が質屋へ頼んで、正宗を一日借出し、之を神田丸に見せると、三日の後に出来上つたのは、焼刃鐵色中具から、白鞘の工合まで、フシ「似せたも似せたよく似せた、年來見馴れた實

物に寸分違はぬ偽刀。」

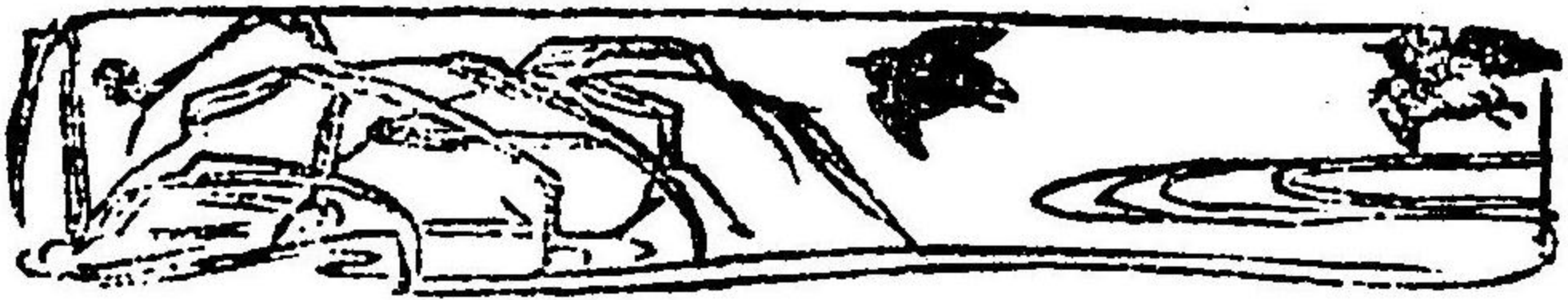
又五郎熱々眺めて感心致し、

又「ウム、巧いものだなア、比べて見たら、何方が如何だか分らない。切れるだらうなア。」

神「申談云つちやいけません、それが切れた日にや、神田丸は正宗でサア。」

此ならば、渡邊の方から、何時取りに参つても大丈夫と、心も落着いたので、矢場へ出掛けると、毎日勝利續き。其頃麻布狸穴の神田丸の家へ、遠州から金持の客があつたので、此人を高輪の矢場へ伴出し、又五郎が散々負かして、充分金を捲上げ、

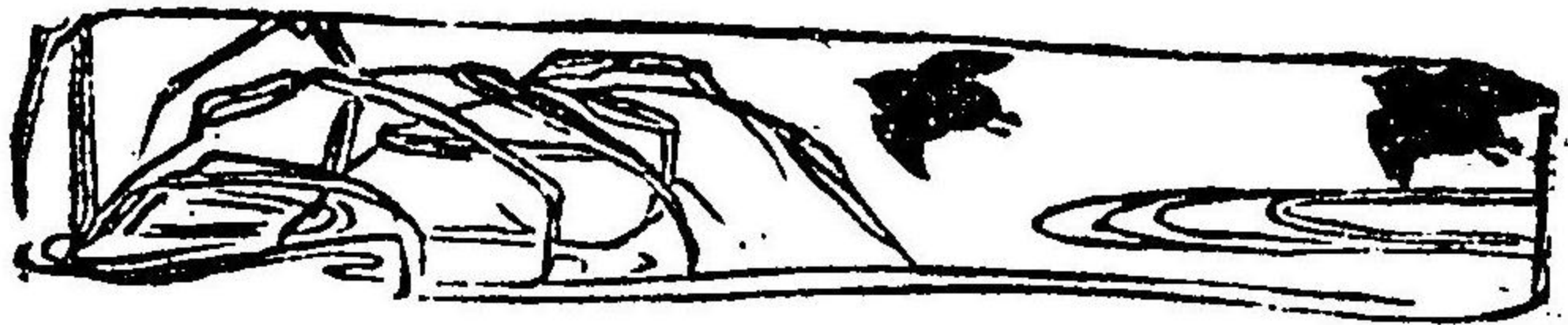




其金を神田丸と山分けに致して兩人ホク／＼喜び、
 又五郎は、其金で眞正の正宗を受出し、偽刀物を袋に入れ、折紙を添へて、渡邊方へ持参致しまして、之を鞆負に預けました。
 フシ(是で先々安心と、胸撫下した又五郎。)
 賭に贏つて金を握りて、服装を立派にすると、サア腰の物が氣に叶らぬ、そこで、眞正の正宗に拵へを附けて、平常之を帯して見れば、又一段と愉快い。同藩の若侍三人集れば刀の白慢根が小人の又五郎、一度眞正の正宗と口走つてより家中の評判此由を數馬が聞いて父に話しますと、唯一見したいで預り置いた鞆負は、さてはと心附いたから、預つた刀を取出して、



フシ(能く／＼見ればこは如何に、上手に似せは似せたれど、似たと云つても黄金と瓦。)
 普通の眼ならいざ知らず、流石は鞆負、ちやんと偽刀である事を觀破つたので、一旦は立腹致しましたけれ共、深い事情は知らぬから、
 フシ(何を云つても年若なれば、帯したがるのも無理はない、此刀は此儘返さうと、時は寛永十二年、櫻花もちらほら咲初むる、三月七日の朝まだき、若黨武助に偽刀を持たせ、己が屋敷を立出で、大崎さしてぞ急ぎける。)



此方はお下屋敷の河合の宅に於ては、今日は亡伴右衛門の忌日なれば、母親は墓参りに行つて不在、又五郎も何所へ行つたか居ず、其所へ着いた鞆負主従、町家と違ひ武家の事故戸締りもして御座ません、武助は立關の式臺に腰打掛けて控える、鞆負は懇意の間柄として一間へ通つて、稍暫時待つて居りましたけれど、母子共歸つて参りませんので、武助を隣家へ尋ねに遣りますと、武助はあちこち聞合せて居る。鞆負はあとで獨り語。

『今日は亡伴右衛門の祥月命日なるに、母子共、何所へ参つたものであらう。』

老の繰言、所へ立歸つた又五郎、餘程酩酊致して居る様子、踏

跟きながら、鞆負の前へ参つて、母かと思れば、鞆負が苦い顔を致して居るので、

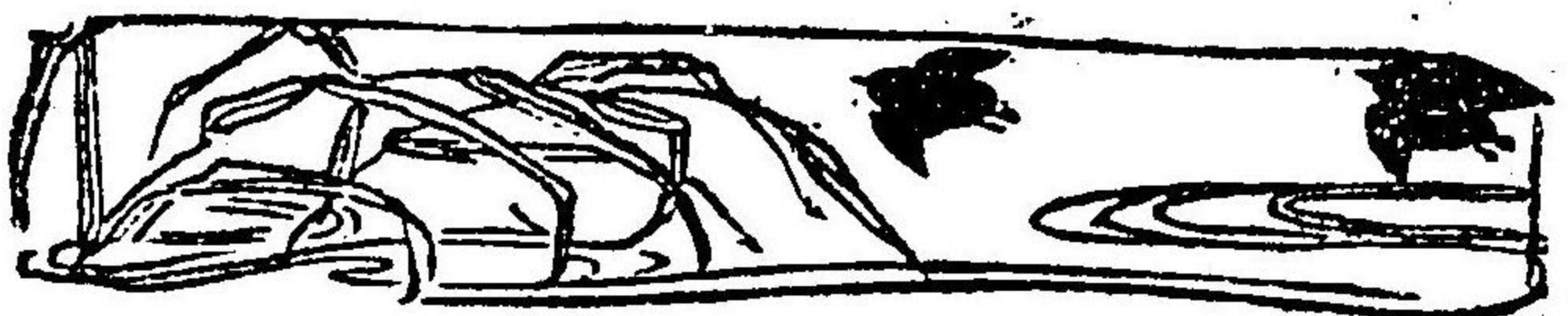
『(脛に創持つ又五郎、さては悪事が露顯せしかもう斯うなれば百年目。』

と心を定めて居る。鞆負は何も刀の眞偽を咎める心組ではないが、亡父の忌日を疎忽に致すを意見致さうと思つて、

『コレ又五郎、マア坐れ、今に始めぬ事ではあるが、其方は何といふ心得違ひを致して居るのじや、諺にも生酔本性違はずといへば、性根を据えて、よく承れよ。』

と扇子を笏に膝を進める。又五郎は堪り兼ねて、





又「オ一疾くから性根は据えて居る。」

流石に温和な鞆負も堪へ兼て、語氣も荒く、

「ナニ、己れ、某に對つて其の暴言、それが己れの本性なるか、無禮者めツ。」

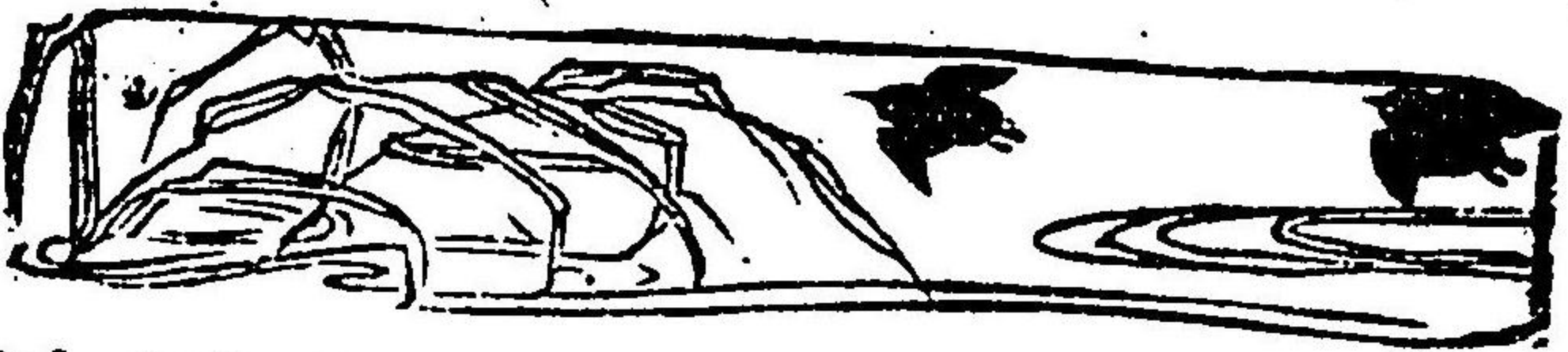
「酒の上なる又五郎、嚇とばかりに怒り立ち左手に提げた正宗を、抜くより早く切り付ける

此方も武邊の鞆負殿、前に置いたる偽正宗、スラリと引抜き發止を受けろ。」

是が普通の刀なら、鞆負も深創を負ふ筈はないけれど、神田丸信兼が姿形を寫したけの大鈍刀、云は、竹光も同然なれば、



受けた刀は中から折れて、鞆負は肩先深く切込まれた。無念と一聲、脇手に置いた一刀取直せども、最早抜く力はない、又五郎は疊み掛けに、鞆負の右の二の腕を切り落し、アツと其場へ倒れるを、留めを刺して血を拭ひ、ホツと一息、俄に酒も醒めはて、我に歸れば、宛然夢のやうな此の場の始末、
「酒の上とは云ひ乍ら、あ、我乍ら淺猿しや、父が大恩受けた人、假令先方が悪いとて、殺して父に濟むべきか、況して此方が重々悪い悪い事した其上に、僅かの事に腹立つて、殺すといふは何事ぞ、あ、我が罪が恐ろしこ、



後悔すれごせんもなし。

折柄戻つて参りました石堂武助が、

武「旦那様々々々。」

と呼ぶ聲に驚いた又五郎、こりや斯様しては居られぬと、周章
て、庭へ飛び下りて、裏門口から何所となく逃出しました。武
助は何度呼んでも返事がないので、臺所へ廻つて、襖を開けば
コハ如何に、主人鞆負は血に染つて倒れて居る。飛上つて死骸
を抱き、暫時涙に暮れて居ります所へ、何心なく入り来る又五
郎の母親は、一目見るなり、アレーと叫んで駈出すを、武助は
取つて押へ、下手人は正しく又五郎殿、御身も御同腹ならんと



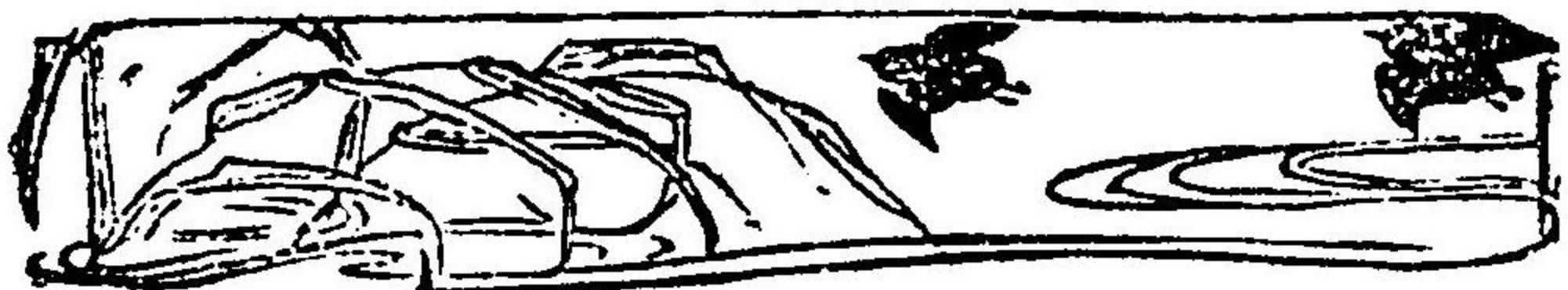
責むれと母は知らぬ事、武助は聲を張り上げて、

武「御隣家の方々、お出會ひ下され。」

御下屋敷の事で、隣家は遠いけれ共、武助の聲が高いのを聞き
付けて、集つて来て皆々吃驚仰天、早速支配頭に届けるやら、
目附に訴へるやら、渡邊の屋敷へ知らせるやら致しますれば、

役人も出張致され、子息數馬も駈付けまして、

フシ「父の死骸を抱き上げ、夢か現か幻か、此の御
有様は何事ぞ、對手もあらうに、又五郎の手
に掛り、此の御最後は情けなや、嗚や無念に
在せしならん、己れ憎きは又五郎、いかで其



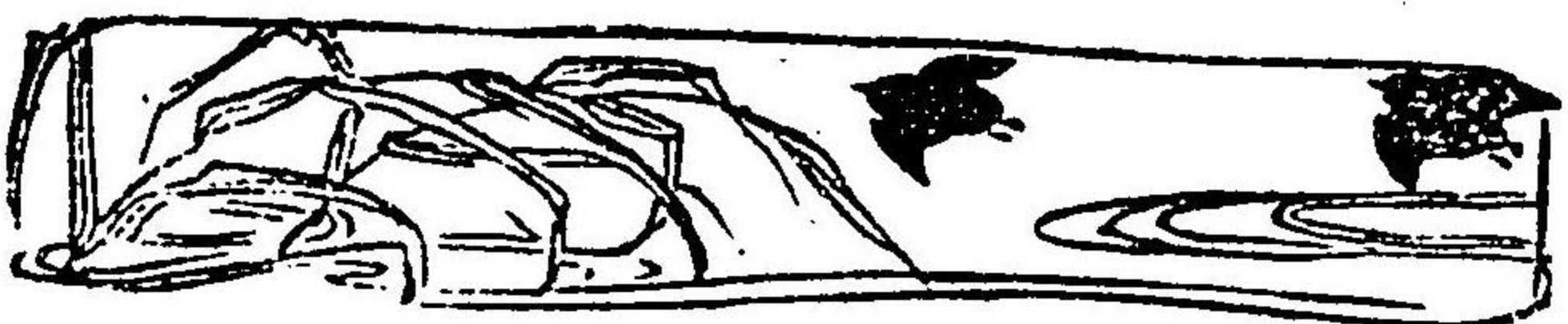
儘置くべきやと、怒りつ泣きつ搔き口説く、

あはれごいふも愚なり。

役人方の御實檢も濟み、死骸は乗物で、屋敷へ送り、又五郎の母は一先支配頭へお預けといふ事に相成り、又五郎の母、數馬並びに武助の三人を呼出し、重役がお取調べに相成ると、事の次第が全く相解り、殊に死骸の傍に、二つに折れた偽正宗があつたので、鞆負が抜き合せて受留めた事も解り、千五百石の知行に疵は付かぬ。此の趣重役より主君宮内少輔殿へ申上げると平生御意に叶りの鞆負の事なれば、主君は以ての外の御立腹、早速又五郎の行方を探れと仰付けられ、又數馬を召出されて、



懇なる御言葉、葬式料も多分に下し置かれ、數馬は有難涙に咽んで御前を退り、葬式も懇ろに營みまして、渡邊一家の者は申す迄もなく、係りの役人に於ても、嚴重に搜索致しますけれども、又五郎の行衛更に判りません。お話し二つに別れて、彼の又五郎は、下屋敷を脱出して、豫て矢場で懇意になつた、六番町の旗本阿部四郎五郎の屋敷に逃げて参り、我が悪事は匿して、鞆負を悪口致し、武士道の意氣地で討果したれば、何卒お匿まひが願ひたいと頼んだ。阿部の先祖と河合の先祖は、一時本多忠勝の部下で、共に數度の戦功を現はした間柄ではあり、其の頃は、大名と旗本との間柄が悪く、

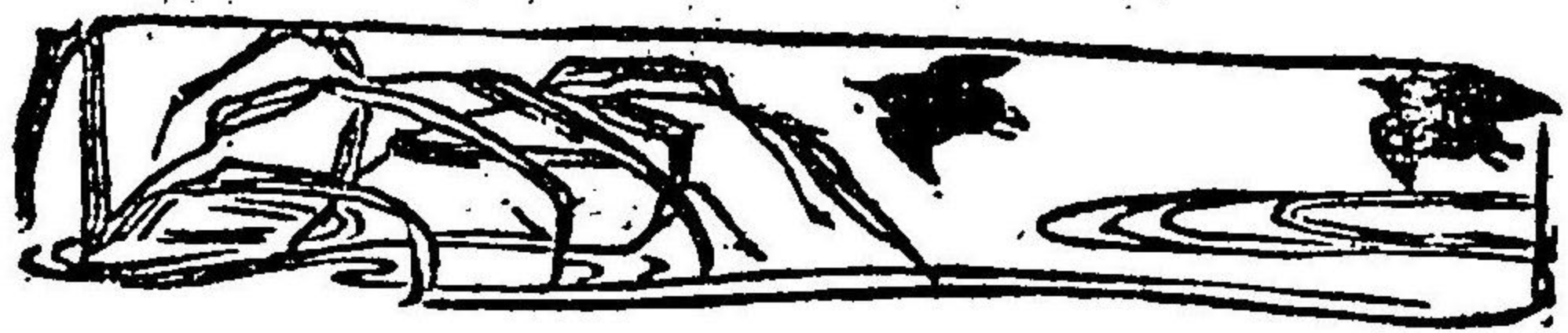


殊に阿部は名代の白柄組の一人なれば、早速又五郎を家に入れて、廻状を以つて、組合の者へ通知を致しますと、事あれかしと待構へて居りました若者、時を移さず阿部の屋敷へ集つて、フシ(義を見てせざるは勇なきなり、若し池田家より兎や角云はゞ、弓矢を以つて應對致さん。)と一同が敦圀さまする、組外の者まで之を傳へ聞いて、旗本は一身分体、我々も棄て、は置かぬと走せ集る者何百人。此の事池田家役人の耳に入り、重役より主君に申上げましたから、御病中の宮内少輔殿烈火の如く怒られて、重役を以て掛合ひ、兎や角申さば弓矢を以ての挨拶も苦しからずとのお言葉に、重役



等も當惑致して居る所へ、御分家一千石の主、主君の腹違ひの御舍弟池田勘兵衛殿が参られて、言葉巧みに、御兄君は説得され、又五郎と母親とを取換へる事に相談を定めて歸られた。勘兵衛殿は御舍弟ではあるが、旗本の一人なれば、事を擧げるに母親が人質になつて居つては、思ふ存分の事が出来ぬから、兄君を欺して、又五郎の母を旗本の方へ取らうといふ策略だ。池田家に於ては、然様策略とは夢にも知らぬから、フシ(頭預けに相成つた、又五郎の母親を、怪しき駕籠にと打乗させ。)

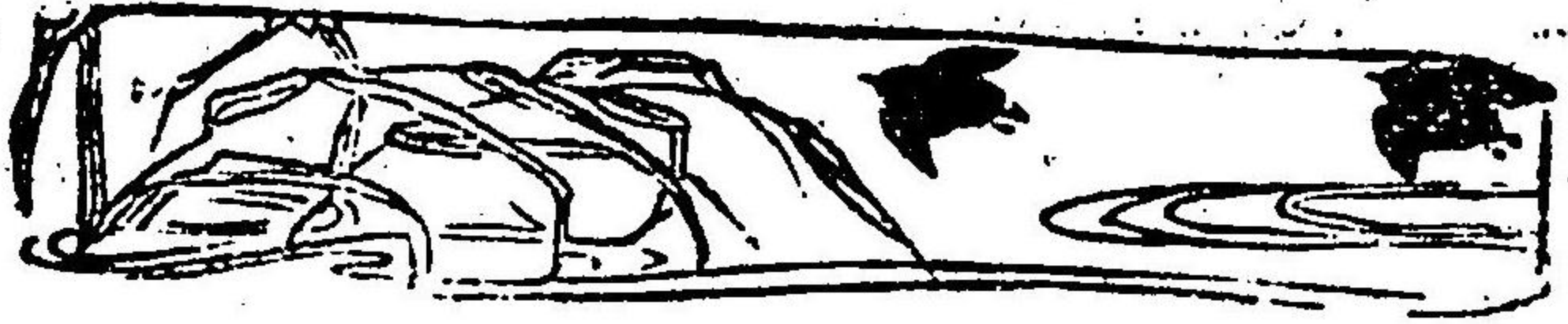
役人笹川團右衛門附添つて、六番町の阿部の屋敷へ参りました



所、池田勘兵衛の策略で、折柄御用伺ひに参つて居りました酒屋の小僧に、阿部の息子の衣類を着せ、大小を帯させて、阿部の息子と詐り、當座の人質として、笹川に渡し、又五郎暫時別離をなす間、母親を借りたといふので、笹川も、阿部の息子を人質に取れば大丈夫と存じまして、母親を出して池田勘兵衛に渡しました所、待てど暮せど又五郎を渡しません、其の間に人質として駕籠の中へ入れた偽若様が、家へ歸ると云ひ出したので、事露頭を致し、笹川團右衛門は、主君の命を辱しめた申譯に、阿部の門に身を凭せて、腹掻き切つて相果てました。供に附いたる若黨等が、笹川の死骸を駕籠に乗せて屋敷へ歸り



此趣を重役に届出でますると、一家中は大騒動、御病中の宮内少輔殿は是を聴かれて、一方ならず憤怒られ、最早此上は、家名祿高を抛つても、事の始末を致さんと重役等に申渡される又旗本の方に於ても弓矢を以て應對致さんと決心致し、
 フシ(折角治まる世の中に、而も天下のお膝下が、
 修羅の巷と相成らんご、上下一同立騒ぐ。)
 されば幕府の御老中方に於ても、一方ならず御心配致されまして、御老中筆頭松平伊豆守殿が、早速大久保彦左衛門殿を召寄せられて御意見を尋ねられますと、大久保殿は、一人に多人數の事故、天下の泰平を保つには、宮内少輔殿を亡き者にするよ



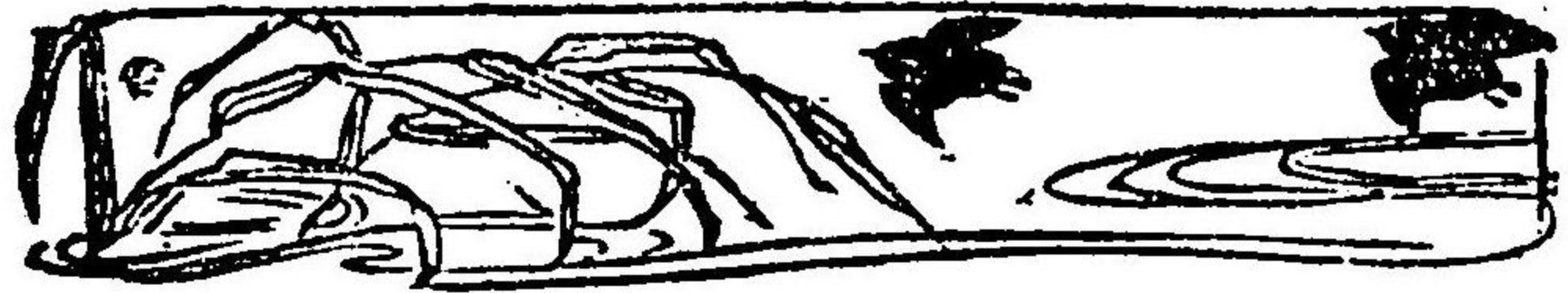
り外に仕方がないとの御考へで御座いますから、伊豆守もそれに同意されて、早速御典藥半井通仙院蘆菴と申す名醫を招いて池田侯毒殺の事をお頼みになつた。

（御老中松平伊豆守が、思ひ込んだる御頼み、天下のために池田侯、殺せば我も死ぬる身じやこ、心を定めた通仙院。）

早速承知致して、八重洲河岸、池田侯の御屋敷へ御病氣御見舞に伺ひまして、毒藥を調合致して、先づ自分で毒見を致し、宮内少輔殿に差上げて退りました。が、途中、駕籠の中で悶死を致しました。



宮内少輔殿は、毒とは知らず召服つて、トロ／＼と一睡り致され、目を覺されると共に烈しく苦しんで、息を引取られました。さればお屋敷は、上を下への大騒動、直様通仙院を引立てよと然なきだに氣の立つて居る池田の家の中四五十人、小川町通り神保町の通仙院の屋敷へ駈付ければ、通仙院は歸邸の途中駕籠の中に相果てました趣で、駈付けた人々も、せんすべなく引取りました。何に致せ、主君の御他界、殊更幕府の法律にも、諸侯の變死は家名に拘はる大事故、又五郎の事は其方除け、御親戚一同上屋敷へ集り、御評議に相成ると、新太郎光政殿、また御若年乍ら聰明の方、此事を表沙汰に致す時は、容易ならぬ事



先づ、先代は病氣の届けを幸、嫡子光仲に家督相續を願ひ、家を安泰に致すが宜しからう、靱負には、數馬といふ一子もあれば、武士道の立つやうに致させる工夫もあらうとの言葉に、一同感じ入り、早速此の儀を公儀へ願ひを上る。御老中に於ても暫時其儘に差置かれ、阿部と外二名の旗本には五十日の寺入を仰せ付けられました。

フシ（やがて過ぎたる五十日、寺入御免となつたれど、喧嘩の對手が此の仕儀故、一時に逸つた旗本衆、氣拔のしたる如くにて。）

力を入れて居るのは、池田勘兵衛、近藤登之助、水野十郎左衛



門、三枝四郎、太田善太夫と、張本の阿部四郎五郎ばかり。

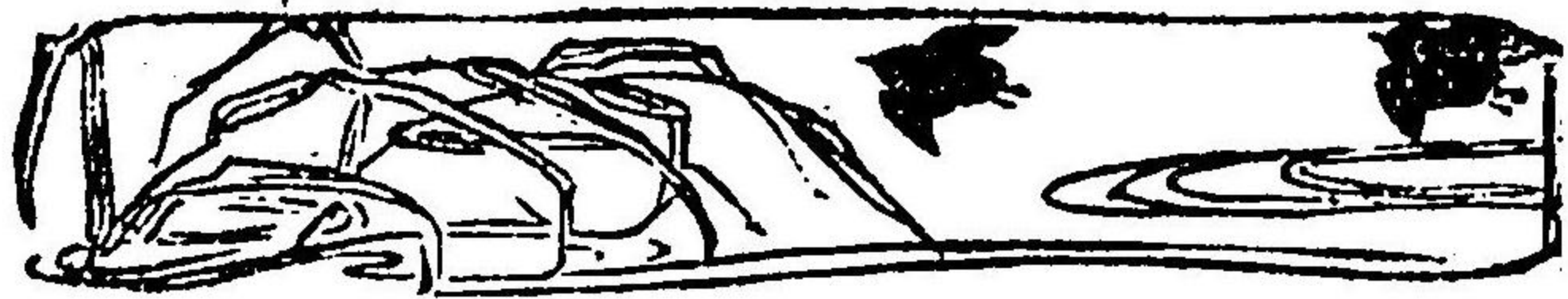
『何と各々、重役は重役だけに巧い事をやるなア、斯様成つて見れば、我々が肩張つても布簾に腕押しじや。』

近藤、水野他二人もこれに同意致して、

『是は池田の申す通りじや、併し阿部は何と考へるな。』

阿「イヤモウ某が一朝の義侠心を助けて呉れた各々方の志、千萬忝けなすが。』

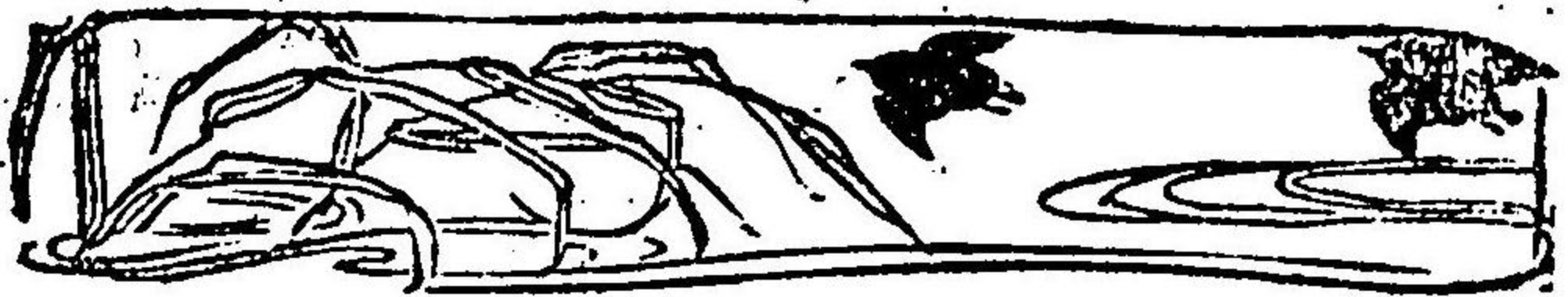
フシ（茲に一つの難がある、外でもないが又五郎、卑怯未練の奴なる上に、靱負に一子數馬あり敵と視ふは知れた事、さすれば彼を此儘に、



外へ出すのも心配じや、幸肥後の人吉の、相
 良は我の縁類故、彼地へ彼を送つたら、大抵
 知れは致すまい、此儀如何と計らへば。』
 皆「ウム、然様じや、是まで匿まつて、今出してやるのも心許
 ない、肥後の人吉なら好からう、それでは早速然様致すが好
 い。』
 と皆々賛成を致し、これより又五郎を、九州は肥後の國人吉へ
 送る評議を致しました。
 却説、公儀に於きましては、因州家から願ひ出ました家督相續
 の儀に就いて、御老中方、色々評議致されましたが、伊豆守よ



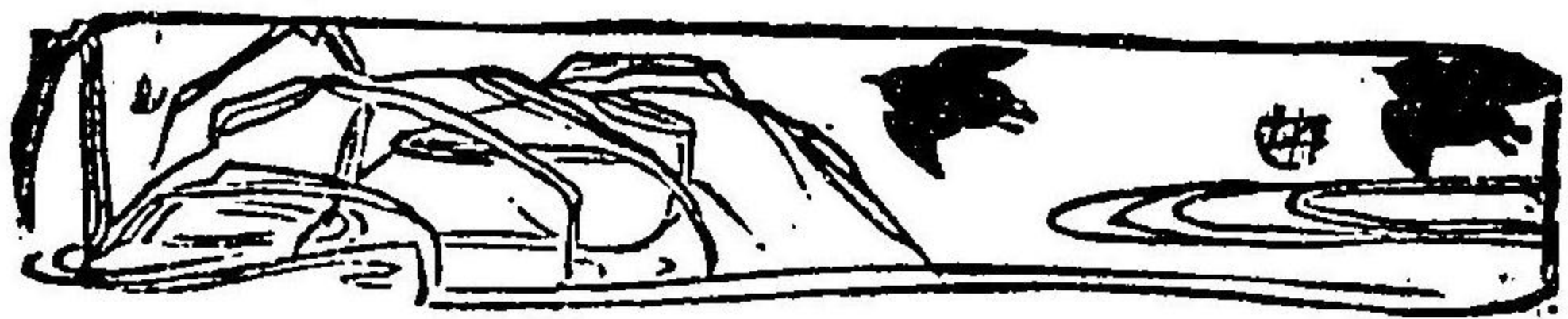
り將軍に申上げた仔細もありますから、一旦家名断絶といふ
 事に致し、即日、六十五萬石の高を二つに分け、因州鳥取は、
 宮内少輔殿の嫡子相摸守光仲殿に、備前岡山は、新太郎光致殿
 に下し置かれる旨御沙汰が御座いました。
 そこで、鞆負の遺子數馬は、父を討たれた怨恨忘れ難く、何卒
 致して又五郎を討取り、亡父の靈魂を慰めんものと、更めて支
 配へ就いて、仇討の儀を願ひ出ますと、此儀尤の事とあつて、
 早速の御免許、有難く思ひまして、
 フシ敵又五郎の動靜覗へば、まだ旗本の甲乙が、
 彼を守護する模様なれば、如何はせんご苦心



する、折柄来る無名の手紙。
 開封して見ると、手跡は正しく池田勘兵衛、其の文言に、我等
 旗本仲間の義理合より、阿部四郎五郎に味方を致し、河合又五
 郎を匿まつたれど、御身の孝心を憐んで、御報知を致すが、又
 五郎は阿部の計らひで、武藝の出来る浪人三十餘名を附けて、
 肥後の國人吉相良家の城下へ送る手配、其の勢が揃ひ次第、江
 戸表發足致すとの趣、又々委細は後より知らせるとの事に、數
 馬は早速これを重役方に見せますると、一同不審に思ひました
 が、偽りとも思はれませんでしたので、主君に御覽に入れると、光仲
 殿も、奇異事に思ひ玉ひ、兎も角も、後の便りを待つことゝ相



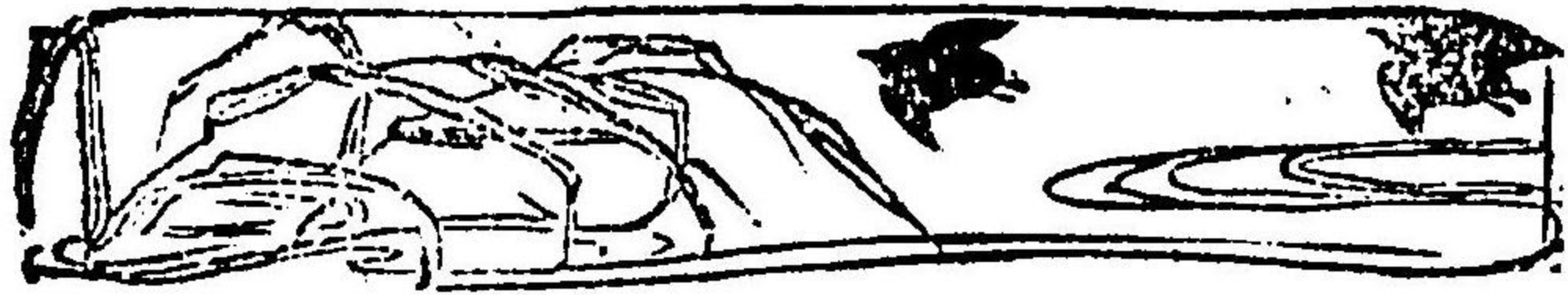
成りますすと、又々、無名の手紙が参り、愈々浪人勢も揃つたか
 ら、道中は相良壹岐守の家中主用濟のため歸國と云觸らして、
 大凡何月何日頃、江戸表發足、東海道を上るとの趣が書いて御
 座いましたので、數馬は大きに喜びましたが、
 フシ(對手は大勢此方は小勞、殊に若年の數馬なれ
 ば、此の大敵を討取るは、中々容易の事では
 ない、頼みに致すは姉婿、荒木又右衛門義村
 じや。) 數馬は直様、旅立の用意を整へまして、御暇乞ひのために、主
 君にお目通りを願ひますると、早速お聽届けになつて、主君光



仲殿より、懇なるお言葉を賜はり、尙數馬が若年の身で、大敵に對ふことを心許なく思召して、其の事をお尋ねに相成ると、數馬は、只今、本多殿の御本國播州姫路に居る姉婿荒木又右衛門に助太刀を頼む趣申上げますと、荒木又右衛門は柳生眞影流の達人じや、又右衛門の助太刀とあらば大丈夫とお喜びに相成り、色々懇なるお言葉を賜ひし上、銘刀一口に御符狀を添へて下し置かれ、なほ、お盃まで賜はつたので、數馬は、
 フシ（有難涙に咽びつゝ、厚く御禮申上げて御前を退出し。）
 其夜は親類縁者を集めて、一同に別離の酒を酌み交し。



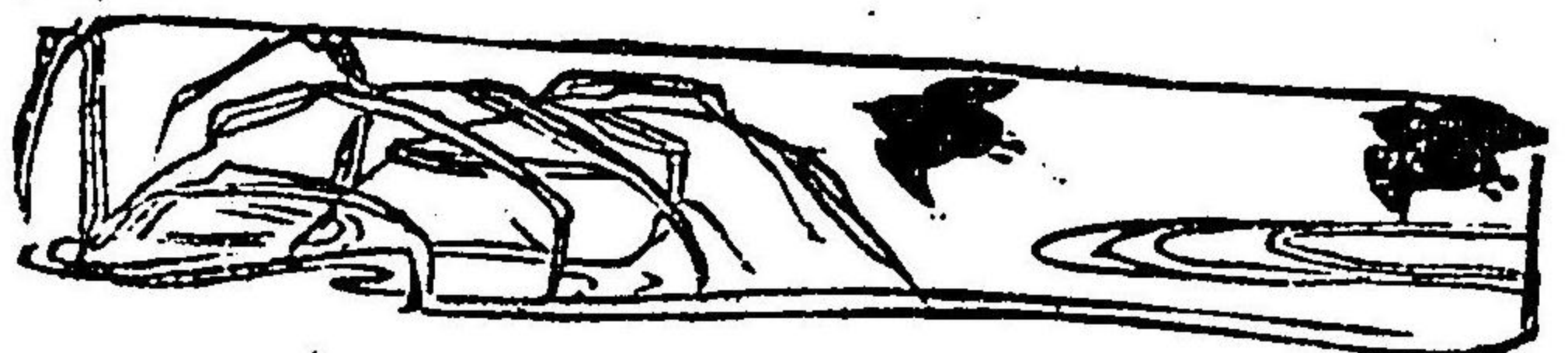
フシ（翌朝と相成つたれば、石堂武助を召伴れて、母親はじめ一同の、見送人に打別れ、己が屋敷を立出で、千代田の城を後に見て、踏出す道が東海道、品川大森打過ぎて、さして行くのが播州姫路。）
 旅路に日敷を重ねつゝ、京大阪も通り越し、やがて、播州は姫路本多大内記政勝殿の御城下へ到着致し、其夜は旅館に泊り、翌日御指南番荒木先生を訪ねれば、二の丸御堀端角のお屋敷、左右は調練場で、静かなる所。女中の取次によつて、周章しく出て来たのは姉のお民殿、



民『是は數馬殿か武助も同道か、サア先づ此方へ。』
 と、下男が持ち出す湯にて足を洗ひ、數馬は玄關から、武助は
 勝手から上つて、一間へ通りませれば、姉弟久し振りの對面、
 懐しさも懐しく、姉は、母からの手紙で、江戸表の出來事も詳
 しく存じて居りますが、
 フシ（先だつものはたゞ涙、語る言葉も後や先。）
 武助は兩手を突いて、お民に鞠負殿横死の次第を詳しく語る。
 お民は、
 民『何時も變らぬ其方の忠義、誠に頼母しい、此の後は猶更頼
 むぞや。』



と、お民は武助の眞心を賞めまして、
 民『オ、妾とした事が、話しに紛れて、つひ失念……。』
 と、それより茶や菓子を出して、三人色々話し合つて居ると、
 ○『お歸りー。』
 と玄關で呼ぶ聲に、ソレと一同出迎へれば、荒木又右衛門、刀
 を提げて玄關を上りながら二人を見て、
 又『是はく。』
 と云ひながら奥へ通り、一別以來の挨拶も終んで。』
 又『扱數馬殿、御父上には不慮の御最期、實に残念至極の事で
 御座つたのう、某も直にも飛んで行きたかつたれど、何分遠



路ではあり、殊に主人持つ身の思ふに任せず、今日まで過ぎ越たが、貴殿は如何にして當地へ参られたか。』

敵』さればで御座る、河合又五郎は亡父の仇のみならず、亡君の敵、片時も早く彼を討取り、君と父との靈を慰める所存で御座る。』

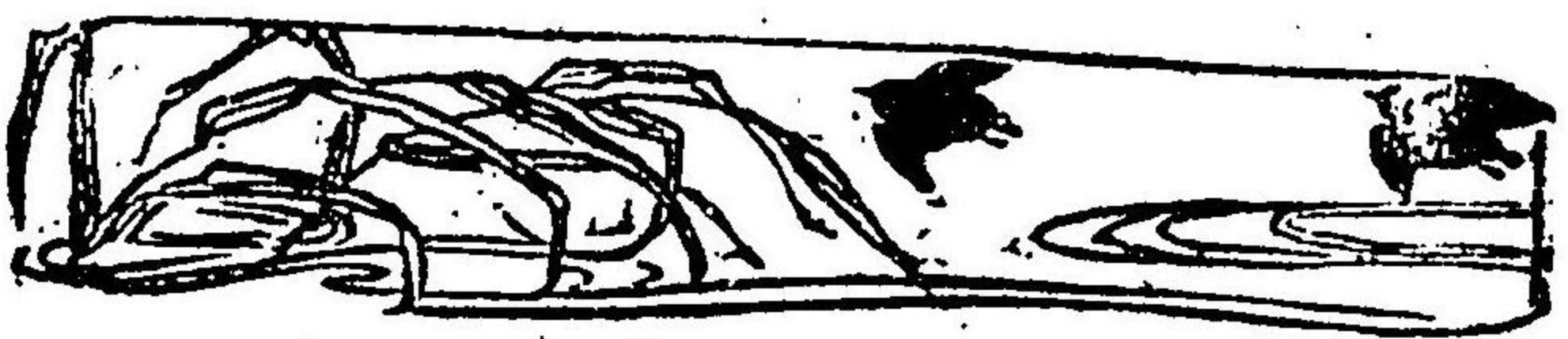
又成程、流石は報負殿の御子息、其お心掛は結構々々、武助も同道とは、侍の端然様ありたい物、對手は何人あらうとも、僅か主従兩人、殊更若年の身、又右衛門威服致す、某も舅の敵、浪人の身の上ならば、早速同伴致すべきを、今は仕官の身の上なれば、それも思ふに任せず、誠に残念に思ふ。』



フシ(案に相違の言の葉に、數馬武助の兩人は、吃驚顔を見合せて。)

兄上、先達て母じや人からも、書面を以て御依頼したる助太刀の儀は、御承知下さらぬか、此にも詳しく認めて御座る。』と懐中より取出した母よりの手紙を又右衛門に渡せば、又右衛門は受取つて、一通り讀終り、

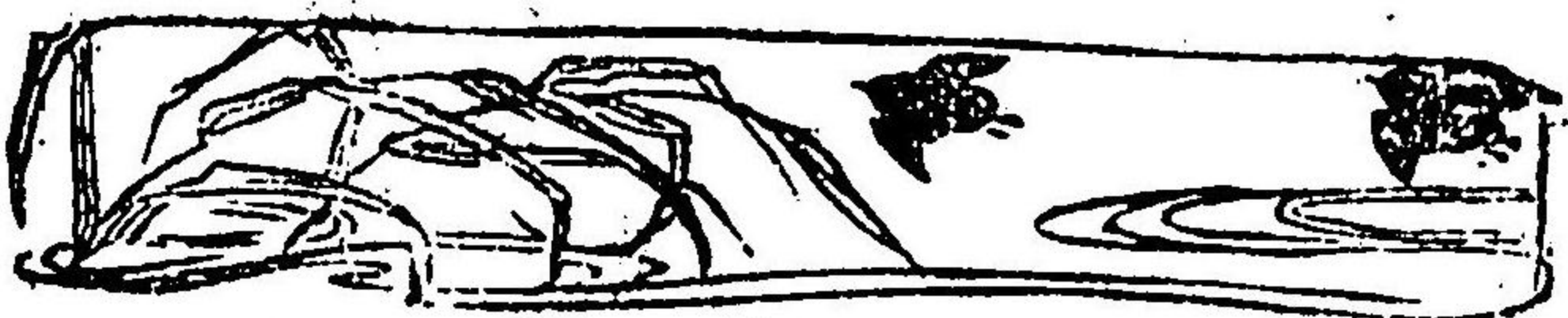
又『御母上からも呉々お頼みではあれど、何を申すも某は本多大内記政勝公の家臣とあれば、道の違ふ仇討は主君へ願ふことも相成らず、願つた所でお免許のあらう筈がないでは御座らんか、數馬殿。』



九十四
 「仰せは御尤ながら、目指す敵が又五郎一人なれば、助太刀を願ひは致しませんけれど、何を申すも、又五郎には、旗本衆の助力にて、浪三十人餘り附添つて、肥後の國人吉相良の藩へ送る趣、御兄上の御同藩で、槍術の指南番櫻井兄弟も又五郎の縁者で、内通の儀も分つて居ります、斯様な所へ未熟の某と、此なる武助との兩人が立向つたところで、到底本懐は遂げられようとは思はれません、未練とお叱りあるかは存じませぬと、我々母子親類共は固より、主君をはじめ重役の方々も、たゞ一人の御兄上を頼みに致しまして、對手が何十人あらうとも、敵討は大丈夫と、安堵致して呉れたる所



其のお言葉では、餘り情けなう御座ります。』
 と、數馬は早や涙含んで居ります。
 フシ（武助も傍から口を添へ。）
 武先生、只今若旦那が仰せの通り、何れも様が、貴下様が御在あるからにやア、仇討の儀も相叶ふであらうと、其の日の來るのを、指折り數へて待つて居る譯で御座います、貴下様にも舅御様の仇に御座りますれば、それを貴下様が助太刀は叶はんと仰有るは餘りで御座います、何卒お快く御承知下し置かれて、一日も早く本懐を遂げられまするやう、お願いで御座ります。』
 九十五



と赤心面に現はして頼みます。おたみも聞兼ねて、民「妾よりもお願ひ申し上げます、何卒、良人様、御承知の通り未熟な數馬で御座りますれば、何卒助太刀なされて下されませ。」

フシ「姉弟主従三人が、涙ながらに頼めども、如何いふ心組か又右衛門、なか／＼承引く氣色更になく。」

又「コレ／＼民までが然様いふ事を申すか、女子は斯様な事に口出しをするものではない、數馬殿も武助もよく聞け、數馬殿は、姉に連添ふ又右衛門が、斯うして居るによつて、それ

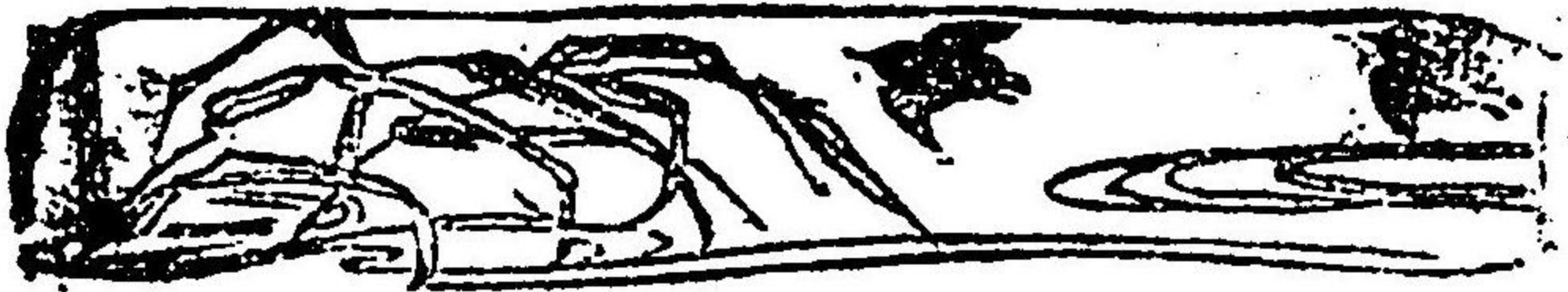


で仇討を願つたか。」

數「イエ／＼決して然様では。」

又「然らば、貴殿はじめ、主君重役の方々までが、他家の家來又右衛門を頼みに致す事はあるまい、然様な事を致さば、貴殿のみならず、三十餘萬石御大身の名折ではないか、又右衛門といふ姉婿がありながら、それを頼みにも致さず、年若き主従兩人で本懐を遂げたらば、生前は固より、死後千年の後までも、兩人の譽れではないか。」

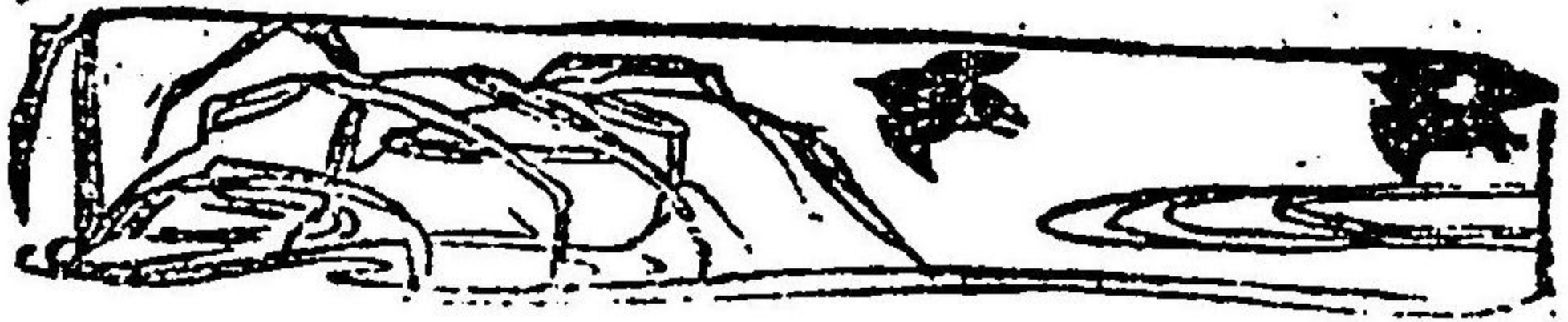
フシ「成る成らざるは天に在り、爲す爲さざるは人に在り、我身一つの其外に、味方は無しと知



らざるか、舅の仇討の助太刀じや、親類縁者の助勢じやご、我身を自由になす程ならば、高が武藝の指南番、五百石といふ大祿を、下さる主君があるべきか、此所の道理をよく辨へて、敵を討なら立派に討て、若しや及ばぬと悟つたら、仇討の儀は思ひ断り、己が屋敷へ立歸り、佛事供養を懇ろに、母へ孝養怠るな、幸たみも居合せば、三人熟考へて、よく思案を定めよご、刀を手に取り又右衛



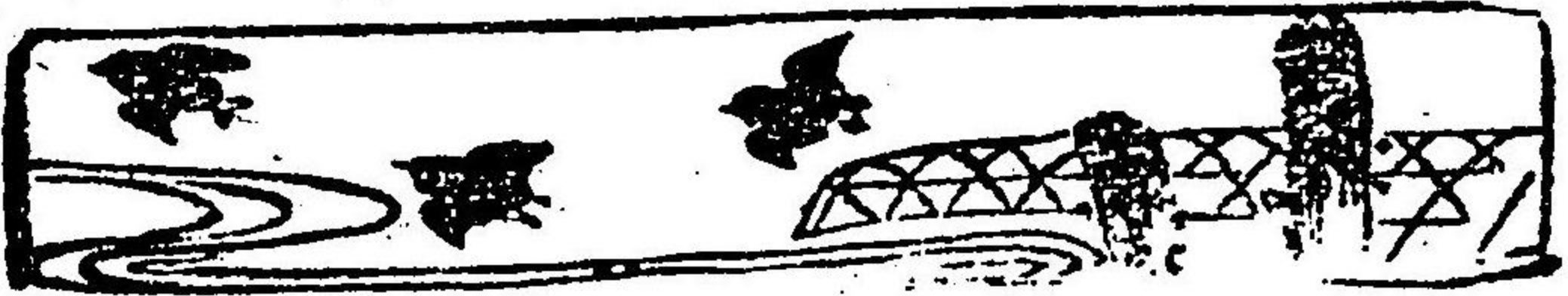
門、すつくとばかり立上れば。女房お民は涙ながらに押留め。忠僕武助は両手を支へ、差俯向いて居りましたが、此時、ムツクと頭を上げ、武「これほど事を分けてお願い申しても、御助太刀は下されませぬか、御心の淺猿しさ、名人も頼みにはなりません、仇討と申したとて、困難しい事では御座りませぬ、首尾よく参らば敵を殺し、仕損ずれば、當方の生命を先方へ遣るまでの事主人と二人なればとて、一心罩めれば、討てぬ事は御座りませぬ、若旦那様、頼みにならぬ御方を頼まずと、二人で又五郎を討ちませう、サアお歸りなされ。」



と、武助は氣早く立たうと致しまする。

數『ウム、武助よく云つて呉れた、御兄上の御心底は未練至極坐して佛事を營むは、町人百姓でも出来る事、苟にも渡邊鞆負の一子、助太刀がなくなれば敵が討てぬとあつては末代までの耻辱じや。』

フシ(建久四年五月某の日、會我の兄弟兩人は、鎌倉殿の御狩場で、父の仇なる工藤祐經を、討取つたる例あり、堅き心の一徹は、石にさへ矢が立つといふ、假令又五郎鬼神なれば忠と孝に凝りつめた、刃の立たぬ事やある



僅二人の力でも、敵の討てぬ事やある、いざ参らうと立上る。)

數馬武助の兩人が、荒木夫婦に挨拶も致さず、玄關をさして駈出でれば、又右衛門夫婦も續いて駈出でる。又右衛門は二人を止めて、

又『暫時待て、待てと申せば待て。』

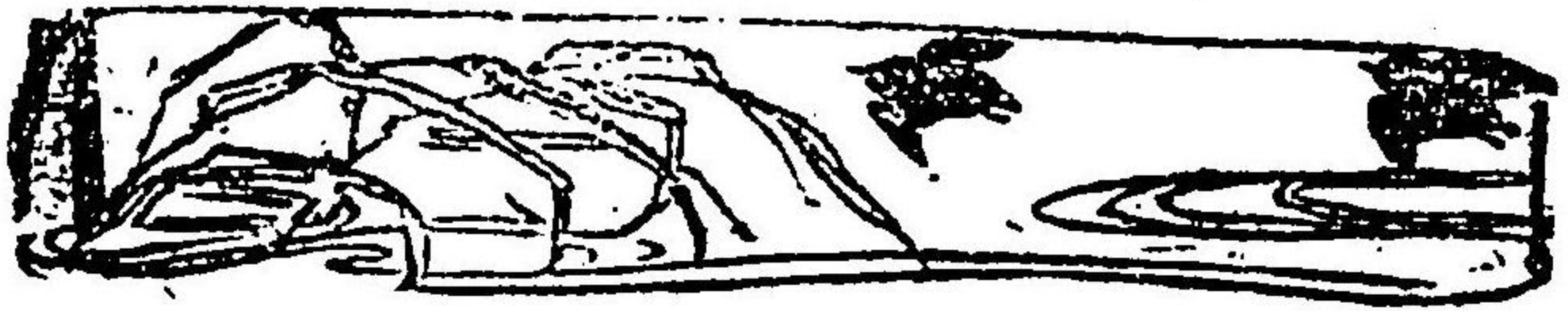
式臺まで下りた幸從二人の手を取つて、又右衛門は奥の一間へ伴れ戻る。不審は晴れず、二人は座に直りまする。

フシ(助太刀せぬと謝絶つた、荒木は二人を何故止めた、これから荒木が何事を、語り出すか後

席せき詳くはしく讀よ立たる、一寸ちよつと一息ひといき入いれまして。

【第三席】

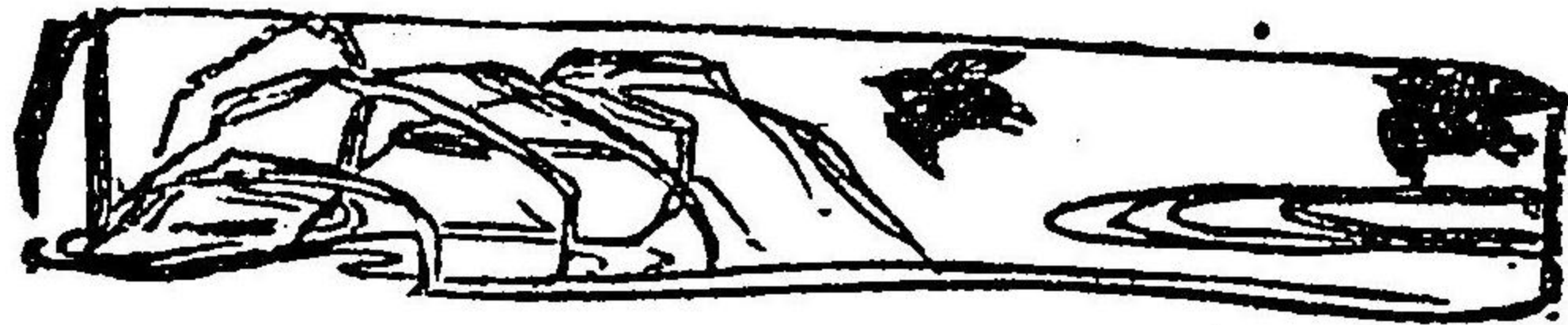
フシ(蔓つるの纖弱かろい牽牛花あさぎほは、垣根かきねの竹たけに搦からみ附つく、
颯さつと暴風あらしが吹ふき來きれば、垣根かきねは脆もろく倒たされる
垣根かきね倒たれりや牽牛花あさぎほは、最早もはや起ある力ちからなし
昔源平八島の戦たたかひに、平家へいけの大將たいしやう宗盛むねもりは、能つ
登守のりつね教經のりつねの、奇才きさいを恃たみて敗やれたり、兎角とかく無な
益えきは人恃ひとたみ。



扱さて、三人さんにんは座ざに直なり、又また右衛門ゑもんは兩人ににんに向むかひ、

又また先刻せんこく申まをした事ことは、皆みな兩人ににんの心底しんていを試ためすための作つくり言こと、江戸
表おもてより、初はじめて鞞負殿おきへどりが河合かあひまた又五郎ごろうなる者ものの手に掛かり、無殘むざん
の最期さいごを遂とげられた趣おもむきの知らせがあつてからは、又また右衛門ゑもんの
胸むねの中うちは、たゞ仇討あだうちの外ほかはない、なれ共ども、我われは主しゆある身みなれ
ば、直すに出府しゆつぷも致いたし兼かね、時節じせつの來きたるを待まちち居をつたのじや、先
刻こく、兩人ににんが參まかり、母子親類おやこしんるわをはじめ、主君重役しゆくんぢゆうやくまでが、又また右
衛門ゑもん一人にんを頼たのみと致いたされるとの事ことを聞きいて、敵かたきは大勢味方たいせいみかたは
二人ふたり、それも若年じやくねんの者等ものどもなれば、其儀道理そのぎもつともとは思おもへども、
フシ(總そうじて人恃ひとたみは不覺かくの基もとじや、後おくれ先立さきだつ世よ

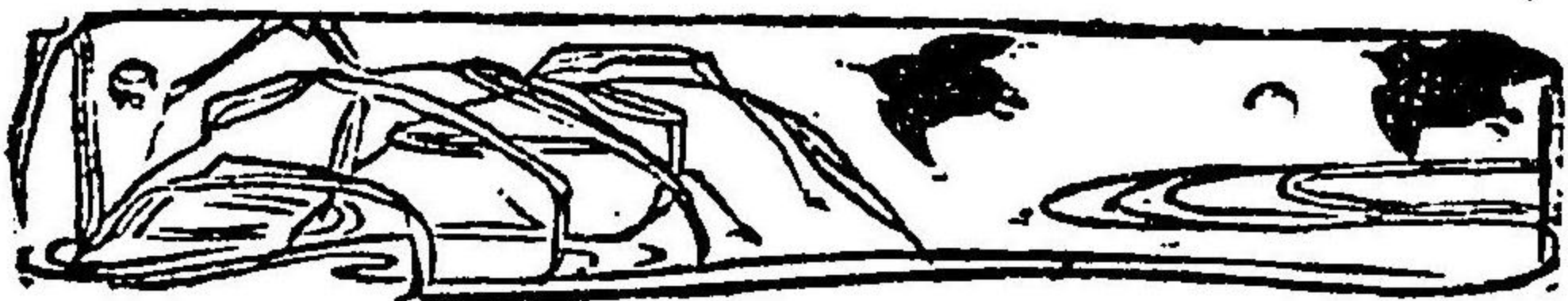




の習ひ、若し某が承知して、敵を討ちに出た
 先で、病氣でもせば何とする、荒木がなくなれば
 仇討も、出来ぬとあつては腑甲斐なし、それ
 故汝等兩人の、心を試めしみた所、會我兄弟
 の故事を引き、主従二人で大敵を、討たんこ
 心取直し、荒木頼むに足らずとて、立歸らん
 こ致せしは天晴じや、其精神を撓むるなご、
 初めて明す荒木が真心。」
 聽いて武助は、ハツと頭を下げ、



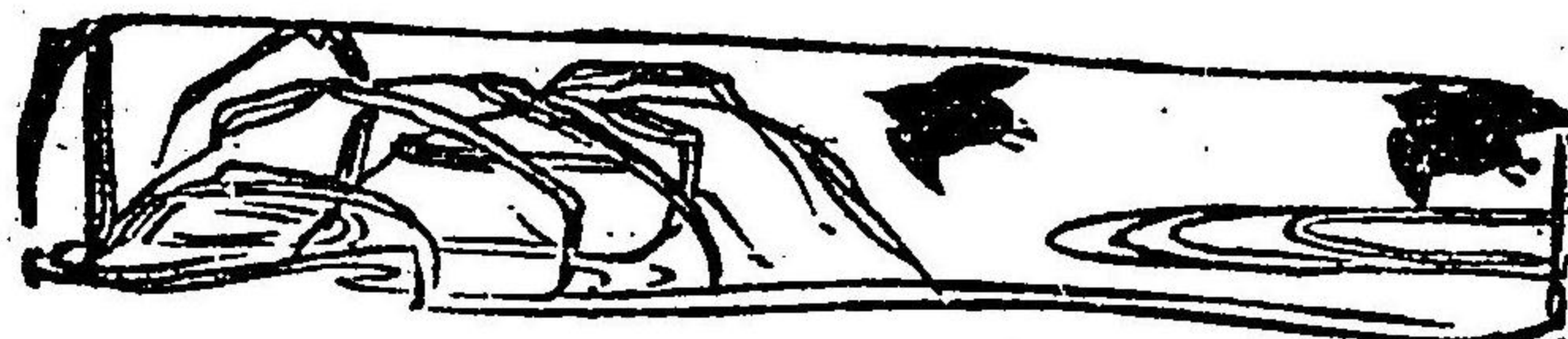
武「然様な事とは存せずして、無禮の段……。」
 と云はんとしたのを、又右衛門は遮りて、
 又イヤ／＼其れが却つて宜いのじや、何に致せ、當家に長居
 する時は、家中の聞えも、却つて爲には相成らぬにより、兩
 人は旅籠へ下つて休息致し居るが好い、明日にも下宿を選ん
 で滞在させう、それに、數馬の申す通り、櫻井甚左兄弟も、
 河合の縁類なれば、事に依つたら、此奴等から、好い手掛り
 も出来ようか、何事も秘密が大事じや。」
 フシ「一伍一什を聽いたる數馬主従は、天にも昇る
 心地して、喜び勇むぞ道理なり。」



又右衛門は妻を呼んで、酒肴の支度をさせ、二人と共に、酒を酌み交し、妻にも概略を話せば、妻も初めて安心致し、長居は恐れと主従は、暇を告げて、以前の旅館へ戻る。翌日又右衛門は、召使ふ下婢の父親善助に、一軒の小家を借受けさせ、數馬主従を其所に住はせ、密々櫻井の様子を覗ふと、案の如く、江戸表の旗本衆から、密使を以て、又五郎の身の上を頼む様子、又右衛門は、善助の小才を見込んで、善助から間者を廻させ様子を探らせる、其の間者といふは善助の姪、其頃、櫻井甚左方の下婢となつて居りました女、甚左は好色の上、貪慾で御座いますから、此女を妾に致して居る。善助は此女から様子を聴い



ては又右衛門へ知らせる。旗本衆も如才はない、櫻井兄弟多分の金を所持致して居る故、今度の路用の半分は、此奴等に出させる事になつて居ります事が、又右衛門の方へ知れる、勘兵衛殿の手紙では、肥後の人吉へ送るとあるが、何日何所を立つて参るか、それを知るは櫻井兄弟、そこで又右衛門は、斯様なる上は、櫻井兄弟を本多家に置かぬが何より、夫と同時に暇を取つて、彼等の跡を追廻せば、自然敵の在所も知れるであらうと思つて、彼等を本多家から出す工夫を致しました。茲に播州姫路は十五萬石本多大内記政勝殿の藩中に、櫻井甚左衛門、甚助の兄弟がありました、兄は寶藏院流槍術の指南番、

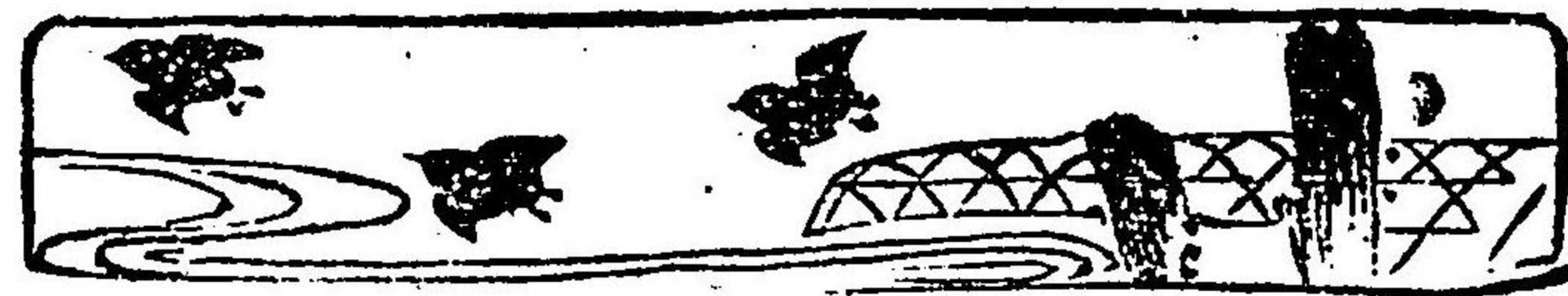


弟は大和流弓術の指南番を致して居りましたが、主君が先年江戸表に於て、荒木又右衛門を五百石で召抱へ、翌年國表へ引連れられましたから、荒木の評判が宜くなる程、櫻井は信用が落ちるので、妬ましく思つて居りました所へ、

フシ（近頃荒木又右衛門、酒に酔つては門弟等に、

櫻井甚左兄弟を、罵詈惡口を致すより。）

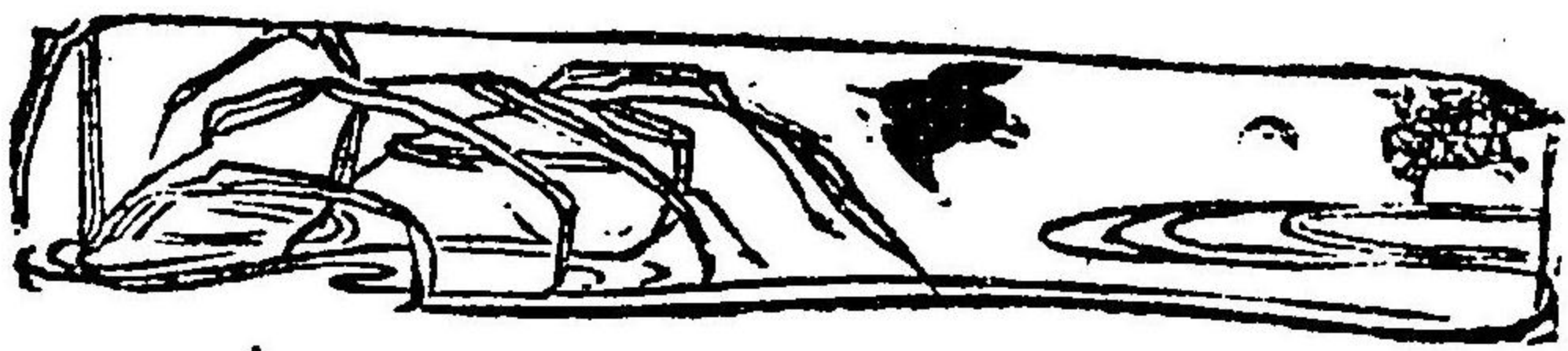
櫻井兄弟に聞えて、太く憤怒つて居りましたに、此程、又右衛門は、主君のお對手を致し御酒を頂戴し、深く酩酊致しまして盛に櫻井兄弟の技藝の拙いのを罵り、果ては、主君の御前も憚らず、



フシ（ころりと横に肱枕、前後不覺の高軒。）

是はしたりと、近習の者が、起さうと致しますのを、打棄て置けとのお言葉で、近習を次へ下げられて、羽織を脱棄て、襦袢に綾取つて、承塵に掛けた九尺の槍を下してしごきを入れ、眠つて居る又右衛門の眞額へ電火の如く突掛た。アハヤ又右衛門は田樂差しと見てあれば、又右衛門ハツと頭を廻らす早業、槍はグザと疊をさす、又右衛門ケラ首をしつかと押へ、主君が焦つて引く槍に躰をつけ、ムツクと起直り、

又『御前、豫て御懇望の柳生流の極意眞劍白刃取りはこれに御座ります。』



と主君より取つた槍の石突で、主君に突いて掛れば、主君も一生懸命、右へ交し、左へ流し、ケラ首を押へながら引く槍に躰を付けて進まれます、又右衛門が槍を放せば、大内記殿は、直に取直して、石突にて突掛られまするを、又右衛門左の手に丁と取つて、

又『そこで御座ります、自在の變化、それが肝要。』

と二三度同じ事をして主君に傳授を致し、氣合の聲が次の間へ洩れたので、

『控えて居つた近習等、こは何事の出来ど、周章狼狽紙門押し開く。』

又右衛門は當意即妙、聲高々に、

又『ハ、御前、未熟なる槍術、何者より御學びありしぞ。』

大『問ふまでもなく、甚左衛門より。』

又『ハ、笑ふに堪へたる此の槍術、是等は市中の悪太郎どもの戯れにも等しき業、是にて御指南番が勤まるならば、修行は頓と入らぬ事、以後槍術は止め遊ばされるが宜しう御座ります。』

大『なれども又右衛門、甚左衛門が眞槍を以て突掛らば、予と同一ではあるまい。』

又『恐れ乍ら、只今のお手並の百倍の業といへども、又右衛門





恐れは致しませぬ、不肖又右衛門、大祿を頂戴致するのみにて、眞の技藝を御覽に入れぬも不本意に御座りますれば、至急御前に於て、甚左衛門と試合仰付け下し置かれなば有難き仕合に存じ奉ります。

大「それは何よりの興ならん、明日にも申し附けるであらう。」
フシ「是皆荒木の策略、愈々試合に打勝つて、櫻井

甚左兄弟を、本多の藩から追出せば、大願成就の端緒ご、荒木は心に喜んで。」

其の日は御前を退りました。
主君は、重役よりして、櫻井甚左衛門に、試合の儀仰付けられ

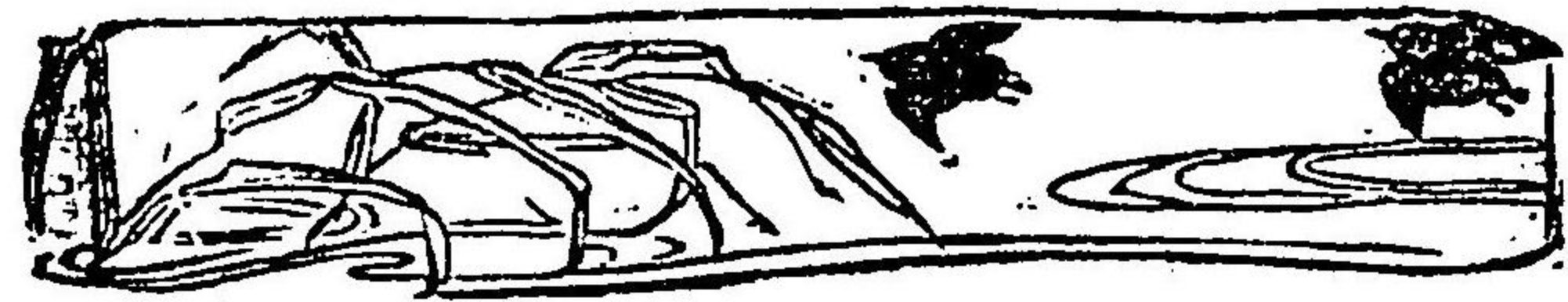


ますと、甚左衛門固より荒木に及ばぬ事は存じて居るから、ハタと當惑した、けれ共、免れる道も御座いません、何か好い工夫はないかと、弟甚助に相談を致しますと、甚助は、

弟「然らば兄上、貴兄が荒木と試合を致され、若しも危く見えたる節は、弓矢を以て某が加勢致さば宜しいでは御座らぬか。」

兄「ウム、好い所へ心が附いた。」

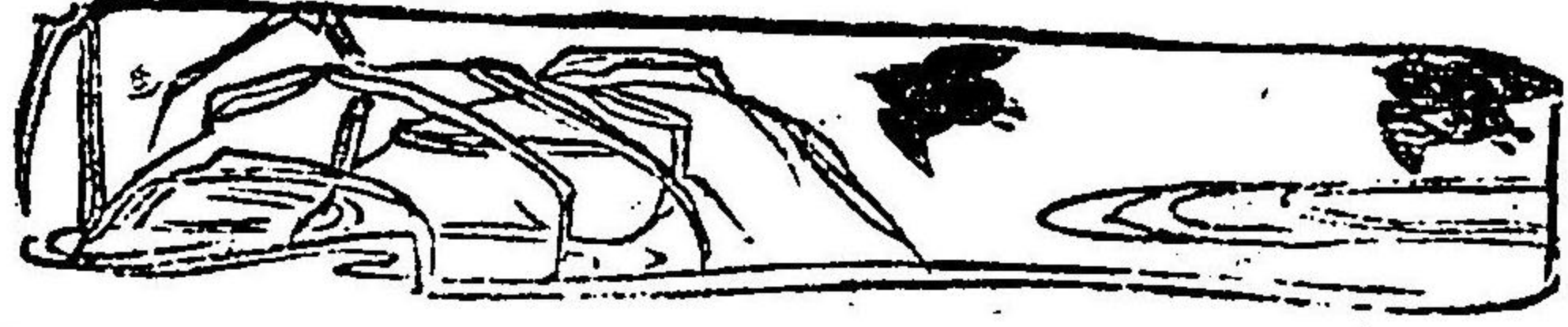
と、兄は槍、弟は弓と、同時に試合仰付けられたさ旨願ひ出ますると、其儀又右衛門へお沙汰に相成りますので、又右衛門は固より望む所と、お受け致すので、愈々、明日、お馬場に於て



双方騎馬で試合を致すことに定まりました。
 フシ（扱其の日と相成れば、櫻井甚左兄弟は、支度
 萬端整へて、兄は鎌鎗弟は半弓、好みの馬に
 打乗つて、主君の御出ない間に、馬場の廻り
 を七八度、地乗り致して待ち構へたり。）
 此方は又右衛門、悠々と數盃の酒を傾け、時分はよしと、馬場
 へ参りますと、正面の馬見所には主君大内記殿着座せられ、家
 臣一同、左右に列座致して居り、櫻井兄弟は、馬見所の椽で、
 主君の御機嫌を伺ひ、又右衛門の参るを待つて居りましたが、
 又右衛門が参りましたので、早や支度に取り掛ります。又右衛門



は別段の支度も致さず、平常の羽織袴で、主君の御前へ出て御
 機嫌を伺ひ、酔に堪へ兼ねて、椽にベタリと坐る様子に、兄弟
 は仕済したりと心中に喜び、
 櫻「サア荒木氏、御支度如何に。」
 又「別に支度は御座らぬ、馬上に在るも枕に就けるも、用意は
 同じ事で御座る。」
 と、主君に一禮致して、木刀を取り、小奴の曳き来る馬にヒラ
 リと跨りました。
 フシ（主君をはじめ一家中、槍と刀の試合なら、荒
 木の勝は知れたれど、對手が二人で一人は、



飛道具での試合では、勝負如何と目を注ぐ。

双方馬場の中央へ馬を乗出し、櫻井兄弟は左右に分れ、兄若し危き節は、弟甚助半弓を以て打負かさうと身構へに及んだ、又右衛門は甚助に向つて、

又『甚助殿、貴殿の矢の先には何か附いて居るやうじやな。』

甚『是は試合の事故、蒲公英で御座る。』

又『是はしたり、然様な物は取除けて、銅根雁股でも附けられ
ては如何。』

然らばといふので、甚助は、若黨を宅へ遣はして、一手の征矢を取添へました。愈々これより試合と相成り、甚左衛門は、九



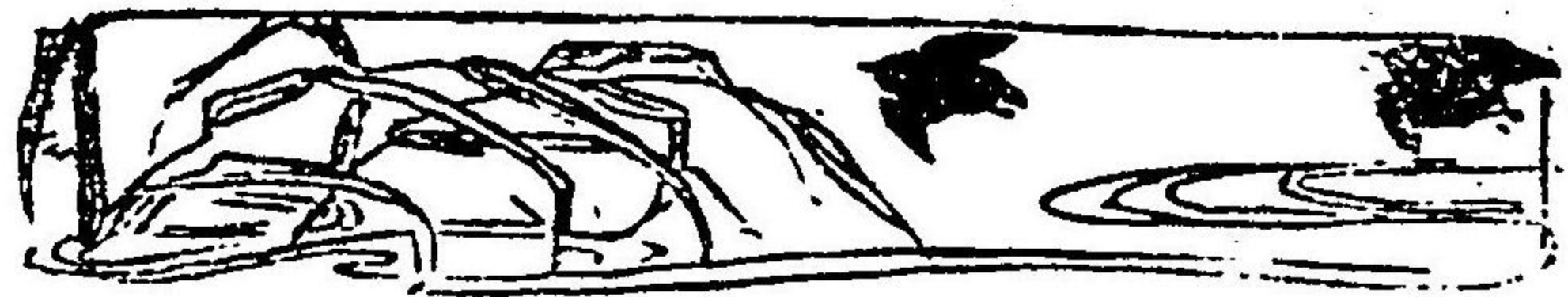
尺柄の鎌槍リウとしこいて突掛る、

フシ(心得たりと又右衛門、突來る鎗の穂先をば、

右に左に打拂び、躰を轉ずる其の早業、馬は

宛然萬字巴、自由自在に乗廻す。)

弟甚助は、弓に矢を番へて放たうとしても、兄の身躰が邪魔になつて、又右衛門を射る事も相成りません。ヤ、半時程、甚左は又右衛門のために揉立てられ、今は身体も疲れ果、流る、汗は全身を浸す有様、馬見所では、一同がアレヨ〜と伸上り眼を睜り、手に汗を握る、荒木の精神は愈々旺盛にして、甚左の疲勞を見て、少しく馬を乗り開けば、茲ぞと甚左が、エーと



突出す槍先を、左に流して附入るや否、左手の肩を健たかに打てば、甚左は五躰痲痺れて、アツと一聲、鞆とばかりに馬から落ちる。これはと驚く甚助が、狙ひを附ける暇なく、疾風の如く飛込んだ又右衛門、甚助が弓の握りを矢の根へ掛け、フシ（横に拂つた一刀に、弓矢諸共取落し、下る所を躍り込み、兄同様に左手の肩、碎くるばかり打下せば、是も堪らず眞逆様、もんごり打つてぞ落馬する。）

主君をはじめ一同が、ワツと上げたる鯨の聲、しばしは鳴りも止みません。



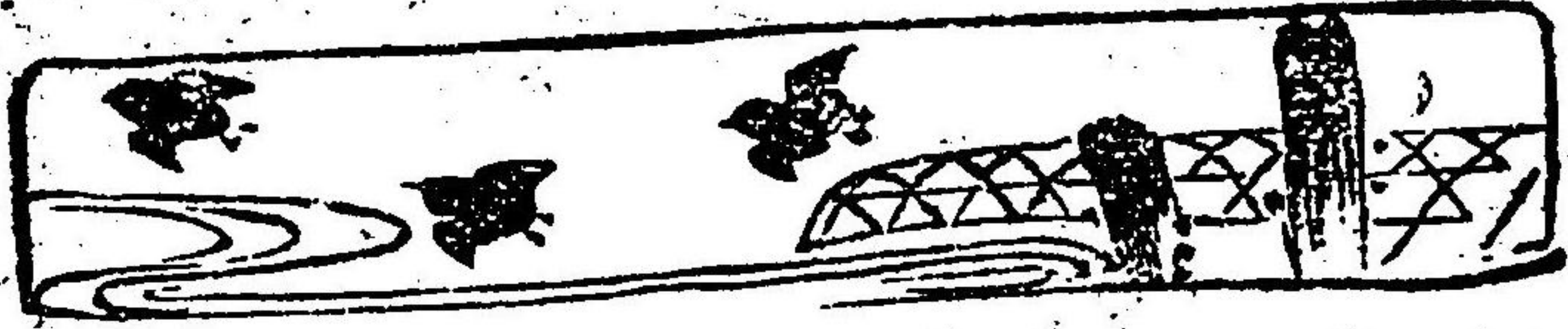
主君は三人を傍近く召され、
『ま何れも大儀であつた、予は大きに満足致した。』
と仰せられ、それより三人に御盃を賜つた。

サア斯様なると、櫻井兄弟は面目なくて、家中の者に顔合せる事も出来ませんから、内々兄弟相談を致し、主家を離れて浪人致さうと、主君には病氣と披露をして引籠り、今まで町人に貸附けた金も多くありますから、厳しく取立て、金も大方集りましたによつて、兩人は立退く模様、甚左の妾お村は固より荒木の間者で御座いますから、早速善助に知らせる、善助から荒木へ告げる、荒木は善助に一つの計略をお村に授ける、お村は主



家へ立戻る。やがて、立退きの支度も整ひましたによつて、支配頭へは、我々兄弟とも武藝未熟故、諸國修行をなし、上達の上、歸家をお願いたく、此段主君へ御取成しをお願いしたいといふ書面を認め置き、甚左はお村に相當の手當を致して、暇を出さうと致しますから、お村は荒木から授かつた計略に、

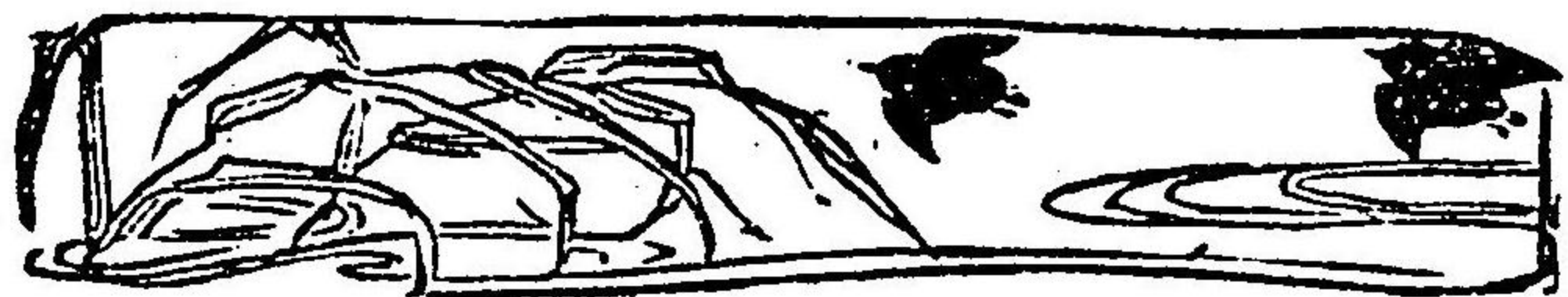
「ハラク」と滾す空涙、そりや胴慾な旦那様、假令賤しい此の身でも、一生貴郎の御傍で、枕の塵を拂はうと、心を定めて居りました、それを今更暇をやる、他へ縁附けとはお情ない、惨い情ない御言葉、露の野末に臥すこと



も、貴郎故なら厭やせぬ、何卒妾も共俱に、お伴れなされて下されと、口説き歉けば甚左衛門、不憫に思ひ堪へ難く。

「イヤ其方の志は有難いが、今此所を離れては、差詰め何所へ行くといふ目的もない。」

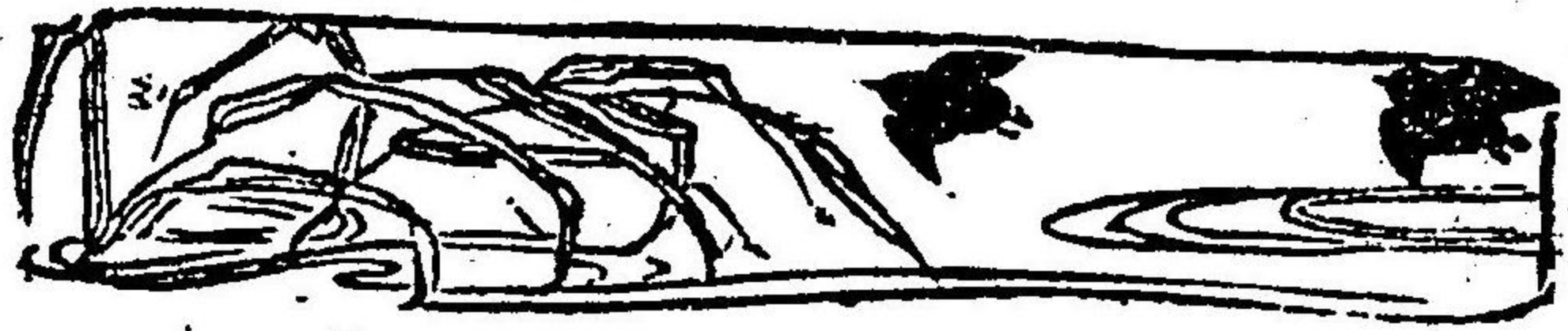
といふをお村は、なほ泣き口説いて、行先を尋ねると、固より計略とは知らぬ甚左は、一先大阪へ赴き、居所定まり次第通知を致すから、後より参れと、大切な荷物をお村に預けて、其夜住馴れた姫路の城下を出奔致しました。此方の荒木又右衛門は右の次第を善助から聞きまして、櫻井からの便りを待つて居り



百二十二
 ますと、十日程経ますと、善助が持つて参りました一通の手紙
 是ぞ櫻井甚左衛門から、お村に送つた手紙で、又右衛門、取る
 よりも早く開封致して見ると、事細々と認めたまへ、當時は、
 大阪中の島二丁目生田屋源助方に居るから、其方に預けた茶器
 を賣拂つて、早々参れとの事でありますから、又右衛門は、少
 しも長く櫻井を大阪に留め置くやうと存じまして、お村に教へ
 て、只今病氣中、全快次第、仰せの品を賣拂つて、御傍へ参る
 といふ手紙を書かせて差出し置き、それより主君には、柳生眞
 影流の極意を皆傳致し、折を見て、舅勲負横死のお話しを致し
 て、晴れて仇討とは願はねど、それを機会にお暇を願ひまする



と、主君も大きに惜まれました、懇ろな御言葉を賜はり、色々
 の品を下し置かれましたので、又右衛門は有難涙に咽んで御前
 を退り、善助には充分の手當を致し、愈々家を畳み、妻のお民
 に山住伊兵衛、數馬、武助の四人を引伴れて、
 フシ（住み馴れし播州姫路を立出で、飾磨の津よ
 り船に乗り、さして行くのが津の國浪花、海
 上波も静穏に、船中無事で程もなく、着いた
 所が安治川口。）
 扱五人は大阪安治川口の港に着きましたから、船を上つて、旅
 宿を取り、平野町三丁目糸屋七郎兵衛といふ糸問屋の主人は以



前又右衛門の門人で、町人乍らも中々の達者で御座りますから
 又右衛門は糸屋を訪ねますと、七郎兵衛は大層喜んで、お茶よ
 菓子よと待遇す。又右衛門は七郎兵衛に向ひ、
 又『時に七郎兵衛殿、町人乍らも其許を武士と見掛けてお話し
 申すが。』

實は斯様斯々の次第と、委細の話しを致しますると、七郎兵衛
 は、驚くやら、歎くやら、喜ぶやらで、

『自分如き者を、然程までに思召してのお話、随分身に引受
 けて、及ばず乍らお力になりませう、幸ひ土藏の後ろは隠居
 所で御座りまして、只今は空いて居りますから、是へ皆さん



をお伴れなさいまし、併し先生、三度の御飯には、別に御馳
 走は出来ませんが。』
 又『イヤ〜決して其の心配には及ばぬ事、然らば好意に従つ
 てお世話にならう。』

そこで又右衛門は旅館へ立歸り、妻のお民は、是も又右衛門の
 門人で、堺大道筋東二丁目紅屋惣伴と申す素封家へ預け、江戸
 表へ使船のあり次第、江戸屋敷へ送る手配を致し、數馬、伊兵
 衛、武助の三人を伴れて、糸屋七郎兵衛の隠居所へ引移りまし
 て、先づ是でよしと、三人を残し置き。

『今迄着て居た綿服を、絹布の衣類に更めて、』

深編笠を打被り。

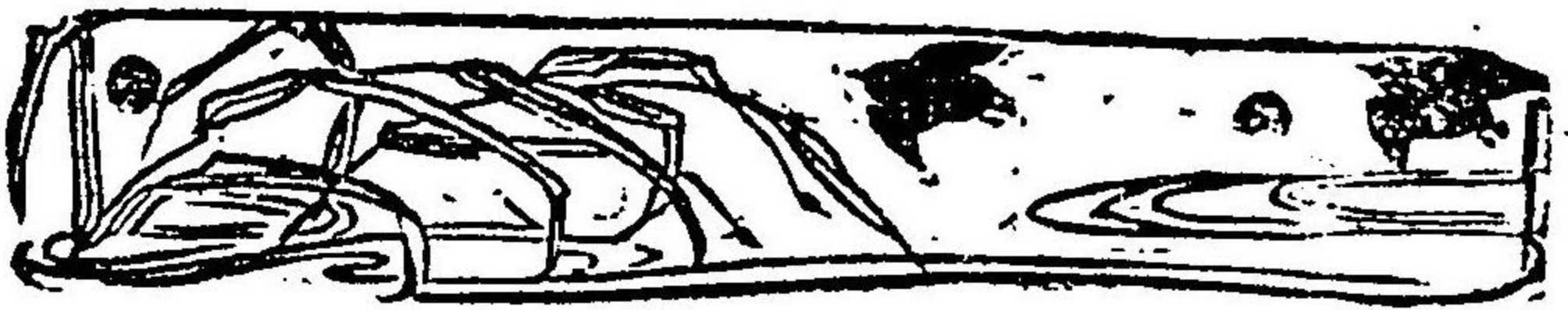
櫻井兄弟の宿所を尋ねますと、今は天満老松町は生田屋の控屋へ引移つて居りましたから、其所へ参りますと、折柄、姫路から伴れて参りました下男が、玄關の掃除を致して居るから、又右衛門は、

又「櫻井御兄弟は御在宿召さるゝか。」

荒木と知らぬ下男は、身装も賤しからぬ人躰、由ある人と思ひまして、

男「ハイ在宿で御座ります。」

フシ「夫はくご云ひながら、笠脱ぐ顔を打眺め。」



下男半平は吃驚仰天、顔色變へて奥へ入り、

男「旦那様、参りました。」

櫻「何人が参つた。」

男「荒、荒木又右衛門が。」

櫻「愚物奴、何故在宿じやと申した、是非に及ばぬ、通せ。」

下男半平の案内によつて、又右衛門は奥へ通り、

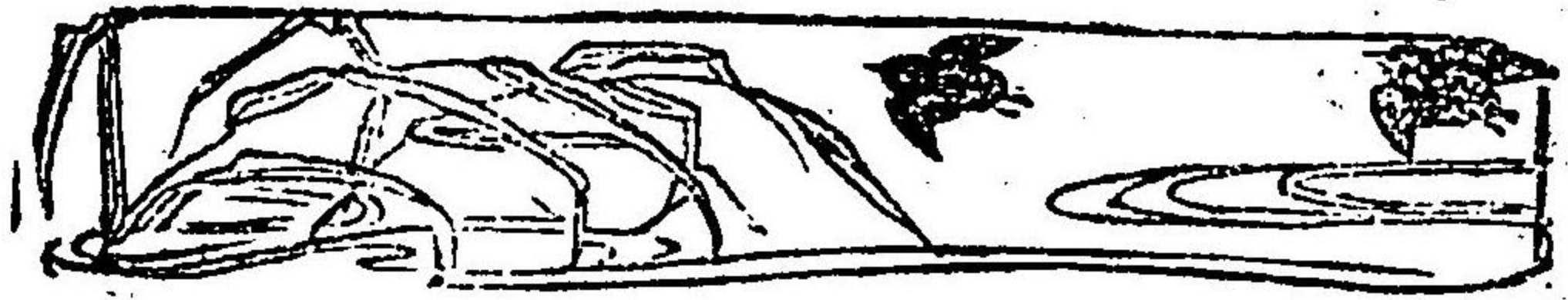
又「是は櫻井御兄弟、久方濶で御座る。」

兩「是はく荒木先生殿、ようこそ、シテ先生には如何の御用

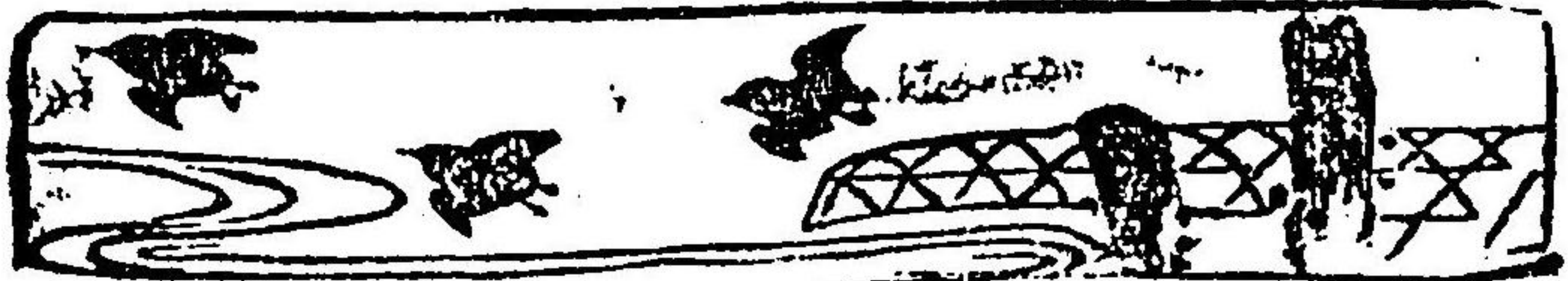
で當地へ。」

又「然ればで御座る、此度某主家を無理にお暇を願ひ、掛り





や繋る鼻の敵、坐禪傍觀も相成らず、數馬の助太刀に出掛け
 たが、何が偕本尊の數馬が、參州岡崎で熱病を煩つて、十日
 程にて病死致して、仇討は沙汰止みと相成り、多くの費用も
 かゝつた上、江戸表へも參られず、歸參も相成らず、又右衛
 門進退谷るといふ場合で、當地に彷徨つて居る次第、それ故
 嗜好な酒も飲めず、誠に困却致して居る所、フト此所を通り
 掛け、半平の姿を見止め、扱は御兄弟の御住居かと、故郷へ
 でも歸つたやうな心地、先づは安堵致した。』
 『オー偕は其の數馬殿とやらは病死致されたか、それはどう
 もハヤ……………。』



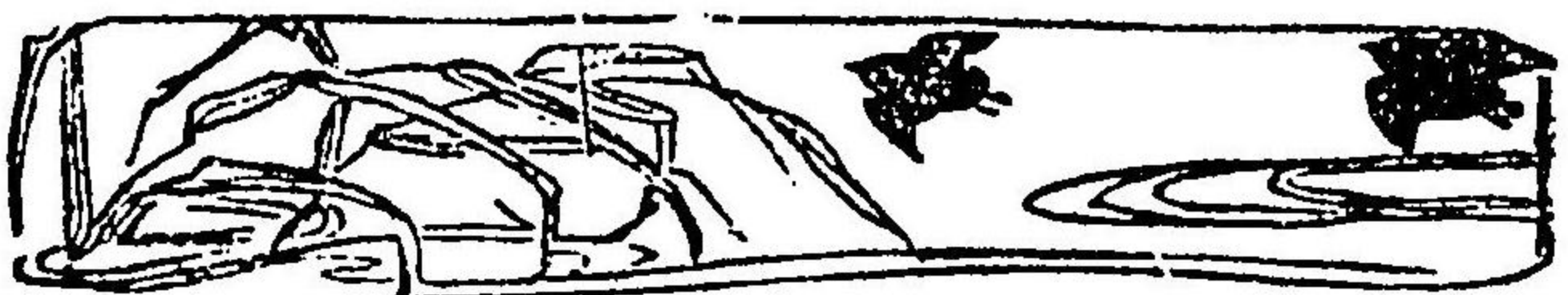
又『のう御兄弟、久々じや、先づ一杯頂きたいもので御座る。』
 フシ（心に染まねご櫻井兄弟は、對手が荒木じや仕
 方がない、忌な顔さへなし兼ねて。）
 酒よ肴と調へて出しますれば、荒木は、杯洗の水をあけて、徳
 利一本只一杯、飲むはく、實に長鯨が百川の水を吸ふといふ
 は此の事か、やがて又右衛門先生は、鱧腹飲んで好い心持に酔
 拂つた、
 又『イヤどうも御馳走に相成つた。』
 櫻『イヤく御粗末で御座つた、又お出掛けなされヨ。』
 又『明日又參らう。』



と暇をつげて、それからといふものは、毎日々々、又右衛門先生は櫻井兄弟を訪ねては、酒を飲むので、櫻井兄弟も、ほとんと持餘して、弟甚助は、頻りと考へて居りましたが、或日の事「弟」兄上、荒木が毎日参るのは、事によつたら、江戸表との内通を知りをつての事かと存じますが、如何で御座らうや。」
 「兄」或は然様であるかも知れん、若しそれを知られては一大事じやが……。」
 「弟」然らば、彼を亡き者に致した方が宜しからう。」
 とこゝで兄弟相談の上、天満六丁目の顔役有頂天九郎兵衛と申す者に手土産を贈り、又右衛門とは申さず、悪い胡麻の蠅に取



付かれて迷惑致すからと、眞實嘘構取交せて話しを致し、荒木殺害の事を頼みますと、有頂天は早速承知を致し、何日の何時頃と手筈を定めて、時の來るのを指折待つて居りますと、
 「フシ」扱も其日と相成れば、何時ものやうに又右衛門門。」
 やつて参りますと、前以て云含められた下男半平が、今日は主人兄 弟南へ参つて、夕刻でなければ歸宅せぬと申しますると又右衛門不在とあれば致し方がないと、又右衛門は一旦歸宅を致し、七ツ下りの頃、再び参りますと、兄弟揃つて居ります、又右衛門が参りましたので、喜び顔で、酒肴を調へ、常に變つ



て好遇しますので、荒木も心中不審に思ひ乍ら、例の如く大白満引、進められるまゝに、深更まで飲み続け、餘程酩酊を致して、肱を枕にごろりと横になつた。

フシ(こゝで荒木に寝込まれては、折角工んだ計畫が、何にもならぬ水の泡。)

櫻井兄弟は周章て、又右衛門を呼起し、言葉巧みに送り出し、甚助は先へ廻つて有頂天に知らせます、又右衛門は謠を唄ひ乍ら浪花橋へ差掛ると、大の男がコツクリ突當る。

又『是は失禮、酩酊の上なれば許し玉へ。』

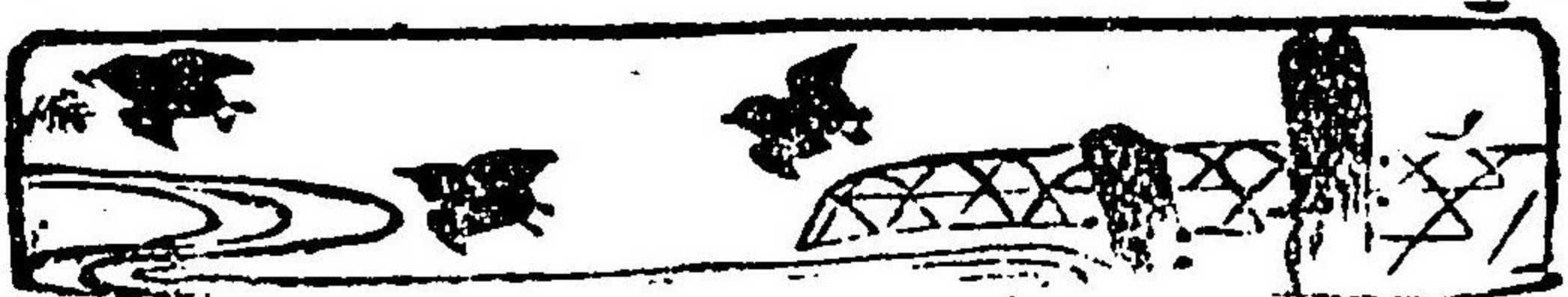
二三人間行くと又一人、續いて又一人來る奴を躰を交せば、其奴

は機轉を喰つて、後へ轉ぶ途端、後から突當る奴がある、續いて一人が棍棒を以つて後から打掛るを、

フシ(酔つてはゐれど又右衛門先生、いかでか本性違ふべきや、ヒラリとばかり躰を避け。)

弱腰を拂つて、倒れる奴を踏付ける、ソレと五六人、一度に棍棒で打掛るを、飛掛つて一人の棒を奪ひ、忽ち其所へ打倒して了ふ、其の一刹那、物をも云はず、抜打ちに斬付ける奴の刀を打落し、首筋擱んで引据えて、下弦の月に顔見合せれば、有頂天の九郎兵衛、

九『ヤア先生……………の』



又『貴様は九郎兵衛じやナ、某に何の遺恨あつて、斯様な次第に及んだじや。』

九郎兵衛は又右衛門の昔の門弟、尋ねられて、一伍一什の話しを致す、そこで、又右衛門が一つの計略を授けますると、九郎兵衛は其の計略に従つて、子分等を引連れて、櫻井方へ参り、胡麻の蠅は叩殺して、石を背負はせ川へ投り込んだが、其のために、子分の中に即死が三人、負傷者が是々、殊に人殺しをすれば、當分大阪にも居られぬから、手當として二百両出して呉れる、若し忌なら、恐れ乍らと奉行所へ訴へ出ると申入れた、甚左兄弟も仕方がないから、二百両の金を出しまして、翌朝に



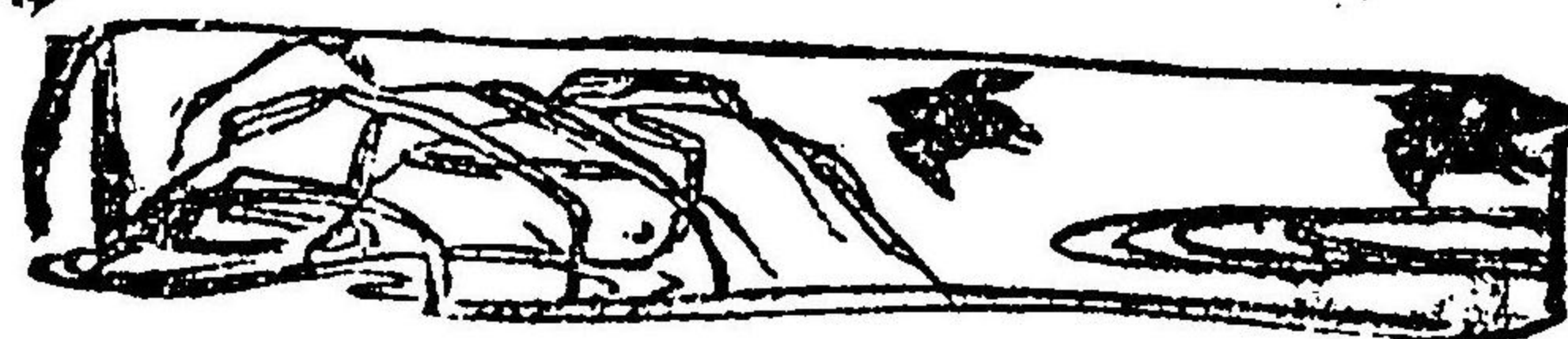
なると、又右衛門、又ヒヨツクリとやつて参るので、櫻井兄弟吃驚仰天、又右衛門が歸つた後で、兄弟顔見合せ、まんまと二百両してやられたかと愚痴たらしくの所へ、玄關で案内を乞ふ聲、半平も居らぬので、甚助が立出て見れば、大兵肥満の立派な侍、

フシ(言をもいはず懷中より、取出したる一封の、

書面を甚助受取つて。)

奥へ参つて、兄弟で開封致せば、江戸表阿部四郎五郎より、又五郎發足の期日も迫れば、兄弟早速出府致し呉れよ、就ては金子の處も斯様々と細々の書面、そこで、使者を奥へ通して、





姓名を尋ねれば、是ぞ、旗本衆の依頼に依つて、又五郎附添の一人と相成つた西國の浪士竹内玄丹で御座いますから、

フシ（是より櫻井兄弟と、竹内玄丹の三人は、如何なる相談を致するか、後席又々伺ひ奉る。）

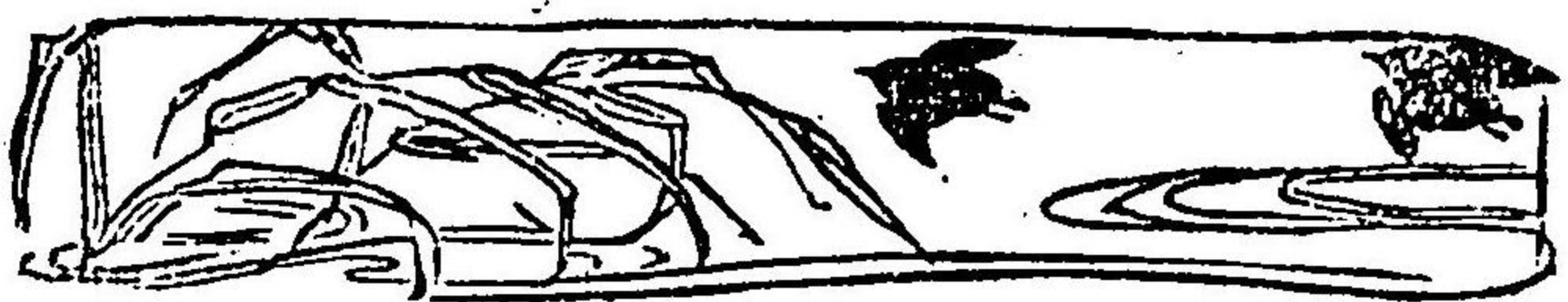
【第四席】

フシ（眠つて居ても虎は虎、伶俐なやうでも狐は狐、弱い狐が強い虎を、捕らうとしてもそれは無理じゃ。）



扱櫻井兄弟は、荒木に付き纏はれ、愈々困り果て、遂に俠客九郎兵衛を頼んで、荒木を亡き者と企てたが、美事失敗、揚句に二百兩の損害、如何はせんと苦心の折柄、竹内玄丹が参りまして、下向を促しますにより、早速出府は致したいけれ共、何しろ荒木といふ者があるので、實は斯様々々と、玄丹に物語りを致しますと、玄丹は、自分から鬼玄丹と稱する大天狗、大口開いて呵々と打笑ひ、

玄『荒木如き者一人、何程の事が御座らう、彼も敵の片端。』
只一打の計略で是々と、教へましたから、兄弟は大喜び、然らば何分お願ひ申すと、躰し合せて待つて居る所へ、荒木は例の



如く遣つて参りました、兄弟は大喜びで、荒木を、廓遊びに誘引ひますと、荒木も大賛成、

又「某も長らく此地に住んだ事はあれど、まだ遊廓は存せん、是非お供が致したい。」

フシ（是より三人打伴れて、ぶらく出掛けて行く

先は、浪花で名代の新町九軒。）

新町名代の吉田屋へ登樓る、吉田屋の主人は矢張り荒木の昔の門弟なれば、荒木を見るより、驚いたり喜んだり、櫻井兄弟はたゞ呆氣に取られて居る。そこで又右衛門は、主人に向つて、又此の御兩名は、中國邊の家家で、此度大阪見物に参られて

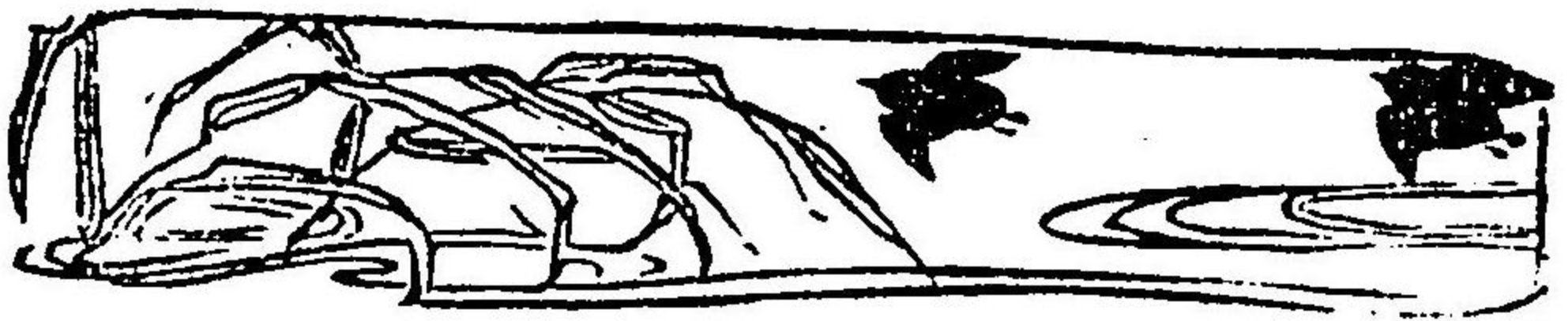


當地は名代の遊廓なれば、是非散財をして見たいとの事で案内致した、素封家の事故、金に糸目は付けん、遊廓の景氣じやによつて、總揚げじや。」

大變な事に成つたと、櫻井兄弟は呆れて居る。萬事は又右衛門の計らひで、一同の者へ多分の纏頭をやらせる、酒よ肴と取り放題、太夫は本格を三人、藝妓舞妓は總あげ、

フシ（酒の大海肴の山、飲めや唄への大陽氣。）

やがてお引けと云ふ仲居の相圖に、三人は別れくに部屋へ入る、櫻井兄弟は、固より謀つた事で御座いますから、間もなく歸りの支度を致し、會計書を取寄せて見ると、二百兩、兄弟は



今更のやうに驚いたが仕様がな、そこで、勘定を済して、荒木を起しに参りますと、荒木の敵娼は、豫て云合められた事ですから、お客様はえらう飲酔うて、今も休みに成つたばかりと云つて止める、仕方がないので、一旦部屋へ歸り、又時分を見計らつて起しに参りますと、荒木はもうよからうと支度を致し三人打伴れて吉田屋を出ましたのが、彼是七ツ時、

「未だ明けやらぬ大路小路、提灯の灯に照しつゝ。」

高教寺の簀影へ差掛りますと、提灯を持つて先に立つた甚助が石に躓いて踏跟めく途端、灯が消えて眞の暗、甚助は其のまゝ、

駈出す、後になつた甚左衛門、

兄弟、如何致した。」

と云ひながら、様子を考へて居ると、カチリと音が致したばかり、闇黒の中を兄弟は麻胡々々して居る内に、東の空が少し白くなつて参りましたので、透して見ると、又右衛門は、簀の傍の桃畑の中で、樹の根へ腰打掛けて、スバリ〜と烟草を吸つて居る。驚いたのは甚左衛門、

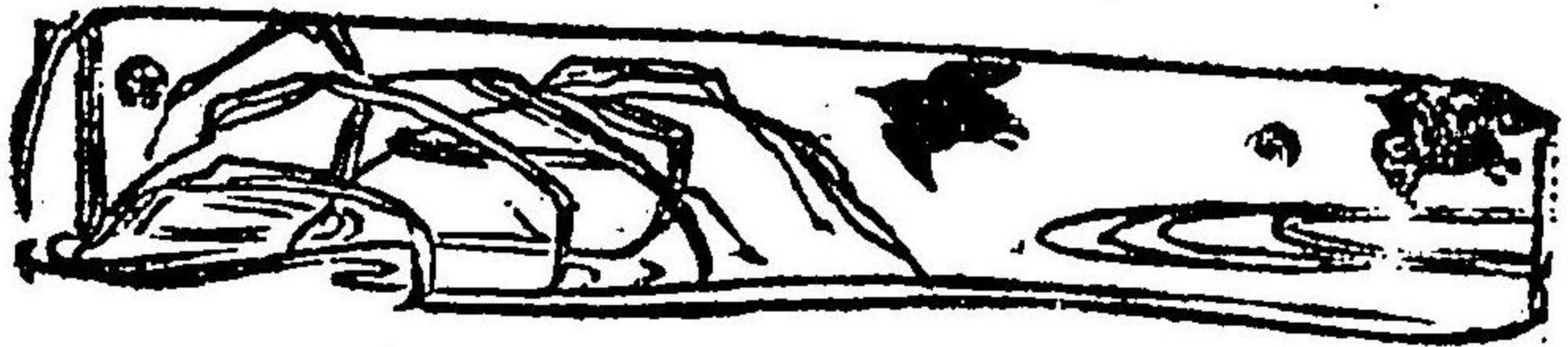
「甚荒木先生、如何致された。」

又「拙者は何とも致さんが、此の愚漢め、長い物で、突然に斬り付けをつたわい。」



フシ(夜はやうく)に明け渡り、あほうくご朝寝
を起す鳴く鳥。

見れば又右衛門は、竹内玄丹の脊に腰打掛け、烟草を吸つては
吹殻を玄丹の耳殻へはたいて居る。先年又右衛門が、恩師重兵
衛殿のお供をして、西國遊歴の折、法華嶽の薬師へ師の代參を
致した所、其山に籠つて居つた賊の頭は此の玄丹、其時又右衛
門、一刀の許に斬棄てようと思ひましたれど、武藝が出来るを
惜んで不心得を諒し、改心をすゝめた事などを話し、今度が二
度目の敵對なれば、殺して了はうと云へば、兄弟は、玄丹を殺
されては大變と、言葉巧みに止めるので、又右衛門は三度目は



免さぬぞと放します、玄丹は自分の刀を拾つて、雲を霞と逃げ
去りました。

又右衛門は、兄弟を誘つて、再び遊廓へ取つて返し、酒肴よ
藝妓よ舞妓よと、大盡遊びをして、財布の底を叩かせ、自分は
一旦、糸屋へ立歸り、モウ、出立の期も迫つたと、翌日武助を
堺の紅屋に居る妻の許へ其の旨を傳へ、自分は又櫻井兄弟の宅
へ来て見れば、

フシ(こはそも如何に櫻井兄弟は、何所へ行つたか
姿は見えず、家は藻抜の殻の明き家なり。)
流石の荒木先生驚いて、近所隣家や家主に兄弟の行先を尋ねま





したけれ共、皆目分りませんで、急いで糸屋へ引返し、數馬
 伊兵衛の兩人に、事の次第を話し、愈々これより東海道を上る
 支度を致して居りますると、武助が立歸りまして、堺大道筋龜
 屋徳右衛門方へ船から上げた荷物の中に、大和流の半弓に、寶
 藏院流の槍などがあつて、客は西國の藩士兄弟二人で一家買切
 り、是は確に櫻井兄弟らしいと申しましたので、然様かと又右
 衛門、オツ取刀で龜屋へ駆付ける、此の龜屋徳右衛門も亦、荒
 木の門弟なれば、喜んで奥へ通します。そこで又右衛門が、客
 の模様を尋ねると、武助の話しの通りで、兄は三十四五、弟は
 二つ三つ年少、人相は斯々で、衣類の紋は勘様と、徳右衛門の



話しに、荒木先生は、
 フシ（扱は愈々櫻井兄弟、逃げ損なつたは氣の毒な
 れぞ、見附けた當方は仕合せよしと。）
 又右衛門は心の中で喜び、徳右衛門は町人乍ら劍道の達人で御
 座いますから、泊り合せて武藝者の話しを高調子に話し出しま
 すと、番頭佐助が參つて、奥から御用との事に、徳右衛門が參
 りますと、
 客「今其方と話して居つたは武家のやうじやが、一家買切りで
 合宿はならんと申し付けたじやないか、然るを何故他の客を
 泊めた。」

と威丈高になつて怒つて居る所へ、サラリと紙門をあけた又右衛門、

又『怒るな櫻井、拙者じやわ。』

又ツと入れば櫻井兄弟、事の意外に驚き呆れ、暫時言葉も出ぬ始末、徳右衛門は吃驚、

又『驚くな徳右衛門、此は拙者の情人じや、此世は愚か、黄泉までも共に参る心得じや、肴は大分あるやうじや、酒々、酒が何より。』

又右衛門は神輿を据えて飲みはじめ、櫻井兄弟も、不愉快ながら對手を致して居るが、最早斯うなつては、荒木と共に下向



致すより外に途がないと、度胸を据えて、

櫻井時に先生、實は拙者も江戸表へ下向致す心組で御座るが、

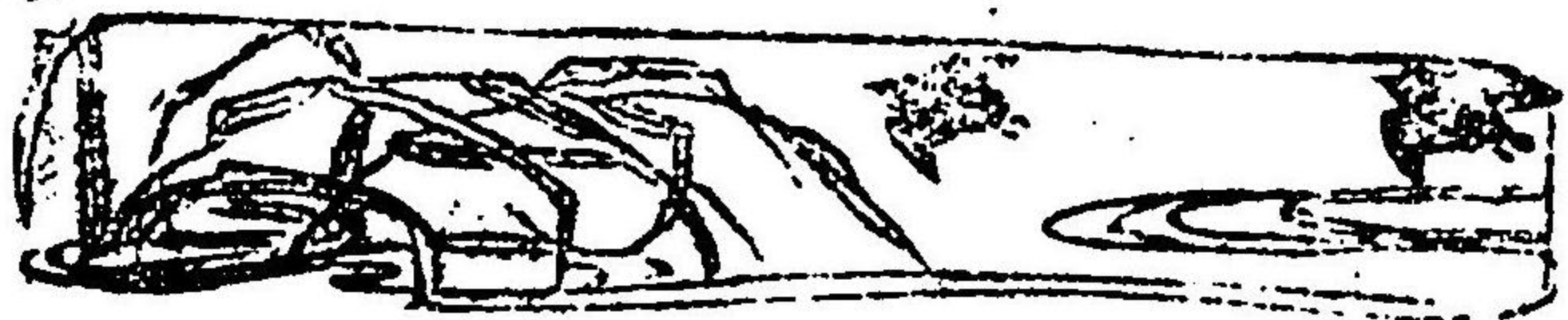
御同道なされるか。』

又『勿論同道致すが、貧乏の拙者、宿料小使は貴殿方に任せるが宜しいかの。』

櫻『エーそれは宜しい。』

話を極めて酒を切上げ、又右衛門は紅屋へ行つて、徳右衛門を呼び寄せ、仇討志望の事情やら、櫻井兄弟の事などを話して、兄弟を逃さぬため又右衛門の聲の掛るまで荷物を動かさぬやう頼み、紅屋には、妻お民を今暫時預り呉れるやう依頼を致し、





直に大阪へ引返し、三人に支度を急がせ、其許等は少しく後れて参れ、又右衛門が櫻井を伴れて泊る宿屋の門口へ必ず印を出して置くから、其向側に宿を取るやう、萬事の手筈を定めて、糸七にも發足の旨を語り、禮を述べると、七郎兵衛も別れを惜み、餞別まで呉れた厚志に四人は涙を流して喜び、愈々大阪を發足致して堺へ参り、これより又右衛門は櫻井兄弟を伴ひ、三人は少し後れて、

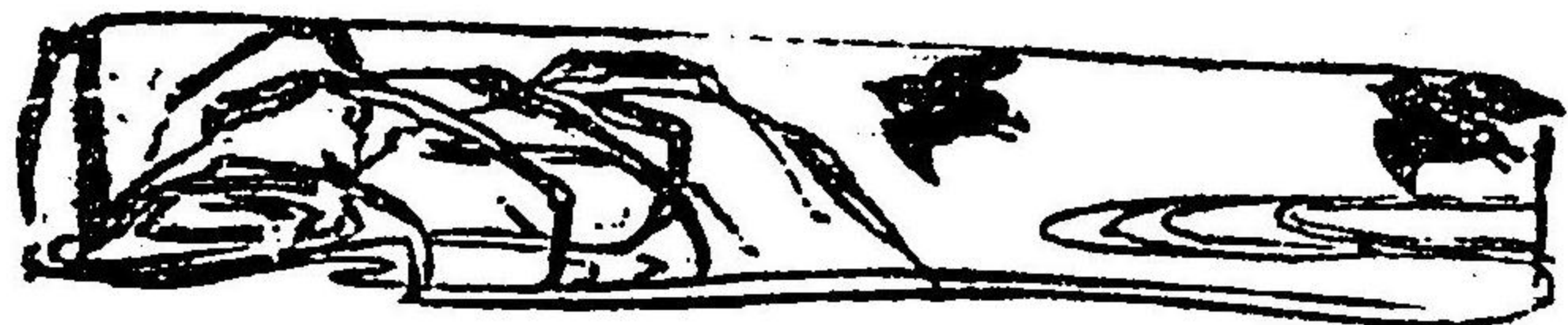
フシ(泉州堺を跡にして、大阪京都打過ぎつ、下り行くのが東海道、道中變つた事もなく、泊りくに日を重ね、着いた所が品川宿。)



品川の本陣釜屋へ着く、荒木、櫻井兄弟は、晝の支度をする、櫻井は荒木に向つて、拙者等は是より六番町は、阿部四郎五郎の屋敷へ参るが、同道致されては如何と、

フシ(流石の荒木先生も驚いた、阿部は今度の張本人、其所へ参るは夏の虫、飛んで灯に入るやうなもの。)

又右衛門が同行を断ると、日頃の意趣晴しに、冷笑しながら、荷物諸共、櫻井兄弟は荒木に別れて、六番町の阿部四郎五郎方へ参る、又右衛門は一人残つて三人を待合せ、夜になつて、和泉橋なる藤堂侯の家臣で荒木の門人梶原司を訪ね、四人共に茲



に一泊致して、事情を語ると、梶原の若黨新七と申す者が、六番町阿部の門前で荒物商賣を致し居るとの事で、翌日新七を呼んで、阿部の様子を尋ねますと、池田家と旗本衆との紛擾のあった後五十日は寺入、御免になると其後は侍が頻りに出入を致し、先日新七に秋山草履百足の注文があつた、二日程前に切髪きりかみの侍が参り、昨日二人の侍が着き、今朝秋山草履十足の注文があつた事などを話しました。又右衛門は心の中に。

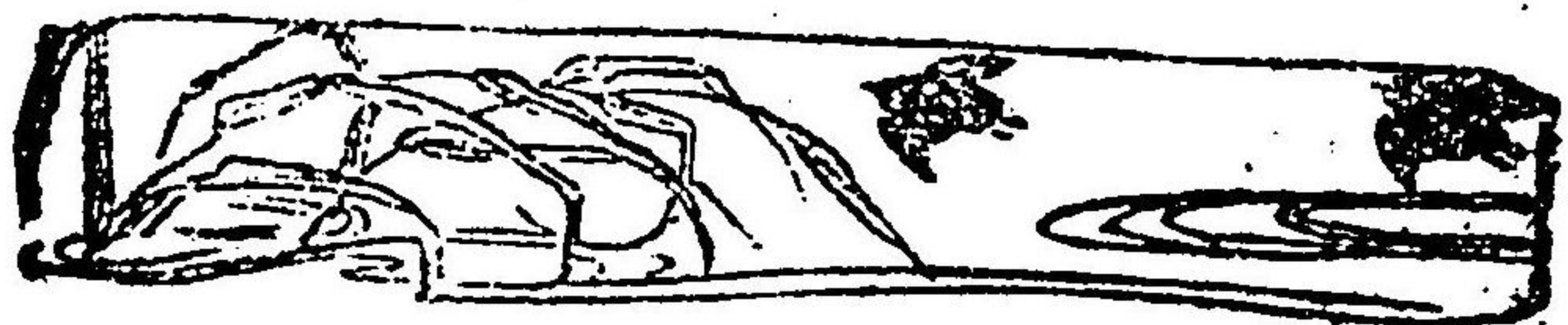
フシふし（前日は百足後には十足、三人に十足の草履なら、凡對手は三四十人。）

と又右衛門は、伊兵衛武助の兩人に、新七方の二階に忍んで様



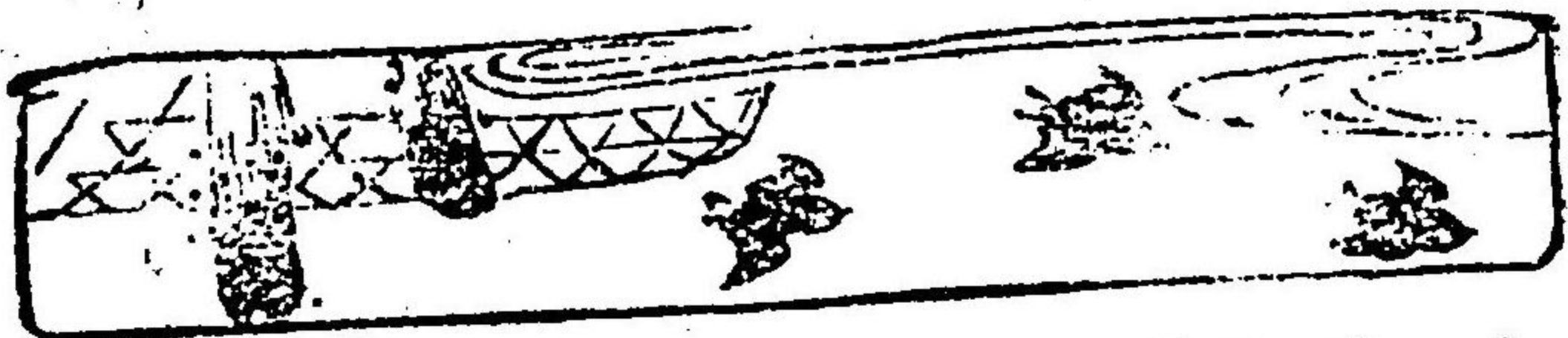
子を伺ひ、彼等の出立を見届けて、直様注進するやうに申付け、新七と共に兩人を遣はし、自分は梶原司に向つて、又「扱司殿、敵の者共先鋒は最早尾張三河に居るとの事で、後の三人が連絡致せば、同時に肥後の人吉へ参るで御座らう、下路へやつては不都合千萬じやによつて、成可くは伏見に待受けて伊賀路へ追込み、囊中の鼠となして討取る心得で御座れば頼む所は御領主藤堂殿のお力添へ、何卒此儀宜しく願ひ上げらる。」

荒木の頼みに、司は早速書面を認め、國許なる實父源右衛門の許へ早飛脚を出します。



フシ(荒木數馬の兩人は、今かくご待つ所へ、息を切らして駈付けたは、山住伊兵衛に石堂武助、三名只今阿部方を、出立致すと注進すれば、猶豫ならずと兩人は、伊兵衛武助を召伴れて出立つ、藤堂殿の上屋敷、梶原殿の家を後にして、上るは又も東海道。)

話し變つて櫻井兄弟に竹内玄丹の三人は、以前に發足致した又五郎の後を追つて、東海道を三島の宿まで参り、當所名代の三島明神へ参詣致し、社殿の扁額など眺めながら、廻廊を後へ廻



ると、大の男が腰の物を抱へ、笠を顔にあて、高駈をかいて寤て居る。御免と云ひながら、玄丹が跨ぎ、甚助が跨ぐ、續いて甚左衛門が跨がうと致す足首を捉へ、大聲で、

男「ヤー櫻井」

と起上るは又右衛門、兄弟は吃驚仰天、分けて鬼玄丹は、今度で三度目、命がないと雲を霞

櫻「是は荒木先生、如何して茲に。」

又「イヤ拙者も貴殿に別れ、二三日遊んで居つたが、何が扱、好いた朋友のないのは淋しいもの、大方最早お上りであらうと存じて、此街道を参つたが、幸ひ是なる明神に、何卒櫻井



兄弟に遇へるやうと、祈る精神神慮に叶つて、遇ふたは神の引合、サア共俱に参らう。』

と又三人共俱に、數馬伊兵衛武助の三人は例の印を合圖にして後より、道中變つた事もなく尾州は名古屋城下へ着いて、櫻井荒木三人は門前町の蔦屋金右衛門方に、數馬外二人は其筋向の伊勢屋三郎兵衛方に止宿致しました。

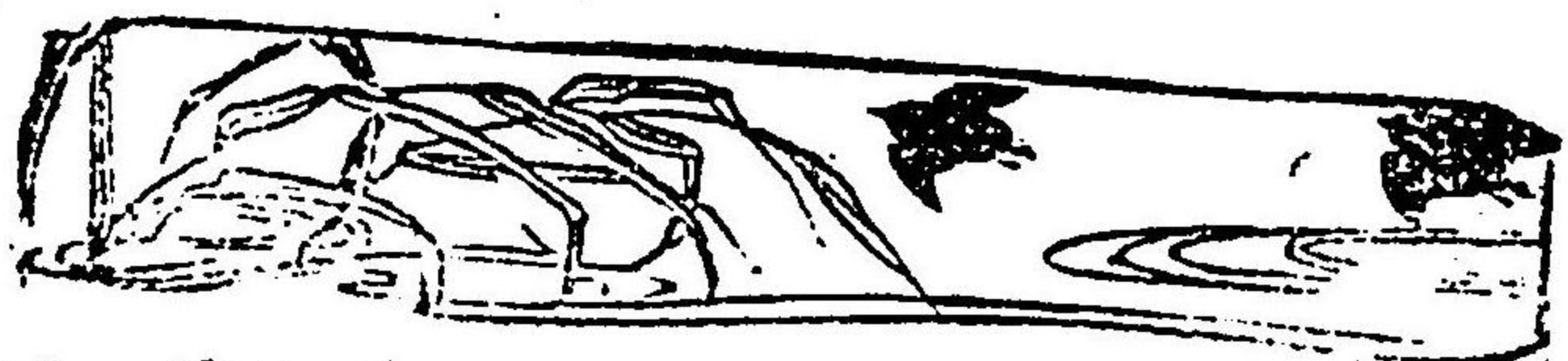
フシ(扱も櫻井兄弟は、青大將に見込まれた、蛙のやうな境涯を、何卒致して免れんと。)

僅の隙を見て兄弟相談を致し、弟甚助は荒木が抑へて居らぬを幸、荒木が兄と二人で酒を飲んで居る間に、宿の主人の所へ行



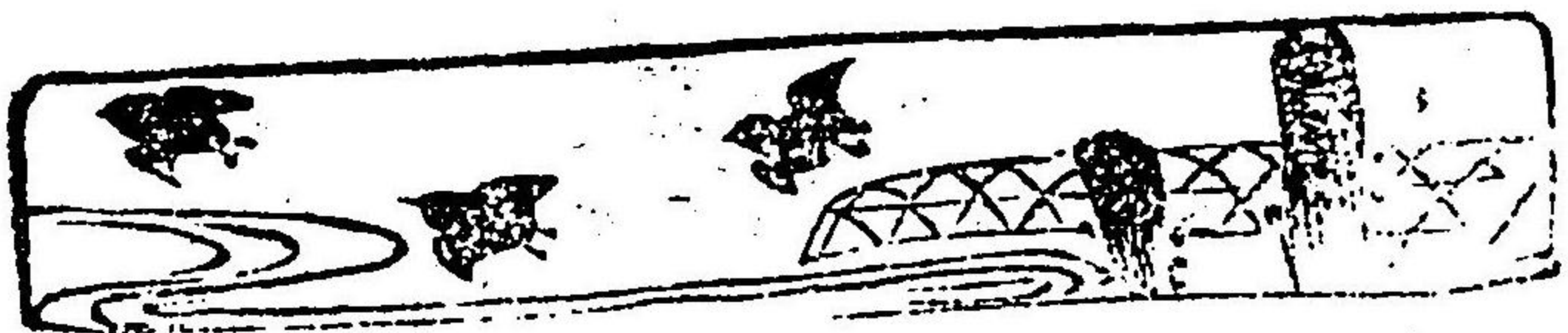
つて、荒木を胡麻の蠅と偽り、金を與へて、雪隠の義目板を切抜くやうに頼めば、主人は早速承諾を致し、自身鋸を持つて切抜く。やがて、甚左衛門雪隠へ起つ、又右衛門も共に参る、甚左は中へ入る、荒木は廊下へ膳を取寄せて、酒を飲んで居る凡二升の酒を平げても、甚左が出て参らぬのを不審に思つて、又右衛門雪隠の戸を開けて見ると、羽目板が切抜いてある。扱はと驚いて部屋へ歸れば、弟甚助の姿も見えぬ、荷物もない。流石の荒木も吃驚して、

フシ(伊勢屋に泊つた三人に、斯く話しも手短かに、駕籠を仕立て、佐屋街道、夜道ながらも

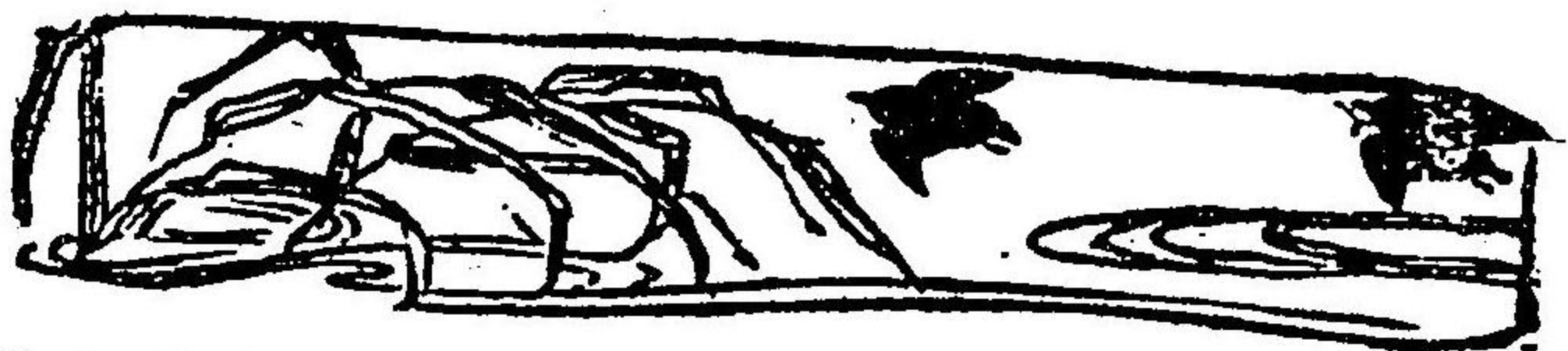


兄弟の、跡を追うてぞ急ぎける。

佐屋へ着いたが真夜中頃、一番船には間もある事なれば、錢屋といふ宿へ泊つて、四人は酒を飲みながら夜明を待つて居ると隣室に泊り合せたのは、山住伊兵衛同郷の原田玄順といふ醫者様、此室で、山住だの伊兵衛だのといふ聲を、紙門越しに聞付けて御免下されよと入つて来る、山住も意外の邂逅に、驚き喜んで、一別以來の物語りを致し、原田の身の上を尋ねると、長く奈良に居り、それより山城の伏見に滞在致し、名古屋へ参る序に、或者より手紙を托まれ、今夜の中に行く筈なれど、寒さは寒し、當家は懇意に依つて此宿に泊つたとの事。手紙の届け



先はと聞けば、門前町葛屋金右衛門止宿花井御兄弟。フシ荒木先生扱はご心附き、差出人を尋ねれば。原田は怪訝顔、山住も不審顔、花井といふは櫻井の變名と荒木から聞いて、伊兵衛は、仇討志望の大略を原田に話し、差出人の事を探ねれば、原田が申すには、自分は伏見豊後橋詰の山城屋といふ宿に逗留致し居ると、隣家吉田屋の客に病人が出来て頼まれて診察に参ると、殿めしい武家三十人程の中に、一人年若の人物、風邪をこじらしてチト手重になつて居た故、早速薬を與へると、二三日の中に全快致したとの事、それこそ又五郎に相違ないと、原田に頼んで、其の手紙を開封致せば、手跡は



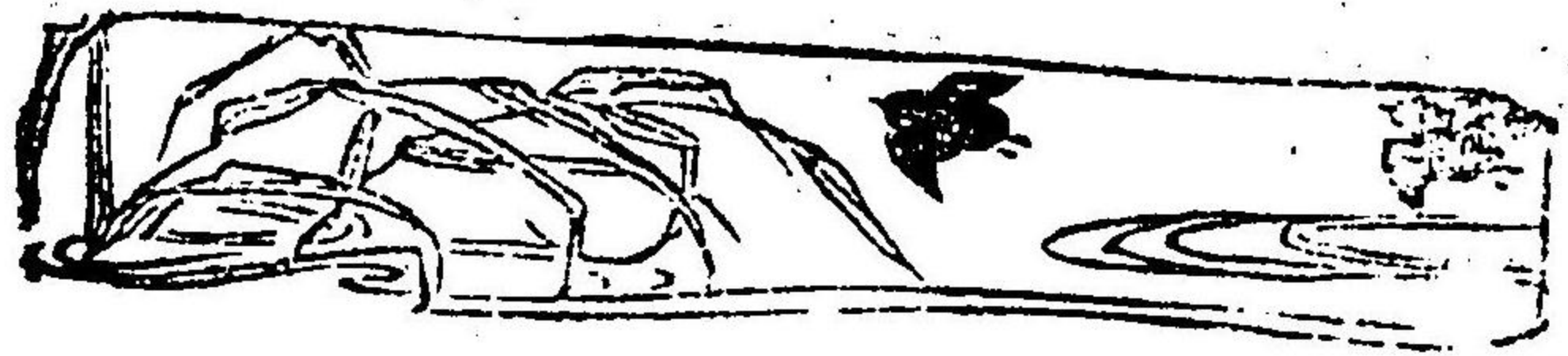
確に又五郎、御兩人到着次第大阪安治川口より乗船の手配も様
整ひ云々といふ文言、

フシ、長の早天に雨雲の、影を見止めたそれよりも
闇の夜道に燈火の、光りを見止めたそれより
も、なほも喜ぶ主従四人。

早々船を仕立て、さして桑名へ到着致す、又々駕籠を仕立て、
夜を日に繼いで、伏見へ着き、數馬伊兵衛武助の三人は奈良屋
といふ旅宿に止め置き、荒木は、昔の門人、京橋際福島屋宗右
衛門といふ豪商の家へ参りまして、一伍一什の話しを致し、以
前福島屋に使はれて居た清七と申す者が、今は吉田屋の養子に



なつて居るので、是を呼寄せ、様子を尋ねると、先月中旬から
三人五人と到着した其數は、武家が三十三人に町人体の者一人
一昨日は大兵の武家が一人着き、後二人参れば出立との趣に、
又右衛門は熱々聽いて、清七に向ひ、
又若し彼等が陸路を参らば、山陰山陽兩道共池田家の御領分
味方の利益云ふ迄もなけれど、若し大阪より船にて出立致さ
ば、都合悪し、よつて、何卒致して、道を伊賀路へ取らせる
工夫はあるまいか。』
との話しに、清七は稍少時考へて居りましたが、ハタと膝を打
つて、以前荒木の門弟で、今では出世して、伏見の厩を手を持



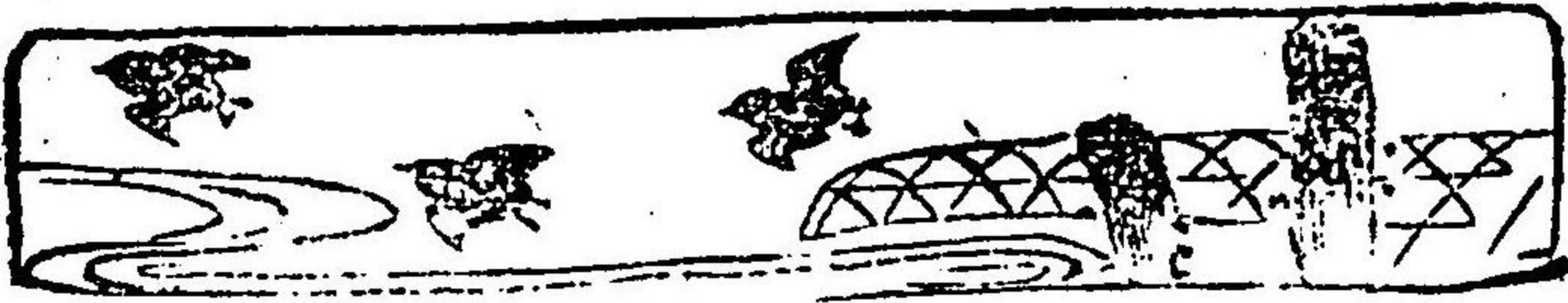
百六十
つて居る喧嘩好の善八と云を呼んで、相談したら宜しからうとの事に、早速氣の利いた若者を遣つて、伏見の御傳馬部屋頭善八を呼びますると、善八は何事かと心得、直に福島屋へ参りました。

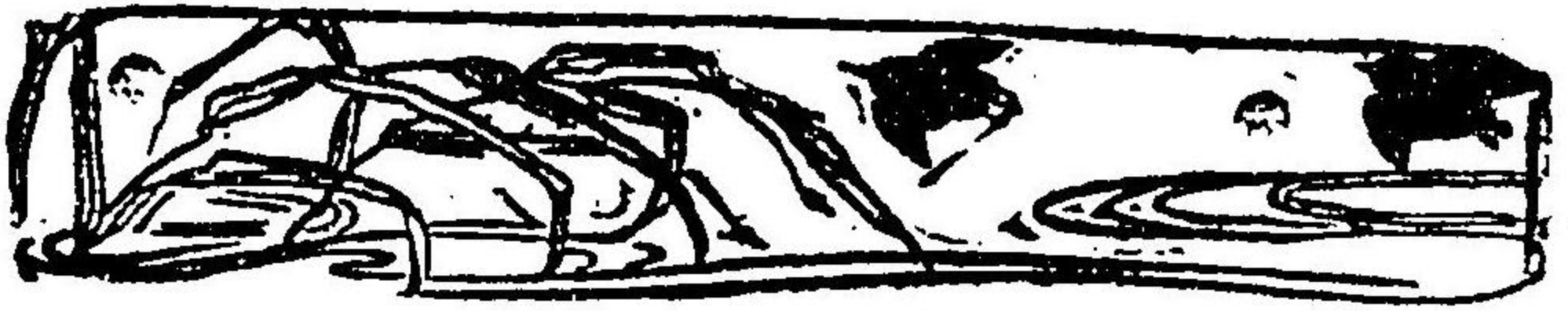
フシ「善八は如何にして、三十餘人の大勢を、伊賀路へ廻す工夫をなすか、伊賀路へ入れば囊の鼠、愈々荒木義村が、三十餘人を切つて棄て數馬を援けて仇討の、本懐遂げさすお話しは一寸一息仕る。」

【第五席】

フシ「山より高く海より深きは、父母の恵みと師の教へ、匹夫下郎の身分でも、恩を忘れぬ者ならば、これを眞實の大丈夫。」

善八は、荒木が大阪に道場を開いて居つた頃門弟となつて修行を致し、若氣の過失から、度々喧嘩闘争を致して人を害めましたが、荒木の教訓に依つて改心を致し、今では伏見御傳馬の部屋頭と相成つて居りますが、福島屋から招かれて、参つて見れば、大恩の又右衛門先生が居るので、驚くやら喜ぶやらの騒ぎ

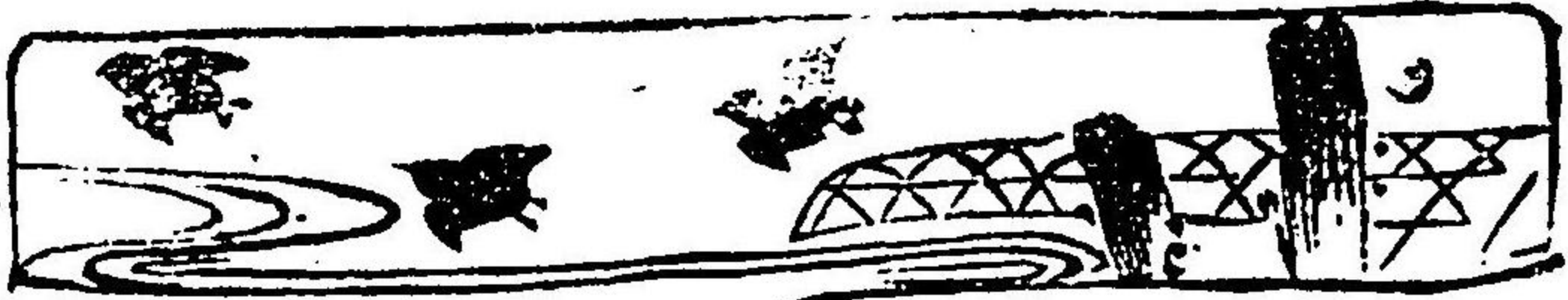




そこで又右衛門より、一伍一什の話しをさへまして、恩を報ずるは此の時と、少時考へて居りましたが、やがて頭を上げて、善宜しう御座ります、先づ彼等を脅かして川船には乗せずして、陸路をもやらん工夫を致しませう、御存じの通り、大阪では兩池田の御勢力が大層で御座りますから、是をだしに遣つて、巧く流言をさせませう。』

と善八は手配萬端の打合せを致しました。

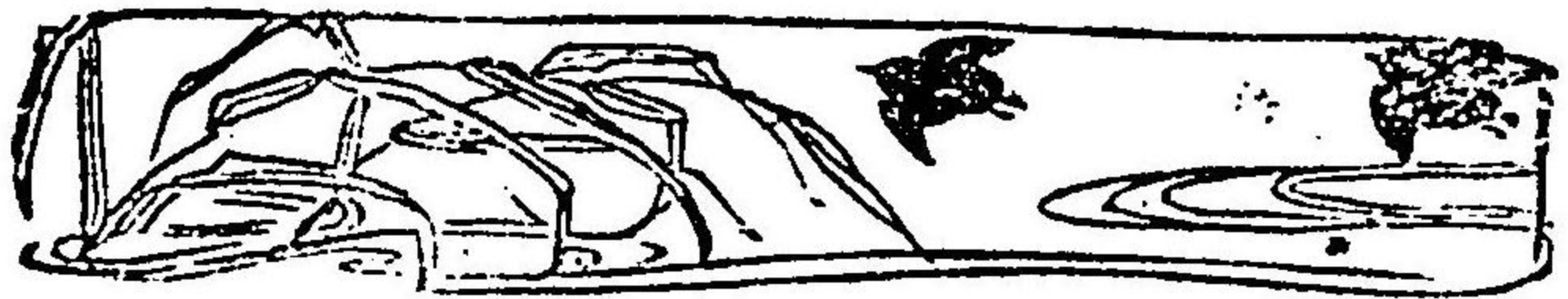
豊後橋詰吉田屋三右衛門方に止宿致す三十餘人の面々は、是ぞ河合又五郎始め守護の浪士等で、櫻井兄弟が着き次第、川船で大阪へ下り、安治川口より船に乗つて、肥後の國人吉へ下向の



手配整つて、兄弟の到着を待つて居ります。吉田屋の表二階で近藤佐内、吾孫子彌之助の兩人が碁を打ち、傍に四五人が見て居ると、表の方で高調子に話す馬子の言葉には、昨日大阪に於ては、因州、備前兩池田家の藏屋敷から、何百人の人数が、陣笠を被り、弓矢槍薙刀を携へて繰出したから、今にも戦争が始まるかも知れぬとの事、

フシ(是より下る一同の、心に掛るは兩家の手配り圍碁に心は奪はれ乍ら。)

これを耳に入れた一同は、不審の思ひに顔見合はせて居る所へ櫻井兄弟到着致し、別室で、荒木に附纏はれて困却した物語



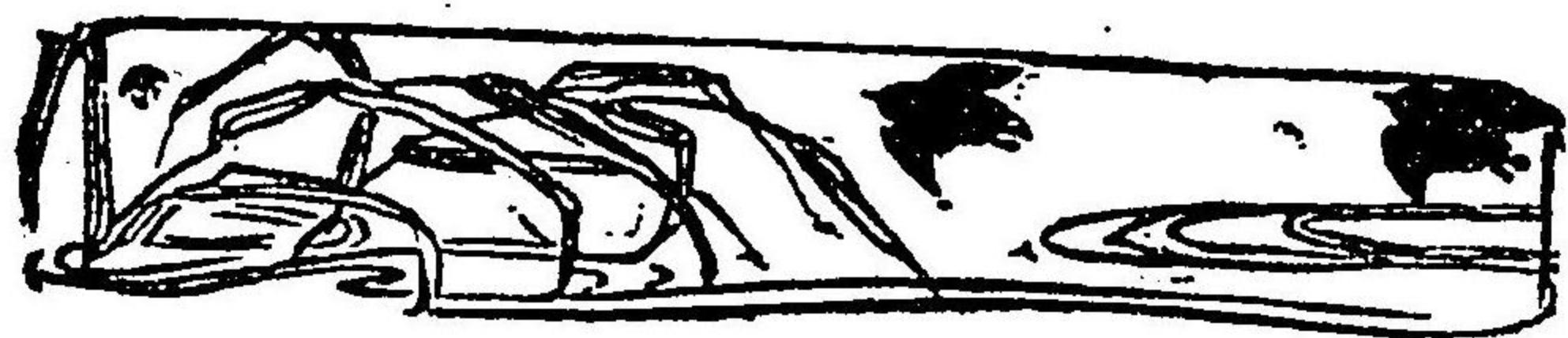
百六十四
 りを致して居る時、此座敷へ宿の若い者が来て、本家の主人と
 大阪の客とが、縁談の相談をするに付いて、暫時隣の間を拜借
 仕りたいと頼む、大阪の客とあらば、彼地の様子も知れよう
 と、早速承知致して、紙門を閉切ると、間もなく隣座敷で男二
 人の話し聲、此方の浪士面々は、耳欬て、聴くと、知るや知ら
 すや、大阪の客人が申すには、今度大阪では、因州、備前兩家
 の武士が多数上つて参り、藏屋敷では足りなくて、町宿下宿に
 止宿致し、大層の混雑故、婚禮の日延をして貰ひたいとの事、
 對手が其の次第を尋ねると、

男『詳しい事は分りませんが、此前江戸で、池田様とお旗本と



えらい争ひが御座りましたのが原因で、其の對手とか敵とか
 い大勢伴れで上つて来て、大阪から船に乗るといふので、船
 番所へも池田様から出張なされるし、東は八軒町一丁目の渡
 し、森口邊りまでも出張つて、御座ります、加之、今度の御
 城代は池田様の御縁者じやとやらで、是もお出張りなされる
 さうじやから、其の人等が大阪へ行つたら皆殺されるじやら
 うといふ風評で御座ります、今度の騒ぎの鎮まるまで日延を
 願ひたいもので御座ります。』

『是を聞いたる浪士一同は、すは事こそ顔色
 變へ、外の座敷へ飛込んで、居合す浪士へ、



斯様々々ご物語る。

櫻井兄弟始め一同は、驚き呆れ、如何致さうかと心配致せば、竹内玄丹進み出で、

「各々其心配には及ばぬ事、是より路を轉じ、伊賀越をなし、伊勢路へ下らば、船の都合は如何様にも相成るで御座らう」
昔「如何にもそれは上分別、然らば早速明早朝、當地を出立致すが宜しからう。」

といふ事に決定りました。

「荒木又右衛門先生は、牒し合せし計略の、首尾は如何にと待つ間遅しと、駈付けました善



八が、額の汗を拭ひつゝ。

「善先生、お支度く。」

又「話しも致さず、お支度とは何事じや。」

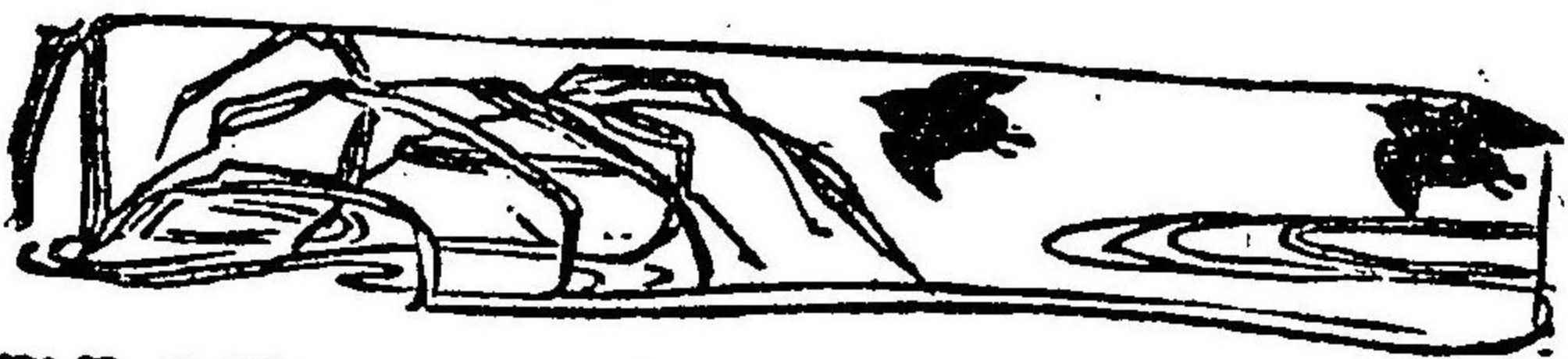
「善今日日が暮れると、吉田屋の權助の案内で侍が二人來まして、馬が三十六に駕籠が一挺、伊賀の上野まで通しといふ注文で、金に糸目は附けぬ故、夜の中にも立ちたいといふ事で御座りますによつて、貴下方は直にお支度、丈夫な馬を四疋選んで置きました、是から直に夜通しでお出でなされ、ナア
ニ、何程御傳馬御用じやとて、良い馬ばかりは出しません、彼奴等が伊賀の上野手前の島ヶ原まで着くのは、早くも明晩



の四ツの頃、事によつたら、九ツにもなりませうか。』
 『天にも登る心地にて、荒木は悦び勇み立ち、
 奈良屋に泊つた三人に、事の次第を話して支
 度を急がせ、善八が報恩の、心盡しの馬に乗
 り、主従四人打伴れて、伏見の里を出でたる
 は、夜も早五ツと更けし頃、小荷駄なれども
 馬は迅速、夜道を辿りて加茂笠置、大河原や
 島ヶ原、伊賀の上野をさしてぞ急ぎける。』
 扱伊賀國は安部郡上野に御在城 藤堂大學 頭高繼侯御守役は梶



原司の父源右衛門、年既に七十歳の上に出たれど、常に主君の
 御傍で忠勤を勵み居ると、夜中ながら荒木又右衛門お目通りを
 願ひたいとの事、先日子息司よりも書面到着致し居れば、扱は
 荒木が参つたかと、早速一間へ通し、兩人久々の對面、挨拶終
 つて、
 又『御老人、兼て御賢息を以て願ひ置きましたる一條、愈々明
 後日、彼等が當御城下へ到着致すを待つて、本懐を遂げたき
 望みに御座りますれば、何卒御配慮願ひ上げ奉る。』
 『それは、子息よりの書面にて委細は承知致し居つた、
 容易ならぬ御苦心の程推察致す、然らば、玄蕃殿新七殿にも



百七十
紹介致さう、御同道なされ。」

是より源右衛門は荒木を伴れて、重役藤堂玄蕃の屋敷へ参り、面會を申し入れると、一間へ通される、見れば藤堂玄蕃 同新

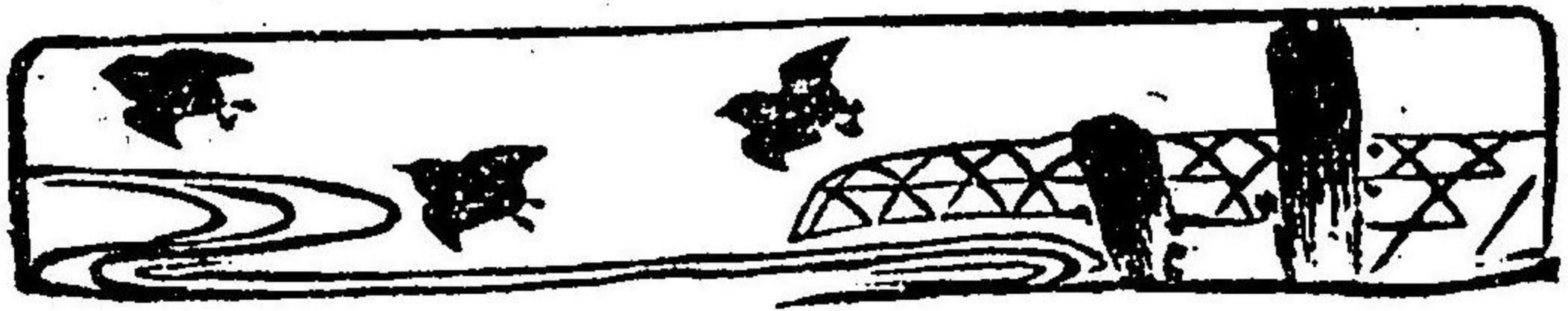
七同采女 同多門の四人が、何か相談最中、源右衛門早速荒木より歎願の一條を述べますると、

「然らば、明早朝主君に言上致さう。」

「それが何より、幸彼を召伴れて御座る。」

「それは、高名の荒木氏、此席へお通しなされ。」

源右衛門は又右衛門を呼込み、一々紹介致せば、又右衛門は懇勲に挨拶を致し、



「(備も今度の仇討の、當の數馬は若年未熟、外には拙者と従者が二人、都合四人の小勢にて對手は三十有餘人、而も各々一流の、奥儀を極めし武士なれば、本懐遂ぐるも容易にあらず、何卒敵を逃さぬやう、御當家様の御手配單に願ひ奉る。)

玄蕃始め並居る一同は、熱々感服して、

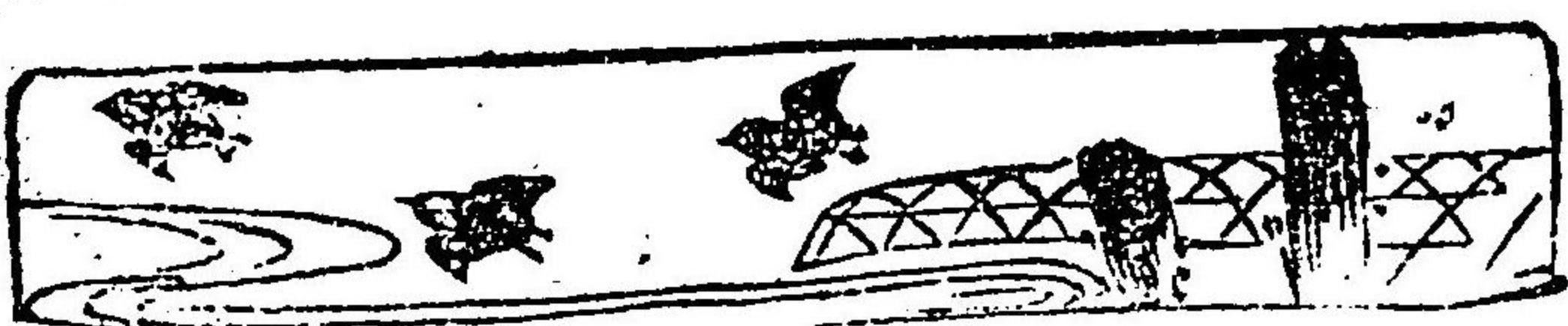
「實に天晴れな荒木氏の御精神、斯様な大敵を引受け乍ら、助勢を乞はず、たい取逃さぬやうにして呉れよとは、誠に勇



百七十二
 ましい御言葉、流石は當時並ぶ者なき劍客、明早朝一同より
 宜しく主君に言上致し、充分手配り致す間、芽出度本懐遂げ
 られよ。』

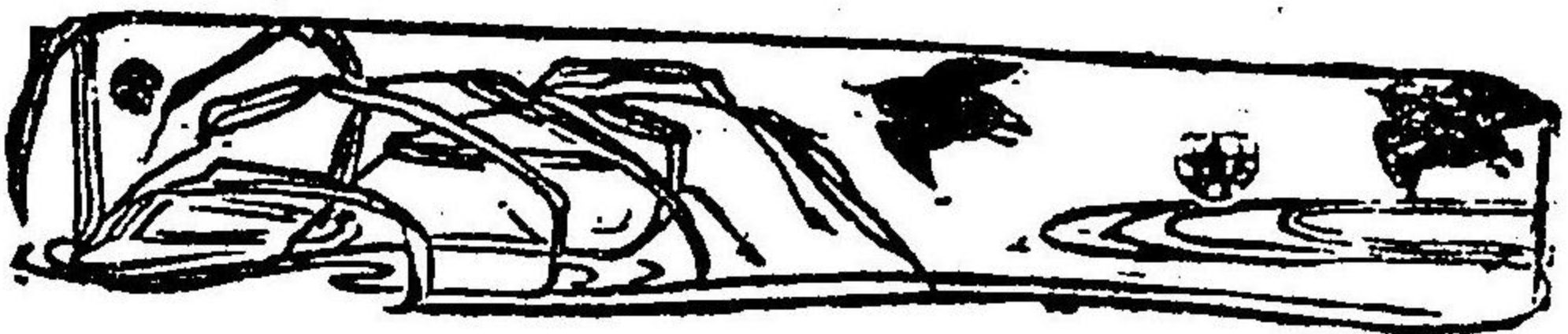
そこで又右衛門は、有難く禮を述べて、旅泊若松屋に歸り、三
 人に右の趣を話す、一同は勇み立つて、當日の來るのを待つて
 居ります。

フシ敵一同は伏見吉田屋に、泊り合せた浪士の面
 々、夜明けぬ中に出立せんご、度々厩へ催促
 し、急げご焦れごいつかな、日は昇れ共馬は
 揃はず、地團太踏んで一同が、いたくも腹を



たつの刻、過ぎて巳の刻近き頃。

漸々の事で、小荷駄三十六頭、乗物一挺吉田屋の前へ揃ふ、又
 五郎は駕籠に乗り、他の三十四人外に町人木綿屋十兵衛は馬に
 乗つて、駕籠を中央にして前後を警衛つて、伏見を跡に伊賀街
 道へ出掛ける浪士は、大島流槍術河合又五郎、寶藏院流鎌槍櫻
 井甚左衛門、大和流半弓櫻井甚助、真傳流山田真龍軒、穴澤流
 薙刀星合團四郎、一刀流吾孫子彌之助、同松下治作、同池田丹
 吾、同大島團衛右門、同鎌田十郎、卜傳流溝口金十郎、同林
 東馬、無念流大澤十左衛門、東軍流東軍英翁齋、同近藤左内、
 一刀流伊東昇、竹内流竹内鬼玄丹、八重垣流今井白翁軒、眞影



百七十四
 流東屋五郎兵衛、同渡伊之助、間庭念流宮城忠助、木葉一刀、
 流種田大覺、左無理流宇佐山幸吉、左無理流槍衛荒川瀬兵衛、
 駒木根流鐵砲齋藤一角、今井田流今井田丈之助、本山流津田作
 内、静流薙刀井上平藏、真刀流兵藤玄蕃、無眼流宮内太郎、河
 島流河島勇藏、吉岡流吉岡治三郎、中將流富永半七、無敵流城
 山甚九郎、鞍馬八流野村良平、都合三十五人、馬上の面々如何
 に急がしても、部屋頭善八豫ての注意、馬子も人足も年老か病
 人者、馬も擇りに擇つた病馬瘦馬、遅鈍いこと甚しい。馬子は
 叱られても無頓着、

馬「旦那様、無効じやわい、伏見の馬と来た日にやア、満足な



のアー疋もねい。』

大河原まで参つた頃は最早日の入り、一同倦み果て、酒手を遣
 つたり、だましたりしても、其の時二三町は早く行れど、善八
 よりの云含め、直に又遅鈍々々、馬士の高調子。

フシ(塵も積れば山となる、遅き人馬の足數も、重
 ねくして漸々に、着いた所は島ヶ原、まだ上
 野迄一里半、夜は早更けた四ツの頃。)

最早一同は太く憤つて、島ヶ原へ泊ることに相成る、杉本屋と
 いふ旅宿に着いて、駕籠や馬を返し、旅宿へ小荷駄三十六頭駕
 籠一挺明朝未明に取揃へるやう申付けますと、何分小さい宿で



御座いますれば、馬は逆も揃ふまいとの事、然らばありたけの馬を曳いて来るやうにと申し付けて其夜は休眠み、翌朝薄暗い頃より起出で支度を整へ、待つて居りますると、参りましたのは、駕籠一挺に馬四頭、又五郎は駕籠に、櫻井兄弟外二名は馬に乗り、残り三十二人は徒歩で島ヶ原を發足致し、一里半の道を歩行いて、伊賀の國上野の城下見附まで参りますと、朝日が差昇りました。そこで一同門へ差掛りますと、嚴重な御警備、番「コレ〜何所へ通らつしやる。」

浪「エー我々は肥後の國人吉相良壹岐守の藩士、都合あつて勢州神社より乗船致すために罷り通る者、通行を許されたる存



する。」

番「宜しい、人数は何程。」

浪「櫻井甚左衛門外三十六名。」

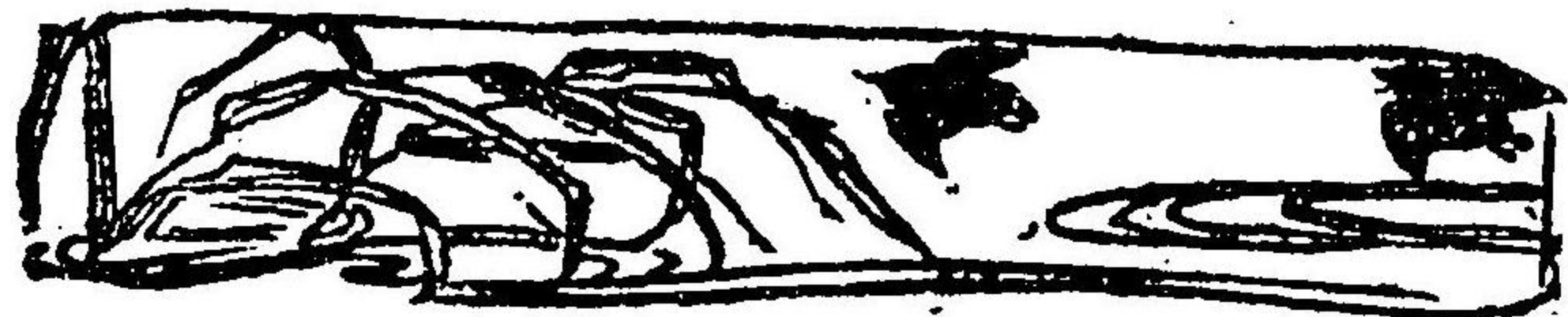
足輕頭立出で人数を調べ、

足「乗物入れて三十六名、ハイお通り。」

と一同ゾロ〜と入れば、門の扉を閉切る、如何なる仔細か更に相分らぬ一同は、新町へと通掛る、頭上に當つて、數挺の鐵砲、筒口揃へてド、ド、ド、ン、一同はアツとばかりに驚き、町人に尋ねれば、主君の追鳥狩との事に、何の事じや、驚ろかせをつたわいと、一同安心を致して、城下馬喰町一丁目二丁目と

過ぎ、三丁目角鍵屋ケ辻にと差掛る。

フシ(時は寛永十四年十一月七日、渡邊數馬に荒木又右衛門、山住伊兵衛に石堂武助、願ひ願うた敵討、三年の間辛苦せし、其の効茲に現はれて、時節來つて今日只今、各々着込鉢巻褌數馬は主君より賜はりし、大和千手院行信二尺二寸の一刀に、備前正光の差添、荒木は師より下されし、三池の傳太光世二尺三寸六分の一刀に、左文三郎左文字一尺三寸の差添、

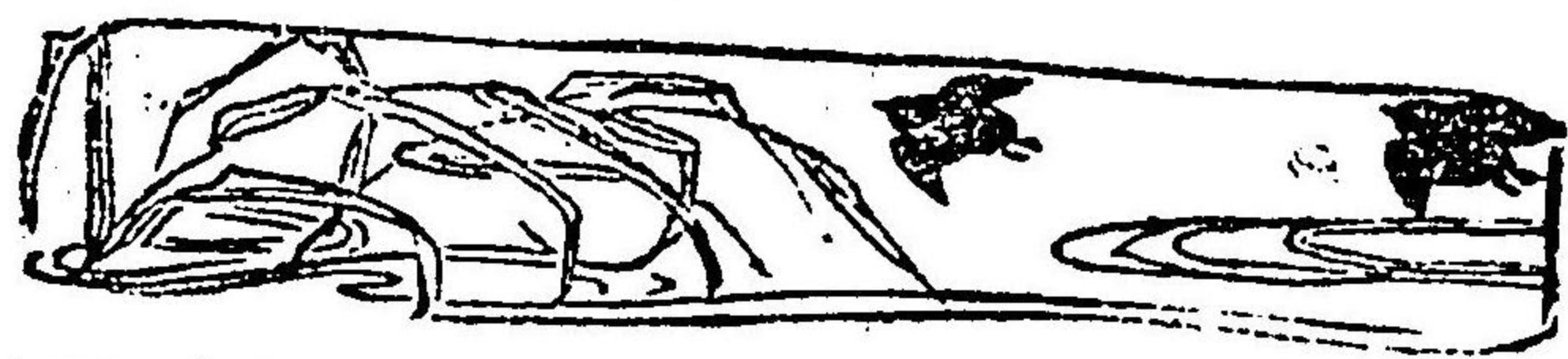


伊兵衛武助の兩人も、各々覺えの利刀帯び、夜も明けやらぬ時刻より、上野の城下馬喰町三丁目なる鍵屋ケ辻、金傳寺大門前に、刀の目釘濕してぞ、敵河合の一行が、今や來るご待ち受けたり。

又右衛門は三人に向ひ、又三十七人の中、乗物に在るが又五郎なれば、伊兵衛武助は數馬に力を協せ、唯乗物を目指せ、他は皆又右衛門の敵じや又右衛門不幸多數の中に倒るゝ共、助けようとは思ふなよ、必ず又右衛門に心を引かされず、三人共に一致して、又五郎



を討取れよ。』

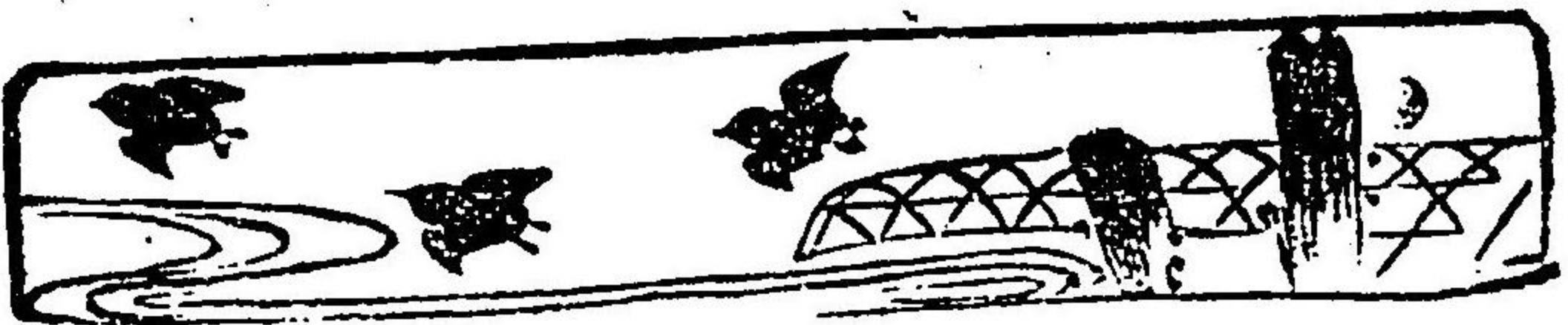


フシ(「畏つた三人が、答の中に人馬の音。」)

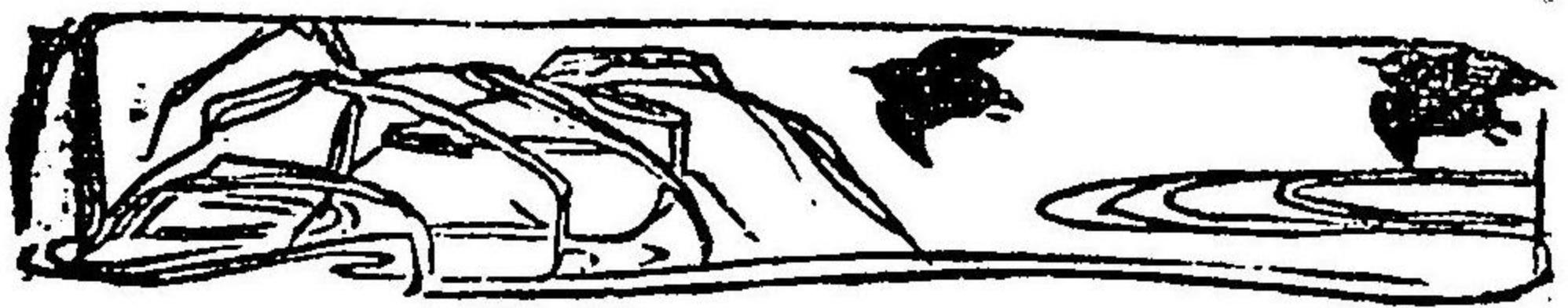
扱はと又右衛門は、三人を金傳寺の門内に忍ばせ置き、ソツと出たる鍵屋の角、見れば眞先に小荷駄に乗つて来るは櫻井兄弟なり、躍り出でたる荒木は大音聲に、

又「ヤア、櫻井兄弟。』

兄弟の耳には宛然落雷、コレハと驚く中に荒木は飛込む、甚左が手槍取直す間もあらばこそ、三池傳太の一刀抜打に、甚左の右脚切落せば、アツと叫んで頭轉倒、驚き乍ら甚助が、半弓に征矢を番へ、引かんとするを彼時早く、躍上つた又右衛門義村



は、弓弦矢筈横面を横に拂つた一刀に、馬乗のまゝに息絶えたり、後に在つた津田作内、己れと云様切付けるを、躰を轉じて横なぐり、首はコロリと落ちました、吾孫子彌之助之を見て、飛鳥の如く飛掛る、面倒なりと又右衛門、左の肩先切下げる、大村十左衛門近藤左内、左右一度に切付けるを、潜りながら突掛ける、劍先は左内の左の腋腹、急所の負傷に之も絶息、返す刀に大村の、足を拂へば倒るゝを、バラリとばかり後袈裟、又右衛門義村は光世の一刀血拭ひし、案外脆き奴等共、サア来い來れと身構へる、後より来る今井白翁軒、ヤツと掛けたる荒木の矢聲、驚く所を打つた手裏劍、左の眼中深く打たれて、其儘

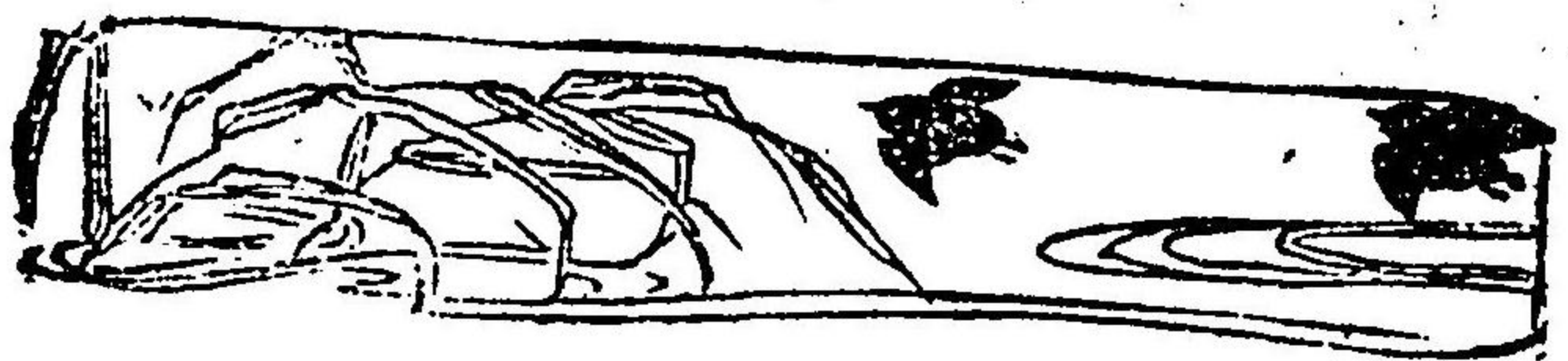


倒れる、ソリヤ荒木がと一同が、喚び立つ共、鍵屋の土藏と、隣家松屋の土藏との間に身を置いた荒木の早策、宇佐山幸吉、九尺柄の槍取つて突掛るを、空を突かせてケラ首を、取らんとするを繰込む早技、荒木は一刀平手に拂ひ、開くを附入る劍の切先、幸吉眉間を割られ、槍を落してドウと伏す、死骸を越えて林東馬、氣合と共に切付けるを荒木はガチリと受止めて、引かんとするを切返せば、面部を割られて息絶える、宮内太郎伊藤昇河島勇藏、切先揃へて飛掛り、伊藤は小手を落されて河島は面部を突かれ、宮内は胸部を突かれ、三人均しく退く、折柄小影に齋藤一角、鐵砲おつ取り狙ひを付ける、卑怯なるぞと義



村が、拂ふ刀に引鐵の、調子狂つてズドンと一發、彈丸は頭上を飛び過ぎて躍り掛つた義村の、刀に一角眞額を、梨の如くに斬割られ、鐵砲投出し倒れ伏す。
フシ(お話變つて、數馬に伊兵衛武助の三人は、荒木の身をば氣遣へご、嚴しき教訓守りつ、駕籠の來るのを待ち居れご、更に來らん様子なし。)

城下の町々は豫て布令があつたので、何れの家も戸を開けず、二階から見物して居る、三十餘人は皆眞の勇士のみにあらず卑怯にも逃出す奴もあると、藤堂の御家來衆が直に鐵砲を向け



るので驚いて逃戻り、皆荒木のために切棄てられる。數馬は敵の來ぬのをもどかしく、鍵屋の裏手を廻り出ようとしたる折、駕籠を昇いた人足は、刀の刃音に驚いて皆散々に逃失せた。駕籠を立出た又五郎、屋根に附けたる手槍をしごいて此方をさして來る様子に、主従三人は、

フシ「天の與へと喜びて、用水桶の小影より、ドツ
ご一時に躍り出で。」

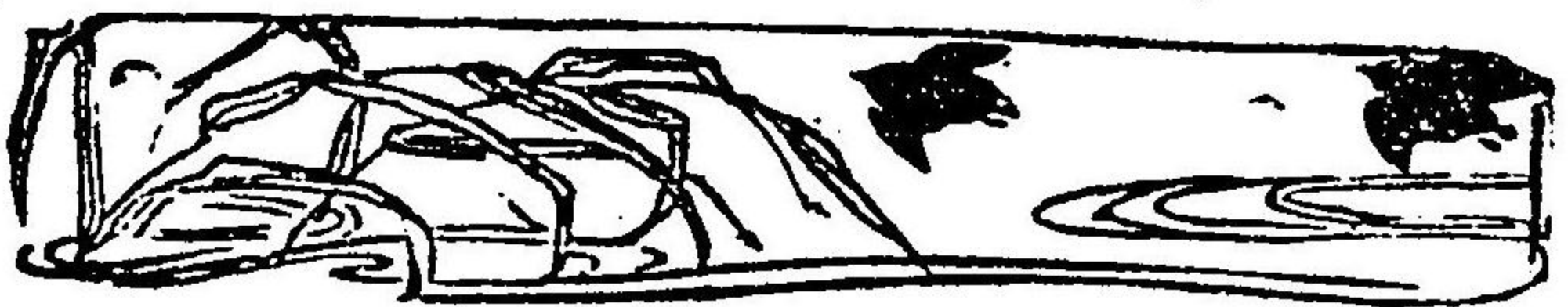
數「ヤア珍らしや又五郎、不俱戴天の父の仇、汝を討たん其爲に、三年間の艱難辛苦、願ひ叶ひて今日茲に、汝と會ひしは天の助、いざ尋常に勝負致せ。」



と行信の一刀引抜いて身構へるを、アザ笑ひ、

又「猪口才なる敵呼はり、定まる因業是非に及ばん、いで返り討に致し呉れん。」

と槍をしごいて突掛る。數馬は若年未熟とは云ひ乍ら、孝心凝つたる刀の切先、又五郎は若年乍らも槍は手練、電光石火と戦ふ折柄、溝口金十郎大島團右衛門、又五郎に助太刀致さんと切つて掛れば、伊兵衛武助の兩人は、邪魔しろぐなと渡り合ふ、若黨なれど忠義無類の石堂武助、荒木に請けたる眞影流、團右衛門の眉間に切付け、ひるむを附込み、利腕丁と切落す。これに驚く溝口を、伊兵衛は右の肩先へ切込んだ、渡伊之助鎌田十



郎、こはしほらしと切付けるを、又もや二人が切り倒す。なれ共兩人薄傷を蒙りましたれば、手當を致して居る所へ、

フシ(白柄の薙刀引提げて、徐々出でし老人は。)

穴澤流の達人星合團四郎、

星「小賢しき小奴の舉動、大人氣なけれと星合が對手になし呉れん、兩人一度に掛れ。」

エー過言なり老惚奴と、兩人が切掛れば、星合せ、ラ笑つて、イデ手並を見せて呉れんと、打振る薙刀は風車の如く、コグ手薙手、突手開く手十文字、宛然星合の一身は一口の薙刀の蔭に在つて目には入りません、兩人が聲を掛合つて切り結ぶ、星合



いらつて、横様に薙いた一手は一文字、

フシ(受損じたる石堂武助、脇腹深く斬込まれ、無

念と叫び倒るゝを、振返つたる星合は。)

只一薙と伊兵衛に切付ける、己れ同僚の敵と、伊兵衛が切つて掛る其の時に、

フシ(待てと一聲荒木又右衛門義村は。)

又「其敵受けた、早く數馬を見届けよ。」

伊兵衛はハツと心得て數馬の方へ參ります。又右衛門義村は、大聲にて、

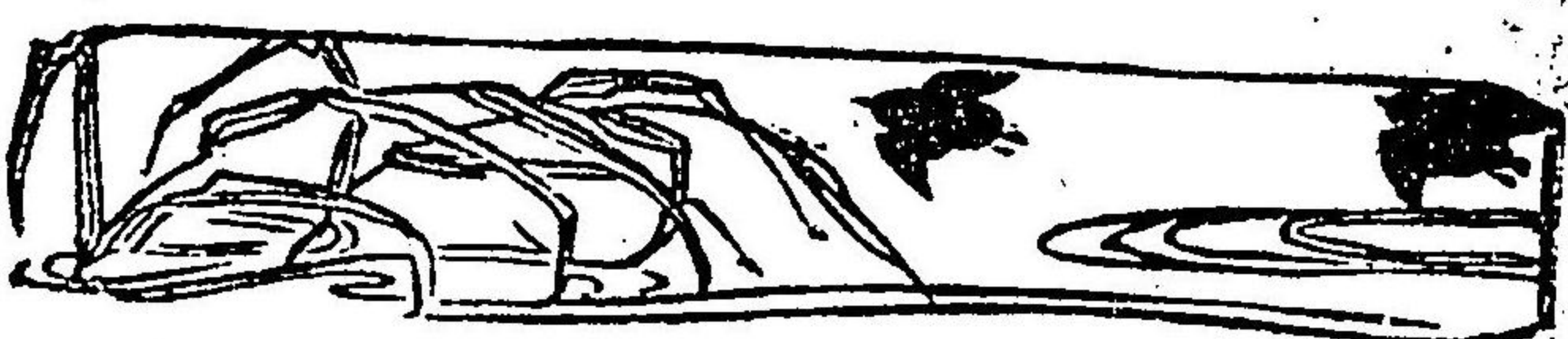
又「物々しや星合氏、荒木なるぞ。」

『オ、待ち設けたり好敵、イザ参らう。』

と星合が切込む雑刀、又右衛門義村は一刀の下に蛭巻の邊りより切落し、驚く所を又一刀、逆袈裟にと切込んだ。ウームと一聲残して倒れた死骸を飛越え、數馬を氣遣ひ駆行く後から、

今『ヤア卑怯なり荒木氏、今井田丈之助之に在り、引返されよ。』
又『卑怯とは舌長き一言かな。』

と振返る途端に今井田が切付けるを、躰を交して空を切らせ、踏跟めく弱腰車斬、荒木が刀の血拭ひを致す横手から、物をも言はずに切掛かるを、心得たりと引外し、何人かと思れば竹内鬼玄丹、



又『汝は竹内玄丹、豫て申した三度目、覺悟は好いか。』

と大喝一聲、利腕バラリと斬落し、倒れる奴を踏付けて、

又『愚漢奴、是で三度目、よく／＼業の盡さざる奴じやなア。』
と首打落す向ふより、大兵肥満の大男、

『ヤア珍らしや荒木先生。』

フシ(長き鎖の陣鎌携へ、莞爾笑つて佇むは、是ぞ名代の山田眞龍軒。)

先刻から二十餘人を斬つて捨たる剛氣の荒木義村は、

又『久方ぶりなり山田氏、此度の御役目御苦勞千萬、聞及んだる貴殿の御手並、實地の勝負は互ひの僥倖、いざお出で合あ

